市民による「色彩参画」と
街並みの景観イメージとの関係に関する研究

小田　憲治

環境計画学科環境社会計画専攻において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2005 年度

承認

指導教員

第一章

序論

第二章

実験・調査概要

第三章

分析方法

第四章

調査対象者の景観認識

第五章

調査対象者の抱く
街並みの景観イメージ構造

第六章

景観認識、実験への参画と景観イメージの関係

第七章

結論

市民による「色彩参画」と街並みの景観イメージとの関係に関する研究

近藤研究室 0212007 小田憲治

1.研究の背景

日本のほとんどを占める普通のまちでの、景観計画の策定等といった景観形成に市民が積極的に関わるためには、「まず守りたい景観・風景・街並みを発見する必要がある」[1)]。景観形成への市民の積極的な参画を促すためには、日常の街並みの景観を捉えなおし、発見する必要があると言えよう。

人は街並みを体験することで、景観の構成要素や特徴を認識すると同時に、街並みに対するイメージを抱き、街並みの印象を景観イメージとして感じることとなる。景観認識や景観イメージは街並みの景観を捉えるために重要な要因であると考えられる。

色彩は街路景観の把握に大きな影響を与える要因である。色彩を用いることで建物などの景観構成する要素を排除することや形を変化させることなく、市民が景観形成に容易に参画することができると言える。

2.色彩参画

本研究では、日常の街並みの景観を捉えなおす手法として「色彩参画」を提案し、「色彩参画」を行うことによって、変化するであろう市民の景観イメージに焦点を当てる。

本研究における「色彩参画」とは、「決められた色を持つ任意の要素(もの)を市民が街並みに飾り付けることによって街路景観の形成に参画することと」する。本研究で行った、「色彩参画」による景観形成実験は、決められた色の要素(もの)を街路に配置し、街路を飾り付けることにより行うこととした。また、配置する要素は特に指定をせず、家庭にある日用品等とした。

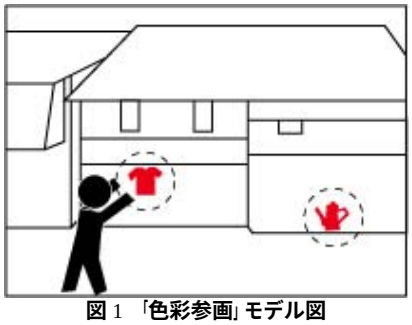


図 1 「色彩参画」モデル図

3.研究の目的・意義

3-1 研究の目的

「色彩参画」が街並みの景観イメージに与える影響を明らかにすることにより、景観形成における「色彩参画」の効果を明らかにすることを目的とする。

3-2 研究の意義

景観形成における市民の「色彩参画」の効果を明らかにすることにより、①「色彩参画」が市民の景観把握に与える影響について言及できる点、②景観形成へ市民が参画する手段の一つとしての「色彩参画」の可能性を得ることができる点の 2 点が意義として考えられる。

4.研究の方法

4-1 実験概要

2005 年 8 月 14 日に彦根市高宮町で行われた『サマーフェスティバル in たかみや～中山道高宮宿の夏まつり～』の一環として、「色彩参画」実験を実施した。実験は高宮町内の本町と中町の両自治会で行った。「色彩参画」によって街路に飾り付ける色は、「赤」と定めた。彦根市の歴史的な色が「赤」であることが理由である。

4-2 調査対象

本研究の調査対象は、「色彩参画」実験へ参画した地域住民(参画者)と参画しなかった地域住民(不参画者)を選定した。なお、不参画者は実験対象者ではない。詳細は表 1 を参照。

表 1 調査対象者概要

	参画者	不参画者
対象	中町・本町の地域住民	夏まつり実行委員会 高宮学区連合自治会

4-3 調査方法

本研究では、「色彩参画」実験の影響を明らかにするために、実験前後にアンケート調査を行い、街並みの景観イメージと景観認識、実験への関心を調査する。

アンケート調査表は①景観イメージに関する項目、②景観認識に関する項目、③実験への関心に関する項目とフェイスシートからなる。

表 2 調査の流れ

	内容	アンケート調査	対象者の作業
一日目	実験への協力依頼	事前・事後アンケート調査票配布	事前アンケート記入
	実験内容説明	アンケート調査説明	飾り付けるものの決定
二日目	景観形成実験開始	写真・ビデオ撮影	街路の飾りつけ
			事後アンケート記入
三日目		アンケート調査票回収	

①景観イメージに関する項目

20 対の形容詞による評価尺度を用いて、SD 法による景観イメージの調査を行う。

なお、SD法で用いる形容詞対は、街並みの活気、統一感及び街並みへの親近感のイメージに関する形容詞対を考慮しつつ、景観のイメージを基に研究を行っている既往研究[2)3)]等を参考に選定した。

②景観認識に関する項目

街並みをイメージする色に関する項目と街並みへの関心に関する項目より景観認識の調査を行う。

なお、景観認識に関する項目は、街並みをイメージする色とその理由、関心のある景観構成要素とその理由を自由に回答する形式とした。

③実験への関心に関する項目

実験への参画度に関する項目と実験を見たか否かの項目より実験への関心の調査を行う。

実験への参画度に関する項目は、街並みに飾り付けた数量と種類数を回答する形式とした。

4-4 分析方法

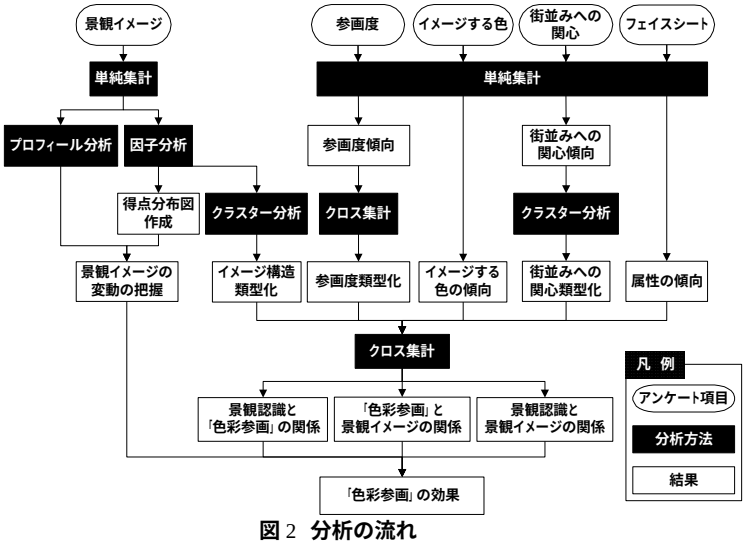


図 2 分析の流れ

本研究では、サンプルの景観イメージ及び景観認識へ与える「色彩参画」の効果を明らかにするために分析を行う。全体の流れは図 2 参照。

①景観認識及び実験への関心の分析

景観認識及び実験への関心に関する項目への回答結果の単純集計より、サンプルの属性の特徴、景観認識(街並みをイメージする色、街並みへの関心)の傾向、実験への参画度の傾向を把握する。ここで得た景観認識の傾向を基に考察を行い、景観認識と「色彩参画」との関係を明らかにする。また、街並みへの関心に関してはクラスター分析、実験への参画度に関してはクロス集計を行い、サンプルの類型化を行う。

クロス集計、クラスター分析には「SPSS12.0J for Windows」を用いた。クラスター化の方法は Ward 法、距離は平方ユークリッド距離を用いた。

②景観イメージ構造の分析

景観イメージに関する項目への回答結果の単純集計を行い、プロフィール分析、因子分析による分析を行い、サンプルの景観イメージ構造を明らかにする。サンプルを景観イメージ構造タイプ毎に分類を行うために、上記の因子分析によって得られる因子得点を基に、クラスター分析を行う。

因子分析には「SPSS12.0J for Windows」を用いた。因子抽出法は主因子法、回転はバリマックス回転を用いた。

③景観認識及び実験への関心と景観イメージの関係

以上の分析によって得た結果を用いて、クロス集計を行い、「色彩参画」、景観認識と景観イメージとの関係を明らかにする。検定はカイ二乗検定を行った。

ここまでの分析で得た、景観認識、景観イメージ、「色彩参画」の関係性を基に考察を行い、景観イメージ及び景観認識へ与える「色彩参画」の効果を明らかにする。

5.サンプルの景観認識及び実験への関心

5-1 調査実施概要

調査は表 3 のように実施した。分析の段階でそれぞれ対象となる調査アンケート数は表 4 を参照。

表 3 調査実施概要

サンプルグループ	参画者	不参画者		全体
対象	中町･本町の地域住民	夏まつり実行委員会	高宮学区連合自治会	
事前アンケート配布日	8月11日	7月30日	8月6日	
事前アンケート回収日	8月20日	7月30日	8月6日	
配布数	84	29	19	132
有効数	32	17	8	57
有効回答率	38.1%	58.6%	42.1%	43.2%
事後アンケート配布日	8月11日	8月21日		
事後アンケート回収日	8月20日	8月21日		
配布数	84	54		138
有効数	32	25		57
有効回答率	38.1%	46.3%		41.3%
総配布数	168	102		270
総有効数	64	50		114
総有効回答率	38.1%	49.0%		42.2%

表 4 分析毎の調査有効アンケート数

分析対象	内訳		計
	参画者	不参画者	
街並みをイメージする色の記述数	64	50	114
街並みをイメージする色の想起理由	48	32	80
街並みへの関心	64	50	114
実験への参画度	29	0	29
景観イメージ構造	58	32	90

サンプルの属性の単純集計を行った。

年代と職業では、参画者と不参画者に大きな差は見られない。性別では、参画者に比べ不参画者の男性の割合が高い。これは、不参画者に高宮町の連合自治会が含まれているためである。連合自治会への出席者は全てが男性で構成されている。

5-2 街並みをイメージする色の傾向

実験前後における街並みをイメージする色の傾向と想起理由を図 3、図 4 に示す。

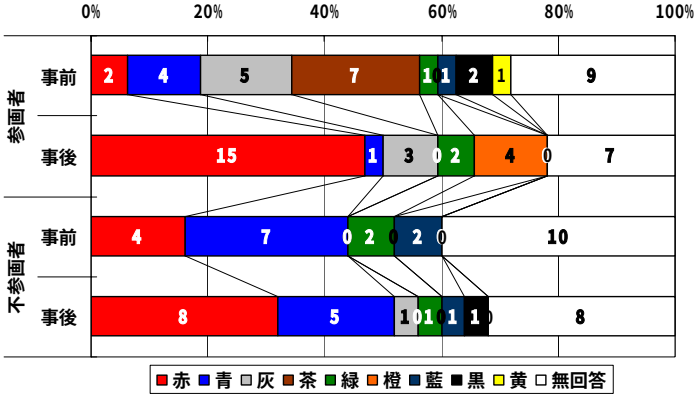


図 3 実験前後における街並みをイメージする色の傾向

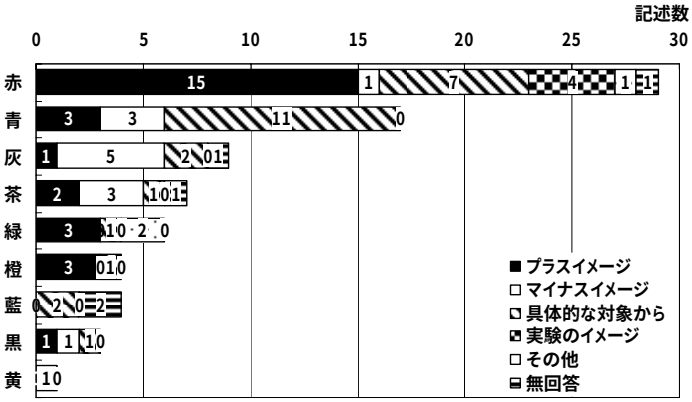


図 4 実験前後における街並みをイメージする色の想起理由

- 実験を行うことによって、赤や橙といった、暖かく、活気のあるイメージの色を選びやすくなる傾向がある。この傾向は、不参画者よりも参画者の方が顕著に現れている。つまり、「色彩参画」に参画したことによって、街並みに活気を感じた、もしくは活気を願うようになったと考えられる。
- 実験を行うことによって、街並みの古さをイメージする色や対象地域と関わりの薄い色をイメージしにくくなる。つまり、「色彩参画」を行う前には意識していなかった、新しい街並みのイメージを感じるようになり、街並みの古さのイメージが薄くなったと考えられる。

5-3 街並みへの関心の傾向

実験前後における街並みへの関心の傾向と想起理由を図 5、図 6 に示す。

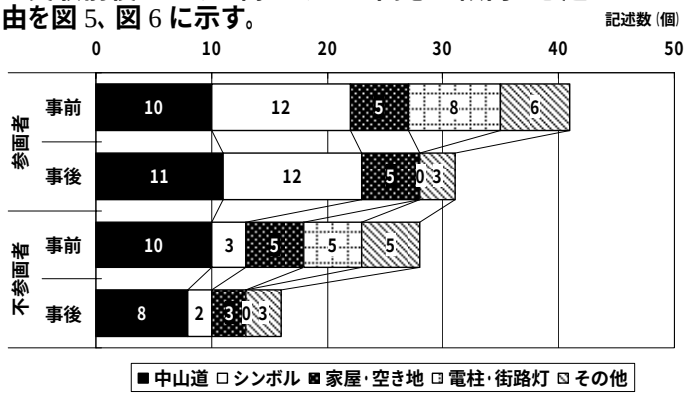


図 5 実験前後における街並みへの関心の傾向

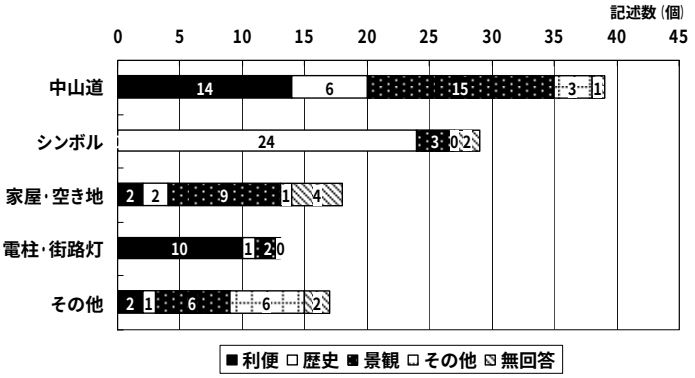


図 6　実験前後における街並みへの関心の想起理由

- 実験を行うことにより、「電柱・街路灯に関する記述」が減少することが示された。「電柱・街路灯に関する記述」の多くは街並みの利便性を理由に想起されている。「色彩参画」を行うことにより、街並みの利便性に対する不満が減少すると考えられる。
- 実験の前後ともに、参画者と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がない。「色彩参画」への参画の有無は街並みへの関心に大きな影響を与えないと考えられる。

5-4 実験への参画度によるサンプルの分類

実験への参画度の集計結果を図 7 に示す。

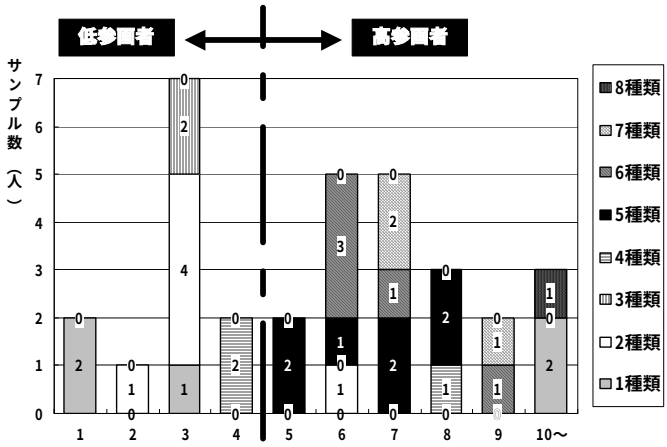


図 7　実験への参画度の集計結果

- 街並みに飾り付けた数量が 5 個以上のサンプルを高参画者に、街並みに飾り付けた数量が 5 個未満のサンプルを低参画者に分類することが出来る。

6. サンプルの抱く街並みの景観イメージ構造

実験前後における、参画者と不参画者のイメージプロフィールの変動を図 8 に、因子得点の変動を図 9 に示す。

なお、高参画者と低参画者のイメージプロフィール及び因子得点の変動についても分析を行ったが、両者の間に大きな差は見られなかった。

- 実験を行うことにより、街並みのイメージが活気あるイメージになることが示された。つまり、「色彩参画」は街並みの「活気」のイメージを向上させる効果があると考えられる。
- 参画者の方が街並みに活気あるイメージを感じる傾向が強いことが示された。つまり、「色彩参画」に参画することにより、街並みの「活気」のイメージは大きく向上すると考えられる。
- 高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がないことが示された。つまり、「色彩参画」を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく、参画の有無であると考えられる。

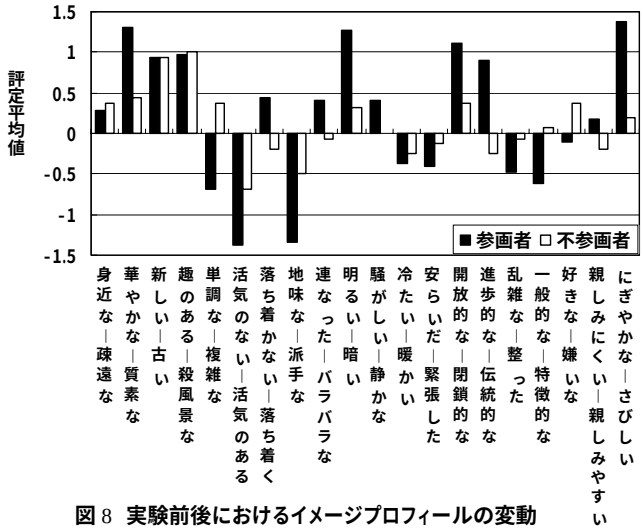


図 8　実験前後におけるイメージプロフィールの変動

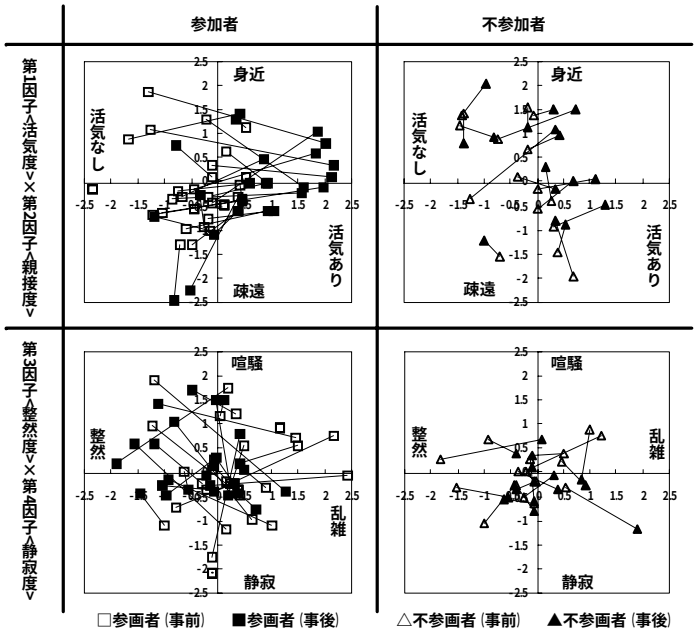


図 9　実験前後における因子得点の変動

7. 景観評価、実験への参画と景観イメージの関係

7-1 景観イメージ構造の類型

サンプルの因子得点をカテゴリーに用いてクラスター分析を行い、景観イメージ構造タイプの類型化を行った。

得られた景観構造イメージタイプを表 5 に示す。

表 5　景観イメージ構造タイプの分類

	名称	サンプル数	割合
クラスター1	伝統不満型	33	36.7%
クラスター2	活気認知型	34	37.8%
クラスター3	伝統評価型	23	25.6%
	計	90	100.0%

7-2 街並みへの関心の類型

街並みへの関心に関する項目への回答数と回答の有無をカテゴリーに用いてクラスター分析を行い、街並みへの関心タイプの類型化を行った。

得られた街並みへの関心タイプを表 6 に示す。

表 6　街並みへの関心タイプの分類

	名称	サンプル数	割合
クラスター1	歴史重視型	15	16.7%
クラスター2	関心抽象型	30	33.3%
クラスター3	景観重視型	20	22.2%
クラスター4	道路関心型	25	27.8%
	計	90	100.0%

7-3 景観認識、「色彩参画」と景観イメージの関係

景観イメージ構造タイプと参画の有無についてクロス集計を行った。クロス集計の結果を図 10 に示す。

同時に、有意差の検定を行った。参画者では漸近有意確率 0.004 となった。有意水準 1%で実験前後の景観イメージに違いがあると言える。不参画者では漸近有意確率 0.193 となった。有意水準 5%で不参画者の実験前後の景観イメージに違いがあるとは言えない。

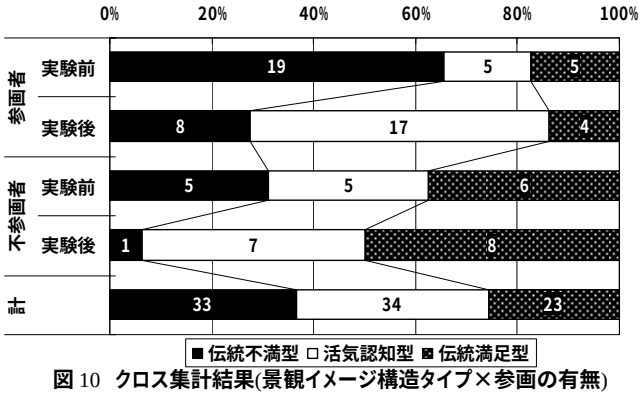


図 10　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×参画の有無)

その他の要因と景観イメージの関係性については、表 7 に示す。有意水準 5%で有意差の検定を行った。

表 7　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係

		景観イメージ構造
属性	性別	×
	年代	×
	職業	×
景観認識	イメージする色	×
	街並みへの関心	×
「色彩参画」	参画の有無	○
	参画の度合い	×

○：関係有り　×：関係なし

- サンプルの属性、景観認識は、街並みの景観イメージに影響を与えないと考えられる。
- 「色彩参画」に参画することによって、街並みの古さに対する不満が減り、活気を感じるようになると考えられる。
- 「色彩参画」に参画しなかった場合、景観イメージは大きく変化しない。
- 「色彩参画」の度合いに街並みの景観イメージの変化への影響力は無いと考えられる。

8.結論

8-1 「色彩参画」の効果

「色彩参画」は、街並みを捉えなおすことに役立ち、活気あるイメージを強くする効果があると考えられる。

「色彩参画」による景観形成は、市民が「色彩参画」によって景観に参画するという行為自体に意味がある。静的な行為としての景観との関わりではなく、「色彩参画」によって、動的に景観に関わるという体験が最も重要な事柄である。つまり、人は街並みの景観を視覚のみで捉えがちであるが、視覚以外の身体的感覚を用いて積極的に景観に関わることで、街並みの景観イメージが変化し、景観の捉え方が変わると考えられる。

同時に、「色彩参画」の効果は街並みへの関心までは至らないことから、街並みのイメージ形成には寄与するものの、まちづくり等への関心までは直接には影響しないという限界も持つ。

8-2 「色彩参画」の位置付け

通常、人は景観を視覚のみによって捉えがちである。しかし、本研究によって景観を捉える際に視覚以外の感覚を用いて動的に景観に関わることの重要性を明らかにすることが出来た。

ここで、「色彩参画」という体験によって、街並みの景観に“触れる”(視覚以外の感覚で景観を捉える)ことを「街並みに触れる」、視覚によって街並みの景観を捉えることを「街並みを見る」と言い換えることが出来よう。

「街並みに触れる」を明確にするために、景観形成における手法としての「色彩参画」の特徴を整理する。「色彩参画」の特徴の一つに全体の統一性と個の多様性を同時に持つ点がある。

「色彩参画」は、決められた色を飾るため、街並みに全体の統一性が生まれる。また、決められた色のものであれば何を飾ってもよいため、個々の景観への参画の仕方が異なり、街並みに個の多様性が生まれる。

このように、「色彩参画」により、街並みの景観における全体の統一性と個々の多様性を同時に捉えることが出来ると考えられる。

以上より、「色彩参画」についてまとめる。

- 「色彩参画」によって、街並みの景観における全体の統一性と個の多様性を同時に捉えることが出来る。
- 「色彩参画」によって、「街並みを見る」と同時に「街並みに触れる」ことが可能になり、複合的に景観を捉えることが出来る。

街並みの景観を複合的に捉えるための手法としての「色彩参画」の可能性を示すことが出来た。

今後、日常の景観をつくる際に市民が参画するための“入り口”として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

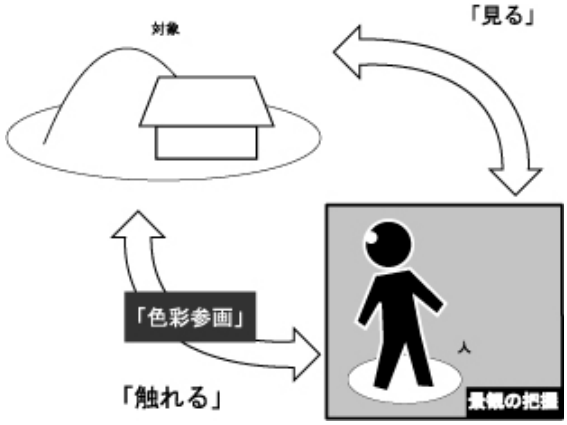


図 11　景観の把握における「色彩参画」の役割

8-3 本研究の課題と今後の展望

赤以外の色を用いた「色彩参画」を行い、より明確に「色彩参画」の効果を明らかにすることが望まれる。

「色彩参画」への参画者は、「色彩参画」を楽しんで行っている様子が見て取れた。「色彩参画」は楽しみながら、景観に“触れる”ことが出来る手法と言える。今後、日常の景観づくりに、市民が楽しみながら参画するための手法として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

〔脚注・参考文献〕

[1)]小泉秀樹；景観法とふつうのまち,建築雑誌,120(1527),p.32(2005)

[2)]絹原一寛・他,：歴史的街並みを持つ地方都市に対する出身者の景観認識に関する研究―兵庫県出石町を事例として,都市計画論文集,(36),739-744(2001)

[3)]谷口小百合・他,：庭園景から受ける癒しのイメージに関する調査研究,東京農大農学集報,48(3),115-127(2003)

A Study on the Influence of the "Ornamenting the Street with the Red ones" by Residents to the Image of Streetscape

Kenji ODA

1. Background and Purpose

It is a necessary step to participate of aggressively in a plan of streetscape that residents grasp the streetscape of daily life again. This research proposes the “Ornamenting the Street with the Red ones” which is technique for grasp of streetscape. “Ornamenting the Street with the Red ones” is participation in streetscape by ornamenting the street with the regulated color.

The purpose of this paper is to clarify the influence of the “Ornamenting the Street with the Red ones” to the image of streetscape. And it is also, to clarify the influence of the “Ornamenting the Street with the Red ones” by residents to the streetscape planning.

2. Method

2-1 Participants

Participants were residents in Hikone City Tkamiya-cho. It was possible to group by participants who participated in “Ornamenting the Street with the Red ones” or not.

2-2 Procedure

The questionnaire survey consisted of three parts. The first part consisted of an image investigation with the adoption of the SD method. The second part consisted of perception of streetscape. This part consisted of color and interest of street. The final part consisted of interest for “Ornamenting the Street with the Red ones”.

3. Results

The number of questionnaires that were able to be analyzed was 114.

Concerning the color of street, there indicated a tendency to choose a warm color and a lively color by doing “Ornamenting the Street with the Red ones”.

Concerning the interest of street, there indicated a tendency to decrease of “Desire to convenience” by doing “Ornamenting the Street with the Red ones”.

4. Analysis

Using the data of the image obtained from the questionnaire survey, factor analysis was carried out.

Concerning the image of streetscape, the result is described as follows.

- The image of the streetscape became “Active Street” by doing “Ornamenting the Street with the Red ones”. The results of analysis were indicated that “Ornamenting the Street with the Red ones” has an effect of making the image of “Active Street”.
- Participants who ornamented the street imagined “Active Street” more than participants who didn’t it. The results of analysis were indicated that participating in “Ornamenting the Street with the Red ones” confirms the image of “Active Street”.
- The aggressiveness of participation didn't have a great influence on changing the image of streetscape. The results of analysis were indicated that participating is the most important thing as to “Ornamenting the Street with the Red ones”.

5. Conclusion

Usually, we tend to grasp the streetscape only by sight. However, this research clarified the importance of the use of senses other than the sight when we grasp the streetscape.

The effect of “Ornamenting the Street with the Red ones” is as follows.

1) By doing “Ornamenting the Street with the Red ones”, we can grasp uniformity and the variety of streetscape at a time.
2) By doing “Ornamenting the Street with the Red ones”, we can “touch the streetscape” and “look at streetscape”. We are able to grasp many-sided streetscape by virtue of these experiences.

This study was able to indicate the possibility of “Ornamenting the Street with the Red ones” as a technique for grasping the many-sided streetscape.

It is an effective step to participate in a plan of daily streetscape that residents do “Ornamenting the Street with the Red ones”.

目　次

第一章　序論……1
1-1　研究の背景 ……1
　1-1-1　景観形成への市民参画……1
　1-1-2　市民の捉える街並みの景観 ……1
　1-1-3　景観における色彩……2
　1-1-4　「色彩参画」について……3
　1-1-5　既往研究 ……4
1-2　研究の目的・意義……5
　1-2-1　研究の目的 ……5
　1-2-2　研究の意義 ……5
1-3　本研究の構成……5

第二章　実験・調査概要 ……8
2-1　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験 ……8
　2-1-1　実験概要 ……8
　2-1-2　街路の飾り方 ……8
2-2　実験対象 ……11
　2-2-1　実験対象地域の選定……11
　2-2-2　実験対象地域概要……11
　2-2-3　実験対象者概要……12
2-3　調査対象 ……12
　2-3-1　調査対象者の選定……12
　2-3-2　調査対象者概要……12
2-4　実験・調査の流れ……13
2-5　景観イメージ及び景観認識に関するアンケート調査 ……14
　2-5-1　調査概要 ……14
　2-5-2　景観イメージ調査手法の検討 ……15
　2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査 ……16
　2-5-4　景観認識に関するアンケート調査 ……18
　2-5-5　実験への関心に関するアンケート調査……19

第三章　分析方法……22
3-1　分析の流れ……22
3-2　景観認識及び実験への関心に関するアンケートの単純集計による分析……24
3-2-1　街並みをイメージする色の単純集計……24
3-2-2　街並みの関心の単純集計……25
3-2-3　実験への参画度の単純集計……26
3-3　調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造の分析……27
3-3-1　プロフィール分析による街並みの景観イメージ構造の分析……27
3-3-2　因子分析による街並みの景観イメージ構造の分析……28
3-4　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係の分析……29
3-4-1　景観イメージ構造による調査対象者の類型化……29
3-4-2　街並みへの関心による調査対象者の類型化……30
3-4-3　景観認識及び実験への参画と景観イメージの関係の分析……30

第四章　調査対象者の景観認識……33
4-1　調査実施概要……33
4-1-1　調査対象者……33
4-1-2　調査対象者のサンプリング……34
4-2　サンプルの特徴……36
4-3　街並みをイメージする色に関するアンケート結果……37
4-3-1　街並みをイメージする色の傾向（全体）……37
4-3-2　街並みをイメージする色の傾向（参画者×不参画者）……39
4-3-3　街並みをイメージする色の想起理由……41
4-3-4　街並みをイメージする色のまとめ……43
4-4　街並みへの関心に関するアンケート結果……44
4-4-1　街並みへの関心の傾向（全体）……44
4-4-2　街並みへの関心の傾向（参画者×不参画者）……46
4-4-3　街並みへの関心の想起理由……47
4-4-4　街並みへの関心のまとめ……49
4-5　実験への参画度に関するアンケート結果……50
4-5-1　飾り付けた数量の傾向……50
4-5-2　飾り付けた種類数の傾向……51
4-6　実験への参画度によるサンプルの分類……52
4-7　まとめ……54

第五章　調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造……57
5-1　景観イメージに関するアンケート結果……57
5-2　プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析……59
5-2-1　実験前後のイメージプロフィールの分析（全体）……59
5-2-2　実験前後のイメージプロフィールの分析（参画者）……62
5-2-3　実験前後のイメージプロフィールの分析（不参画者）……66
5-2-4　実験前後のイメージプロフィールの変動の比較（参画者×不参画者）……69
5-2-5　実験への参画タイプごとの実験前後のイメージプロフィールの分析……70
5-2-6　プロフィール分析から見た街並みの景観イメージのまとめ……73
5-3　因子分析による街並みの景観イメージの分析……74
5-3-1　因子の抽出……74
5-3-2　因子の解釈……76
5-3-3　実験前後の因子得点分布図の分析（参画者×不参画者）……81
5-3-4　実験前後の因子得点の変動の分析（参画者×不参画者）……83
5-3-5　実験前後の因子得点の変動の分析（高参画者×低参画者）……85
5-3-6　因子分析から見た景観イメージのまとめ……87
5-4　まとめ……88

第六章　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係……92
6-1　サンプルの類型化……92
6-1-1　景観イメージ構造によるサンプルの類型化……92
6-1-2　街並みへの関心の傾向によるサンプルの類型化……95
6-2　景観認識と景観イメージ構造の関係……97
6-2-1　サンプルの属性と景観イメージ構造の関係……97
6-2-2　街並みをイメージする色と景観イメージ構造の関係……100
6-2-3　街並みへの関心と景観イメージ構造の関係……101
6-3　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係……102
6-3-1　実験への参画の有無と景観イメージ構造の関係……102
6-3-2　参画タイプと景観イメージ構造の関係……104
6-4　まとめ……106

第七章　結論……110
7-1　各章のまとめ……110
7-2　色彩参画の効果及び役割……114
7-2-1　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観認識の関係……114
7-2-2　景観認識と景観イメージの関係……115
7-2-3　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージの関係……115
7-2-4　「色彩参画」の効果……116
7-2-5　「色彩参画」の位置付け……117
7-3　本研究の課題と今後の展望……120
7-3-1　本研究の課題……120
7-3-2　今後の展望……122

謝辞
APPENDIX

図　表　目　次

【図】

図 1-1　街並みの景観の捉え方 ……2
図 1-2　本研究の構成 ……6

図 2-1　「色彩参画」による景観形成実験の様子 ……9
図 2-2　「色彩参画」による景観形成実験の状況 ……10
図 2-3　実験対象地域の位置 ……11
図 2-4　実験・調査の流れ ……13
図 2-5　街並みの景観イメージに関するアンケート調査項目 ……17

図 3-1　分析の流れ ……22
図 3-2　イメージプロフィールの例 ……27
図 3-3　因子得点分布図の例 ……28
図 3-4　景観イメージ構造タイプのデンドログラムの例 ……29

図 4-1　実験前後における街並みをイメージする色の記述数（全体） ……38
図 4-2　実験前後における街並みをイメージする色の記述数（参画者×不参画者） ……40
図 4-3　街並みをイメージする色の想起理由 ……42
図 4-4　実験前後における街並みへの関心の傾向（全体） ……45
図 4-5　実験前後における街並みへの関心の傾向（参画者×不参画者） ……47
図 4-6　街並みへの関心の想起理由の傾向 ……48
図 4-7　街並みに飾り付けた数量の傾向 ……50
図 4-8　飾りつけの様子 ……50
図 4-9　街並みに飾り付けた種類数の傾向 ……51
図 4-10　最も多くの種類を飾り付けた例 ……51
図 4-11　街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果 ……53

図 5-1　実験前後のイメージプロフィール（全体）……60
図 5-2　実験前後のイメージプロフィールの変動（全体）……60
図 5-3　実験前後のイメージプロフィール（参画者）……64
図 5-4　実験前後のイメージプロフィールの変動（参画者）……64
図 5-5　実験前後のイメージプロフィール（不参画者）……67
図 5-6　実験前後のイメージプロフィールの変動（不参画者）……67
図 5-7　実験前後のイメージプロフィールの変動（参画者×不参画者）……69
図 5-8　実験前後のイメージプロフィール（高参画者×低参画者）……72
図 5-9　実験前後のイメージプロフィールの変動（高参画者×低参画者）……72
図 5-10　サンプル全体の因子得点分布図……82
図 5-11　実験前後の因子得点の変動（参画者×不参画者）……84
図 5-12　実験前後の因子得点の変動（高参画者×低参画者）……86
図 5-13　「色彩参画」前後のイメージの変動……89

図 6-1　各クラスターグループの対象地域に抱く景観イメージ……93
図 6-2　クラスターグループの因子得点分布図……94
（第 1 因子〈活気度〉×第 2 因子〈親接度〉
図 6-3　クラスターグループの因子得点分布図……94
（第 3 因子〈整然度〉×第 4 因子〈静寂度〉）
図 6-4　各クラスターグループの街並みへの関心の傾向……96
図 6-5　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×性別）……97
図 6-6　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×年代）……98
図 6-7　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×職業）……99
図 6-8　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×街並みをイメージする色）……100
図 6-9　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×街並みへの関心タイプ）……101
図 6-10　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×参画の有無）……102
図 6-11　クロス集計結果（景観イメージ構造タイプ×参画タイプ）……104

図 7-1　「色彩参画」前後のイメージの変動……111
図 7-2　景観の把握における「色彩参画」の役割……118
図 7-3　「色彩参画」による全体の統一性と個の多様性の把握……119

【表】

表 2-1　調査対象者概要……12
表 2-2　実験・調査の流れと対象者の動き……13
表 2-3　実験前後のアンケート調査項目……14
表 2-4　イメージ調査手法の比較……15
表 2-5　街並みをイメージする色に関する項目……19
表 2-6　街並みへの関心に関する項目①……19
表 2-7　街並みへの関心に関する項目②……19
表 2-8　実験を見たか否かの項目……20
表 2-9　実験への参画度に関する項目①……20
表 2-10　実験への参画度に関する項目②……20

表 3-1　街並みをイメージする色の想起理由の分類と具体例……24
表 3-2　街並みへの関心の記述内容の分類と具体例……25
表 3-3　街並みへの関心の想起理由の分類と具体例……26
表 3-4　クロス集計の組み合わせ……31

表 4-1　アンケート調査実施概要……33
表 4-2　分析ごとの調査有効アンケート数……35
表 4-3　参画者、不参画者の性別及び年代……36
表 4-4　参画者、不参画者の職業……36
表 4-5　実験前後における街並みをイメージする色……38
表 4-6　街並みをイメージする色の想起理由……42
表 4-7　実験前後における街並みへの関心の分類結果……45
表 4-8　実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定（事前アンケート）……46
表 4-9　実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定（事後アンケート）……46
表 4-10　街並みへの関心の想起理由の分類結果……48
表 4-11　街並みに飾り付けた数量……50
表 4-12　街並みに飾り付けた種類数……51
表 4-13　街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果……52
表 4-14　飾り付けた数量によるサンプルの分類……53

表 5-1　形容詞対の評定平均値と標準偏差……57
表 5-2　各形容詞対間における相関係数……58
表 5-3　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定（全体）……61
表 5-4　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定（参画者）……65
表 5-5　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定（不参画者）……68
表 5-6　形容詞対の評定平均値と標準偏差（高参画者×低参画者）……71
表 5-7　KMO 及び Bartlett の検定結果……74
表 5-8　各形容詞対の共通性……75
表 5-9　因子分析による固有値と累積寄与率……75
表 5-10　各因子の因子負荷量（バリマックス回転後）……77
表 5-11　第 1 因子、第 2 因子の因子負荷量（バリマックス回転後）……78
表 5-12　第 3 因子、第 4 因子の因子負荷量（バリマックス回転後）……79
表 5-13　各因子の解釈……80
表 5-14　「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動……89
表 5-15　「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動……90

表 6-1　各クラスターグループのネーミング結果（景観イメージタイプ）……93
表 6-2　各クラスターグループのネーミング結果（街並みへの関心タイプ）……96
表 6-3　カイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×性別）……97
表 6-4　カイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×年代）……98
表 6-5　カイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×職業）……99
表 6-6　カイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×街並みをイメージする色）……100
表 6-7　カイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×街並みへの関心タイプ）……101
表 6-8　参画者に対するカイ二乗検定結果（景観イメージ構造タイプ×実験前後）……103
表 6-9　不参画者に対するカイ二乗検定結果……103
（景観イメージ構造タイプ×実験前後）
表 6-10　事前データに対するカイ二乗検定結果……104
（景観イメージ構造タイプ×参画タイプ）
表 6-11　事後データに対するカイ二乗検定結果……105
（景観イメージ構造タイプ×参画タイプ）
表 6-12　景観イメージ構造タイプ……106
表 6-13　街並みへの関心タイプ……107
表 6-14　景観認識と景観イメージ構造の関係……107
表 6-15　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係……108

表 7-1　「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動……112
表 7-2　「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動……112
表 7-3　景観認識及び実験への参画と景観イメージ構造の関係……113
表 7-4　仮想行動の考え方における「街並みに触れる」の位置付け……117

第一章　序論

1-1　研究の背景

1-1-1　景観形成への市民参画

「景観計画の主体は、一般的にいえば公共と民間の計画者であるが、より広くとらえれば、地域住民や自然もまた主体としてみることができる。」[1)]とあるように、景観を形成する主体には市民も含まれると言えよう。現在、まちづくりや景観づくりにおいて計画主体としての市民の重要性が議論されている。また、「1992 年の都市計画法の改正において明確に住民のまちづくりへの参加が事業推進のために位置づけられ、また、2002 年の改正においてさらに住民団体、NPOなど主導の街づくり事業の推進が認められている。」[2)]とあるように、まちづくりを考える際に市民が参画することの重要性は明確である。

市民参画の重要性は景観形成においても同様である。田村は景観形成における市民参画の重要性を「景観形成の基本となるのは、まずは、景観に関心をもつ市民の存在であり、その市民によって作られた市民政府の存在である。」[3)]と述べている。このような流れの中、平成 16 年 6 月公布された景観法[4)]の制定によって、良好な景観形成のために市民の責務が定められた。法制度によっても、景観形成への市民の参画の重要性が示されたと言える。

これらの背景から、市民が景観形成に参画することの重要性は明確であり、市民自身も街並みの景観に関わっていることを認識し、積極的に景観形成に関わっていく必要がある。

1-1-2　市民の捉える街並みの景観

そもそも景観に商用的な価値が認められている観光地や、景観への関心がそもそも高い伝建地区などではない、日本のほとんどを占める「ふつうのまち」の景観形成に市民が積極的に参画するためには、「まず守りたい景観・風景・街並みを発見する必要がある」[5)]。一人ひとりが、別々に、あいまいに抱いていたまちの魅力やよさを確認することで、景観計画や景観協定等の策定といった景観形成に、市民が積極的に参画することが出来る。景観形成への市民の積極的な参画を促すためには、一度日常的な街並みの景観を捉えなおし、守りたい景観・風景・街並みを発見する必要があると言えよう。

人は街並みを体験することによって、その街並みの「シンボル」などの景観構成要素を目にし、景観を認識する。市民の景観構成要素の認識は、市民が街並みの景観を見る見方の一つであると考えられる。同様に、人は街並みを体験することによって、歴史も踏まえた全体的な街並みの特徴を色として捉え、景観を認識する。「彦根市鳥居本町の赤」といったような、街並みの色もまた、市民が街並みの景観を見る見方の一つであると考えられる。街並みの景観構成要素や街並みの色による景観認識は、街並みの景観を捉えるために重要な要因であると考えられる。

上記で述べた景観認識は人の働きかけによって景観を捉えるものである。人は景観の認識と同時に、街並みから景観イメージを享受している。街並みのイメージは「地域の『シンボル』や地域のアイデンティティをもとに形成されている」[6)]。つまり、歩くなどして街

並みの体験をすることによって、人はその街並みに対するイメージを抱き、街並みの雰囲気といったような、街並みの全体的な印象を得ることとなる。この街並みの印象は、市民が街並みの景観を見る見方の一つであり、景観イメージもまた街並みの景観を捉るために重要な要因であると考えられる。

以上より、景観認識と街並みの景観イメージを調査することにより、市民の捉える街並みの景観を明らかにすることが出来ると考えられる。

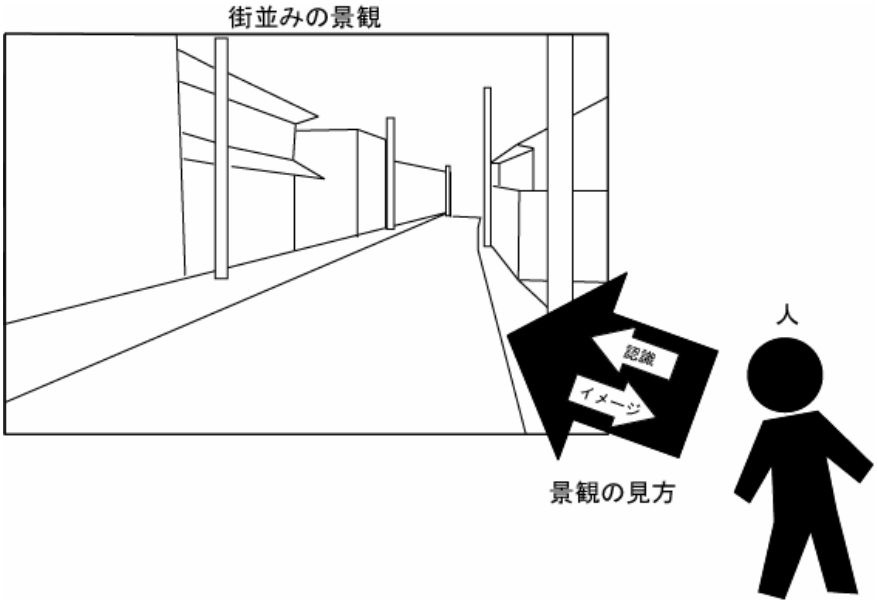


図 1-1　街並みの景観の捉え方

1-1-2　景観における色彩

「景観の計画や設計において色彩をどう扱うかは、避けて通れない重要な問題である」[7]。というように、街並みの景観は、建築物や工作物といった沿道の人工的要素によって強く規定されており、これらの構成物はそれぞれに色彩を持っている。つまり、色彩は街並みの景観の把握に大きな影響を与える要因の一つである。

景観を考える上で、色彩が注目される事は少なくない。「富山県景観づくり色彩ガイドライン」[8]や「札幌の景観色 70 色」[9]のように、実際に色彩を統制することによって、景観の調和を得る事例を挙げることができる。景観形成において色彩を用いることによって、建築物や工作物などと言った沿道の人工的要素を排除する、もしくは形を変化させることなく景観整備を行うことが出来る。

このように、色彩を用いることで景観構成要素を排除することや形を変化することなく、容易に景観形成を行うことができる。つまり、色彩を用いることによって市民が景観形成に容易に参画することができると言える。

市民の景観形成への参画の手段としての色彩の効果を把握することが必要である。

1-1-4　「色彩参画」について

本研究では、市民の景観形成への積極的な参画を促すために、日常の街並みの景観を捉えなおす手法として「色彩参画」を提案し、「色彩参画」を行うことによって、変化するであろう市民の抱く街並みの景観イメージに焦点を当てる。

「色彩参画」を行う前後の景観イメージに焦点を当て研究を行うことにより、「色彩参画」を行う前後での街並みのイメージを把握することができる。つまり、「色彩参画」を行う前後の景観イメージに変化が見られた場合、市民は日常の街並みの新たな一面を発見することができたと考えられる。そのため、「色彩参画」がどれほど景観イメージへ影響を与えるのかという点について追及を行う。

本研究における「色彩参画」とは、「決められた色を持つ任意の要素(もの)を市民が街並みに飾り付けることによって街路景観の形成に参画すること」とする。本研究で行った、「色彩参画」による景観形成実験は、決められた色の要素(もの)を街路に配置し、街路を飾り付けることにより行うこととした。また、配置する要素は特に指定をせず、家庭にある日用品等とした。飾りつけるものを任意としたことは、景観形成に参画する市民が自ら街並みに飾りつけるものを選ぶことによって、市民の自由な発想を引き出すことを狙いとしている。

「色彩参画」による景観形成実験は、上記のように街路に色を配置することで、「色彩参画」によって街路景観を形成し、街並みの景観を捉えなおすことを目的としている。

1-1-5　既往研究

まちづくりや景観形成への市民の参画に焦点を当てた研究は数多くある。

まちづくりや景観形成への参画の手法に関する既往研究では、志村ら[10)11)]や澤田ら[12)]、田中ら[2)]の研究がある。志村や澤田らは、まちづくりや景観整備への市民参画の手法としてワークショップに注目し、研究を行っている。田中らの研究では、市民参画のために行われるワークショップを円滑に進めるための手法として、仮想現実空間に注目し、研究を行っている。これらの研究は、参加の手法としてのワークショップの効果や、ワークショップのプログラムを取り扱った研究である。

また、景観整備に市民が参画している事例を扱った既往研究は鳳[13)]や津田ら[14)]の研究がある。鳳の研究では事例を基に、景観形成基本計画への市民の参加の重要性、景観形勢基本計画の位置づけの明確化の必要性について述べられている。津田らの研究では積極的に景観形成が行われている事例を基に、市民の景観形成への参加意識に焦点を当てている。

絹原ら[15)]の研究では、対象地域の居住者と出身者の抱く景観イメージと景観認識を基に、居住者のみでなく出身者も景観へ参画することの必要性を論じている。

景観の把握に関しては、篠原[16)]が著書で景観の把握構造をモデル化して示している。篠原はシーン景観を中心とした景観把握モデルを作成し、景観を 4 つの景観要素と、7 通りの空間的関係として捉えている。また、中村[17)]は著書で仮想行動の考え方において、景観を視覚以外の身体的感覚で捉えることの重要性について述べている。

景観における色彩に焦点を当てた既往研究では、米川ら[18)]や池田ら[19)]、窪谷ら[20)]などによって多くなされている。米川らの研究では建造物の外壁の色彩に注目し、街並みとの調和のとれる色彩に焦点を当てている。池田らの研究では景観評価に与える色彩の影響に焦点を当てている。窪谷らの研究ではいくつかの街並みの色彩を測色することにより、各街並みの地域性を表す色彩に焦点を当てている。このように、景観における色彩に焦点を当てた研究の多くの研究は色彩による空間の調和を求めるものや、色彩の見え方を求めるものなどである。

以上のように、景観形成への参画に焦点を当てた研究や、景観における色彩に焦点を当てた研究は数多くなされている。しかし、色彩を用いることによって、現実の街並みの景観形成への市民の参画を行い、市民の参画の手法としての色彩に焦点を当てた研究はなされていない。

以上より、景観形成への市民参画における色彩の役割を論じるために、本研究は「色彩参画」に焦点を当てる。

1-2　本研究の目的・意義

1-2-1　本研究の目的

本研究の目的は、「色彩参画」が街並みの景観イメージに与える影響を明らかにすることにより、景観形成における「色彩参画」の効果を明らかにすることである。

1-2-2　本研究の意義

本研究の意義は、景観形成における市民の「色彩参画」の効果を明らかにすることにより、①「色彩参画」が市民の景観把握に与える影響について言及できる点、②景観形成へ市民が参画する手段の一つとしての「色彩参画」の可能性を得ることができる点の 2 点である。

1-3　本研究の構成

本研究は 7 つの章によって構成されている。各章の内容を以下に示す。

第一章　序論

- 本研究の背景と目的・意義について述べる。

第二章　実験・調査概要

- 本研究で行った「色彩参画」による景観形成実験やアンケート調査方法について述べる。

第三章　分析方法

- 本研究で用いるクロス集計や因子分析、クラスター分析などの分析方法について述べる。

第四章　調査対象者の景観認識

- 本研究で行った街並みに関するアンケート調査の単純集計結果やクロス集計結果など、調査結果について述べる。

第五章　調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造

- 本研究で行った街路景観イメージに関するアンケート調査の単純集計を行い、プロフィール分析や因子分析による分析を行い、分析結果を述べる。

第六章　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係

- 第四章や第五章で得た結果を基にサンプルの類型化、クロス集計を行い、景観認識や実験と景観イメージ構造の関係についての分析結果を述べる。

第七章　結論

- 本研究の結論として、「色彩参画」と景観認識の関係、景観認識と景観イメージの関係、「色彩参画」と景観イメージの関係のそれぞれについて述べた上で、「色彩参画」の効果及び位置付けについて述べる。

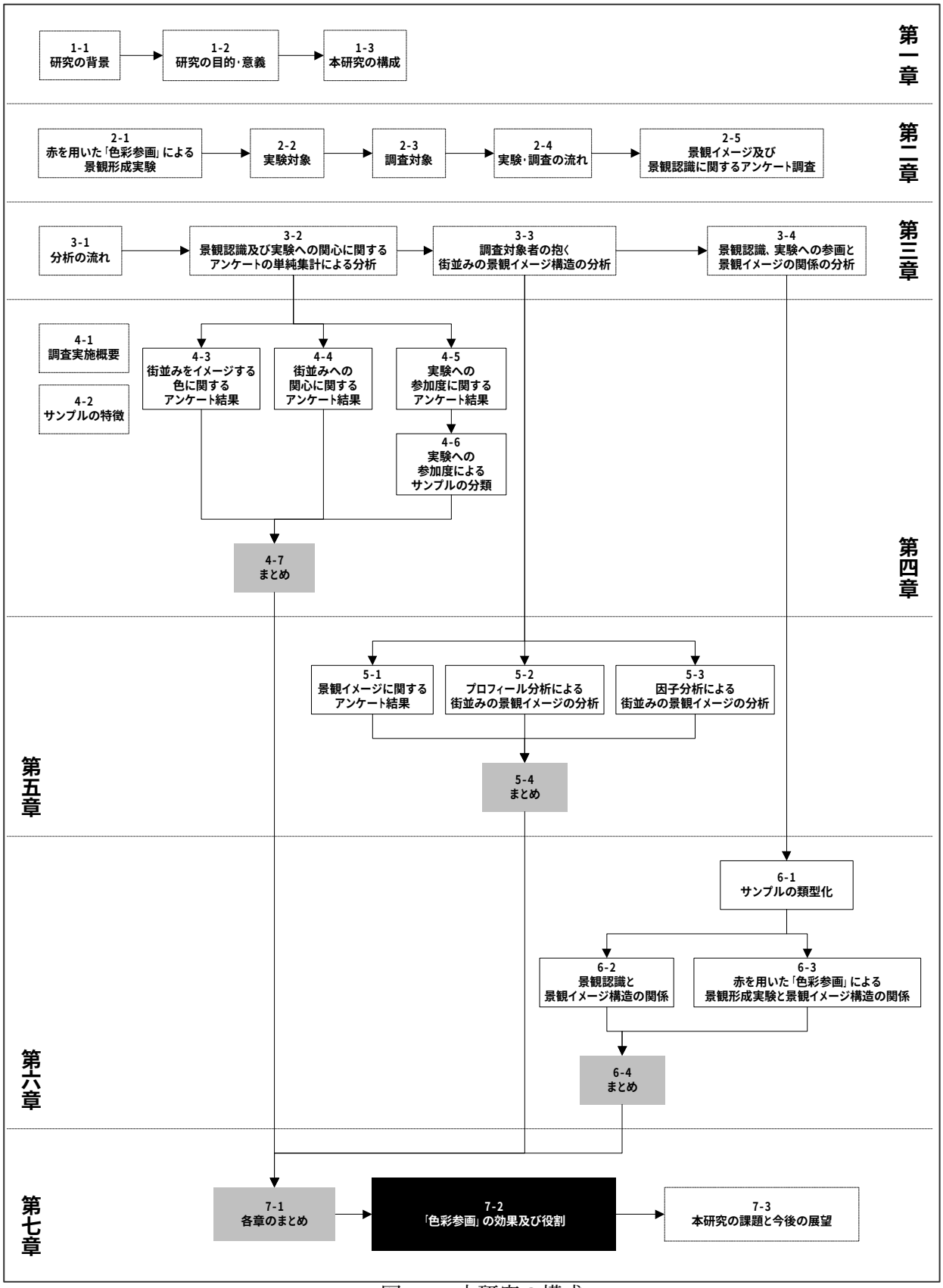

第一章
1-1 研究の背景
1-2 研究の目的・意義
1-3 本研究の構成
第二章
2-1 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験
2-2 実験対象
2-3 調査対象
2-4 実験・調査の流れ
2-5 景観イメージ及び景観認識に関するアンケート調査
第三章
3-1 分析の流れ
3-2 景観認識及び実験への関心に関するアンケートの単純集計による分析
3-3 調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造の分析
3-4 景観認識、実験への参画と景観イメージの関係の分析
第四章
4-1 調査実施概要
4-2 サンプルの特徴
4-3 街並みをイメージする色に関するアンケート結果
4-4 街並みへの関心に関するアンケート結果
4-5 実験への参加度に関するアンケート結果
4-6 実験への参加度によるサンプルの分類
4-7 まとめ
第五章
5-1 景観イメージに関するアンケート結果
5-2 プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析
5-3 因子分析による街並みの景観イメージの分析
5-4 まとめ
第六章
6-1 サンプルの類型化
6-2 景観認識と景観イメージ構造の関係
6-3 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係
6-4 まとめ
第七章
7-1 各章のまとめ
7-2 「色彩参画」の効果及び役割
7-3 本研究の課題と今後の展望

図 1-2　本研究の構成

脚注及び参考文献

[1)]景観デザイン研究会：景観用語事典，pp.80-81，彰国社(2005)
[2)]田中靖己・他,：ネットワーク型仮想現実強調空間を用いた参加型まちなみ景観デザインへの適用に関する研究，デザイン学研究，(50)，p.144(2003)
[3)]田村明：よりよき景観デザインへ向けての課題，総合論文誌，(3)，p.20，(2005)
[4)]岸田里佳子：景観法の活用について，建築雑誌，120(1527)，23-27(2005)
[5)]小泉秀樹：景観法とふつうのまち，建築雑誌，120(1527)，p.32(2005)
[6)]石井利勝，田中美子：地域イメージとまちづくり，p.16，技報堂出版株式会社(1996)
[7)]景観デザイン研究会：前掲書，pp.52-53，彰国社(2005)
[8)]富山県庁：景観づくり施策｜富山県
〈http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1506/kj00001771-001-01.html〉，2005-5-20
[9)]札幌市市民まちづくり局都市計画部：札幌市―大規模建築物等景観形成指針―
〈http://www.city.sapporo.jp/keikaku/keikan/daikibo/sikisai.html〉，2005-4-26
[10)]志村秀明・他,：街路空間デザインゲームとその組み立て～まちづくりにおける参加の手法に関する研究(8)～，日本建築学会大会学術講演梗概集，(1998)，13-14(1998)
[11)]志村秀明：まちづくりデザインゲームを利用した計画づくりとその展望, 都市計画, 52(2), 41-44(2003)
[12)]澤田幸枝：阿見町におけるけいかんづくりの事例研究―住民参加のワークショップのあり方について―，日本建築学会大会学術講演梗概集，(1996)，573-574(1996)
[13)]鳳千佳良：市民参加を取り入れた都市景観づくりに関する研究　神奈川県内の市町村をケースとして，日本建築学会学術講演概要集，(1998)，295-296(1998)
[14)]津田和則・他,：三重県大山田市における参加型景観づくりに関する研究　その１　アンケート調査から見る住民意識，日本建築学会学術講演概要集，(1996)，605-606(1996)
[15)]絹原一寛・他,：歴史的町並みを持つ地方都市に対する出身者の景観認識に関する研究―兵庫県出石町を事例として―，都市計画論文集(36)，739-744
[16)]篠原修：新体系土木工学　59　土木景観計画，技法堂出版株式会社(1996)
[17)]中村良夫：風景学・実践編，p.21，中央公論新社(2001)
[18)]米川光政，西浦定継：街路の視覚的、空間的要素からみるイメージ要因分析に関する研究，都市計画報告集，2(1)，8-14(2003)
[19)]池田圭介：構成要素別に見た街並みの色彩，日本色彩学会誌，(29)，100-101(2005)
[20)]窪谷直彦・他,：街路景観評価に与える色彩の影響　その 1：街路景観模型による色彩配列効果の把握，日本建築学会大会学術講演梗概集，(1993)，1119-1120(1993)

第二章　実験・調査概要

2-1　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験

2-1-1　実験概要

本研究では、景観形成の場面に市民が参画するために、『百彩創装（ひゃくさいそうそう）』というタイトルで赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験のイベントを実施した。この実験は市民が「色彩参画」によって、自宅の前に飾りつけを行うことで、街路景観を形成し、街並みの景観を捉えなおすことを目的としている。

実験は 2005 年 8 月 14 日に彦根市高宮町で行われた『サマーフェスティバル in たかみや～中山道高宮宿の夏まつり～』の一環として行った。

本研究の実験では、「色彩参画」によって街路に飾り付ける色を「赤」と定めた。これは、江戸時代の彦根城主である井伊直政の「井伊の赤備え」などといったように彦根市の歴史的な色が「赤」であることと、「色彩参画」による景観形成実験は高宮町の夏祭りと同時に行ったために祭りの雰囲気を表すための 2 点が理由である。

以後、単に「実験」と表記した場合も赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を意味するものとする。

2-1-2　街路の飾り方

街路の飾りつけは、地域住民による飾りつけと筆者らによる飾り付けによって行った。地域住民による街路の飾りつけは、各人の家の前に家庭にある「赤いもの」を飾ることによって行った。このとき、「『赤いもの』であればなんでも！！ご家庭にある「赤いもの」であれば何でも飾ってください。例)Tシャツ、座布団、ポット、カサ、おもちゃ、帽子、人形、エプロン、ハンカチなど」[1)]と依頼を行い、飾るものや飾る数などは指定せずに、Tシャツやポット、バケツなどを自由に飾るように指示をした。これは、地域住民が自由に飾り付けを行えるようにするためである。多くの地域住民が容易に実験へ参画できるようにすることと、より主体的に実験へ参画できるようにすることを狙いとしている。

筆者らによる街路の飾りつけは、対象地域の中山道上にたつ電信柱と街路灯に赤い布を巻きつけることによって行った。このとき、電信柱用には 110 cm×200 cm、街路灯用には 50 cm×110 cm の赤のカラーブロードを使用した。対象地域で生活をしていない著者らも飾り付けに参画した理由は、著者らが飾り付けを行うことによって、飾り付けを行う地域が明確になり、地域住民に飾り付けやすくさせることを狙いとしている。

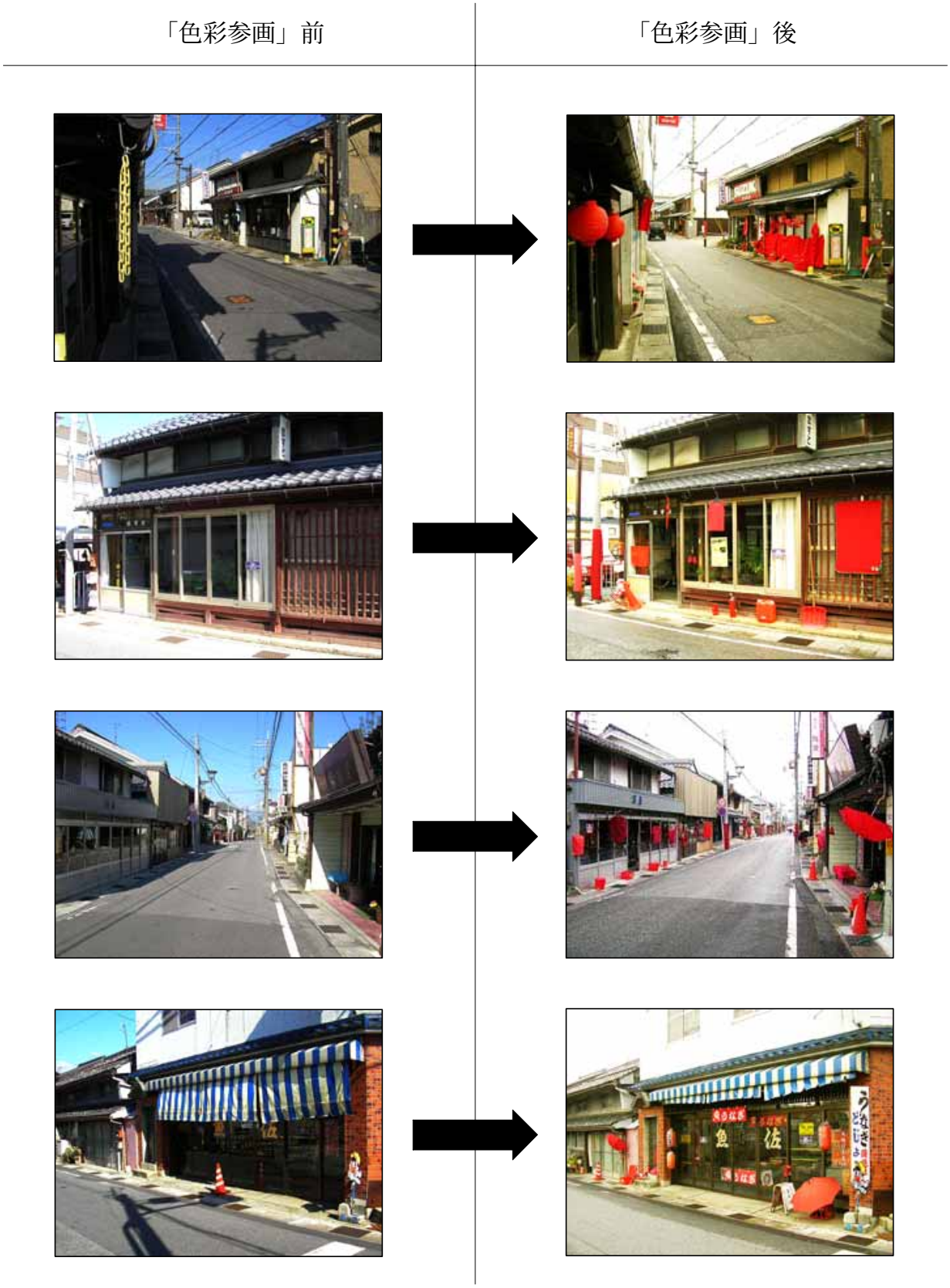


図 2-1　「色彩参画」による景観形成実験の様子

図 2-2　「色彩参画」による景観形成実験の状況

2-2　実験対象

2-2-1　実験対象地域の選定

彦根市近郊の旧中山道宿を対象に実験依頼を行った。滋賀県彦根市鳥居本町(旧鳥居本宿)、滋賀県犬上郡豊郷町(旧豊郷宿)、滋賀県彦根市高宮町(旧高宮宿)の計 3 地域に依頼したが、実験の受け入れは彦根市高宮町(以下、高宮町)のみであり、他の 2 地域については、実験が大規模となることが予想されること、中山道沿いに民家が少ないことなどを理由に実験は受け入れられなかった。高宮町で実験の実施が可能であった理由は、毎年 8 月に『サマーフェスティバル in たかみや～中山道高宮宿の夏まつり～』を行うために、実験を夏祭りのイベントの一環として実施することが可能であるためである。

そのため、本研究では高宮町を実験対象地域とする。なお、高宮町の全ての自治会が旧中山道に沿っているわけではないために、実験は高宮町内の本町と中町の両自治会に面した旧中山道(約 500 m)で行うこととした。

2-2-2　実験対象地域概要[2)]

高宮町は滋賀県の湖東地域、彦根市の西の端に位置し、平成 17 年 10 月末現在、2427 世帯、人口 6206 人(男：3190 人　女：3016 人)の町である。現在の高宮町は江戸時代には近江国犬上郡高宮村であった。江戸時代に中山道六十七宿の六十四宿目[3)]とされた歴史ある町である。

本研究の実験を行う本町と中町の両自治会は高宮町内に位置し、旧中山道と接している地域である。この地域は旧中山道の宿場町として栄えた歴史ある地域である。その趣は現在も残っており、歴史ある建物と現代の建物とが連なって建つ商店街となっている。

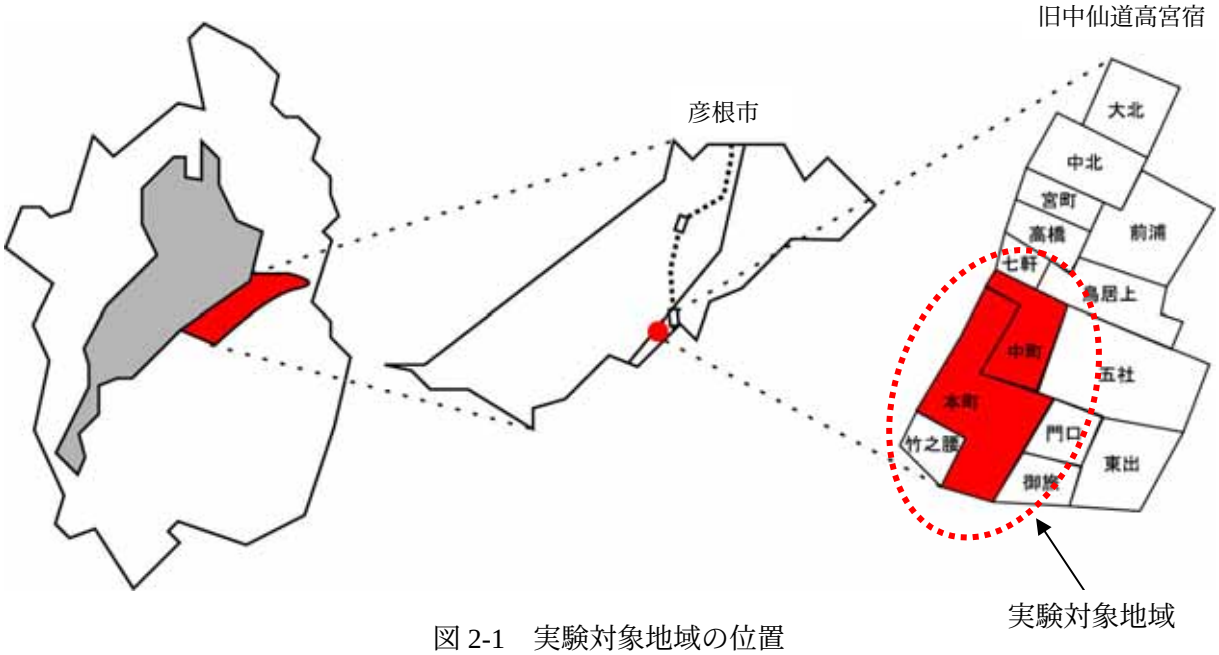


図 2-1　実験対象地域の位置

2-2-3　実験対象者概要

本研究では、実験結果の分析段階で実験対象者の分類を円滑に行うために、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の対象者と非対象者を居住地によって明確に分類した。

実験の対象者は、実験を行う中町または本町に家を持つ地域住民のみとする。例え、高宮町の住民であっても、中町または本町に居住していない場合は実験の対象者としない。

なお、本研究で実施する「色彩参画」による景観形成実験への参画世帯数は 55 世帯である。

2-3　調査対象

2-3-1　調査対象者の選定

本研究では、高宮町の地域住民を調査の対象とする。

なお、実験への参画の有無による街路景観に対するイメージ変化の差を把握するために、あらかじめ赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画した地域住民と参画しなかった地域住民の 2 つのグループに分類することが出来るように調査対象者を選定した。

以後、実験へ参画した地域住民を参画者、実験へ参画しなかった地域住民を不参画者と表現する。

2-3-2　調査対象者概要

参画者としては、2-2-3 で説明を行った実験対象者を選定した。不参画者としては、高宮夏まつり実行委員会か高宮学区連合自治会のどちらかに在籍する地域住民を選定した。不参画者は、彦根市高宮町の地域住民ではあるものの、中町・本町に家を持たないため、実験対象者ではない。

不参画者に高宮夏まつり実行委員会と高宮学区連合自治会のどちらかに在籍する地域住民を選定した理由は、どちらの団体も『サマーフェスティバル in たかみや～中山道高宮宿の夏まつり～』の運営に対して、中心的な役割を担っている団体であるために、実験によって飾り付けられた街路を目にすることが予想されるためである。

表 2-1　調査対象者概要

	参画者	不参画者
対象	中町・本町の地域住民	夏まつり実行委員会 高宮学区連合自治会
内容	実験対象者	実験対象者以外の 地域住民

2-4　実験・調査の流れ

本研究で行う実験・調査の流れと内容を以下に示す。

本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の影響を明らかにするために、実験前後にアンケート調査を行い、街並みの景観イメージと景観認識を調査する。

実験前のアンケート調査によって、現状の調査対象者の街並みに対して抱く景観イメージと景観認識を探る。そして、実験後にもアンケート調査を行うことによって、調査対象者の抱く街並みに対する景観イメージと景観認識の変化を明らかにする。

なお、調査にあたり、実験前に説明日を設け実験の説明と同時に実験前後に行う街路景観イメージ調査への協力を依頼した。

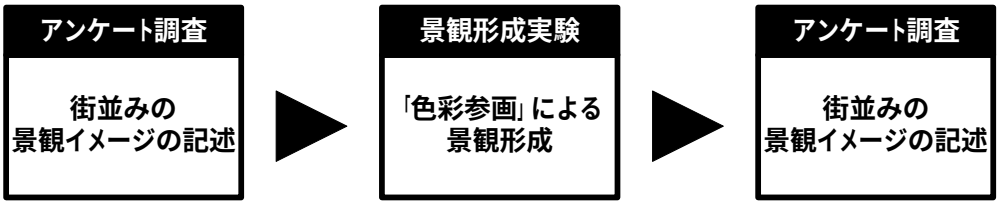


図 2-4　実験・調査の流れ

表 2-2　実験・調査の流れと対象者の動き

	実験の流れ	調査の流れ	調査対象者の作業
説明日	実験への協力依頼	事前・事後アンケート調査票配布	事前アンケート記入
	実験内容説明	アンケート調査説明	飾り付けるものの決定 (参画者のみ)
実験日	景観形成実験開始	写真・ビデオ撮影	街路の飾りつけ (参画者のみ)
			事後アンケート記入
回収日		アンケート調査票回収	

2-5　景観イメージ及び景観認識に関するアンケート調査

2-5-1　調査概要

本研究では、調査対象者の抱く景観イメージと調査対象者の景観認識及び実験への関心を把握するために、実験を行う前後にアンケート調査を行った。本研究における景観イメージとは、対象地域の街並みの雰囲気を指す。また、本研究における景観認識とは、対象地域の街並みからイメージする色と、街並みへの関心を指す。アンケート調査は実験前に行う事前アンケート調査票と実験後に行う事後アンケート調査票を用意した[4)]。

事前アンケート票と事後アンケート票の両アンケート調査票で共通するアンケート調査項目は、景観イメージに関するアンケート調査項目、景観認識に関するアンケート調査項目の 2 つの調査項目である。

事前アンケート調査票には、上記の 2 つの調査項目の他にフェイスシートを追加した。事後アンケート調査票には、上記の 2 つの調査項目の他に実験への関心に関するアンケート調査項目を追加した。

事前アンケート調査票、事後アンケート調査票に用いたアンケート項目を表 2-3 に示す。

表 2-3　実験前後のアンケート調査項目

	事前アンケート調査票	事後アンケート調査票
景観イメージに関する項目	○	○
景観認識に関する項目	○	○
実験への関心に関する項目	×	○
フェイスシート	○	×

○：アンケート調査項目あり
×：アンケート調査項目なし

本研究では、調査対象者の属性と景観イメージの関係を明らかにするためにフェイスシートを用意した。フェイスシートは、調査対象者の性別に関する項目と年代に関する項目、職業に関する項目からなる。

景観イメージに関するアンケート調査項目は、SD 法(Semantic Differential method)を用いた景観イメージに関する項目からなる。詳細は「2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査項目」にて説明を行う。

景観認識に関するアンケート調査項目は、街並みをイメージする色に関する項目と街並みへの関心に関する項目からなる。詳細は「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査項目」にて説明を行う。

実験への参画の度合いに関するアンケート調査項目は、実験への参画度に関する項目と実験を見たか否かの項目からなる。詳細は「2-5-5　実験への参画の度合いに関するアンケート調査項目」にて説明を行う。

2-5-2　景観イメージ調査手法の検討

景観のイメージを分析するためのいくつかの調査手法について検討を行った[5)]。

表 2-4　イメージ調査手法の比較

調査手法	内容	メリット(○)　デメリット(×)	
インタビュー	インタビューによって調査	○	具体的なエピソードなどを交え、イメージが詳細に表れる。
		×	調査に時間がかかり、多くのデータを揃えづらい。
認知マップ調査	自由に空間要素を描く	○	要素間の相互関係を直感的に表現できる。
		×	被験者の能力に左右され、結果の分析も難しい。
SD 法	形容詞対による尺度を用いて測定	○	量的データとしてイメージを得ることが出来る。
		×	形容詞対の選定によって結果が左右される。
自由記述	設問に対して自由に記述	○	項目によって左右されないために、記述の自由度が高い。
		×	被験者の能力に左右され、記述の質に差が出る。

本研究では、「色彩参画」による景観形成実験を行い調査対象者の抱く景観イメージを調査する。

調査対象が一般的な地域住民であるため、自由記述法や認知マップ調査のような特定の能力に結果が左右される手法は適当ではない。インタビュー調査は調査に時間がかかるために、実験の前後に行うことは難しく、多くのデータを揃えることも期待できない。そのため、本研究においては適当な手法ではない。

本研究で用いるイメージ調査手法は、短時間でイメージ調査を行うことができ、さらに多くのデータを得られる手法であることが必要である。また、調査対象者の抱く彦根市高宮町の景観イメージと乖離しない形でイメージを把握できる手法であることが必要である。そのため、本研究では、景観イメージを調査するための手法として SD 法によるアンケート調査を用いる。

SD法のメリットは、量的データとしてイメージを得ることが出来る点にある。つまり、「言語による尺度を用いて心理実験を行い、その分析を通して、ある『概念』の構造を定量的に」[6]明らかにすることができる点である。また、短時間で回答できる手法であり、多くの調査対象者によるアンケート調査への回答結果を得ることが期待できる。

2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査

本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後の調査対象者の抱く高宮町の景観イメージを把握するために、SD法を用いた街並みの景観イメージに関するアンケート調査項目を用意した。SD法とは、「空間の〈雰囲気〉のような全体的な心的反応を、用意した多くの評定尺度上の量として回答してもらう方法」[7]である。

街並みの景観イメージに関するアンケート項目を図 2-5 に示す。

本研究では、SD法による景観イメージの調査を、「色彩参画」による景観形成実験の前後に行うことによって、「色彩参画」が景観イメージに与える影響を調査する。本研究で用いる 20 対の形容詞による評価尺度は、「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって変化すると予想される、街並みの活気、統一感及び街並みへの親近感のイメージに関する形容詞対を考慮しつつ、景観のイメージを基に研究を行っている既往研究[8)9)10)]を参考に選定した。

なお、街並みの景観イメージに関するアンケート調査項目は、事前アンケート調査票と事後アンケート調査票に共通して含まれているアンケート調査項目である。

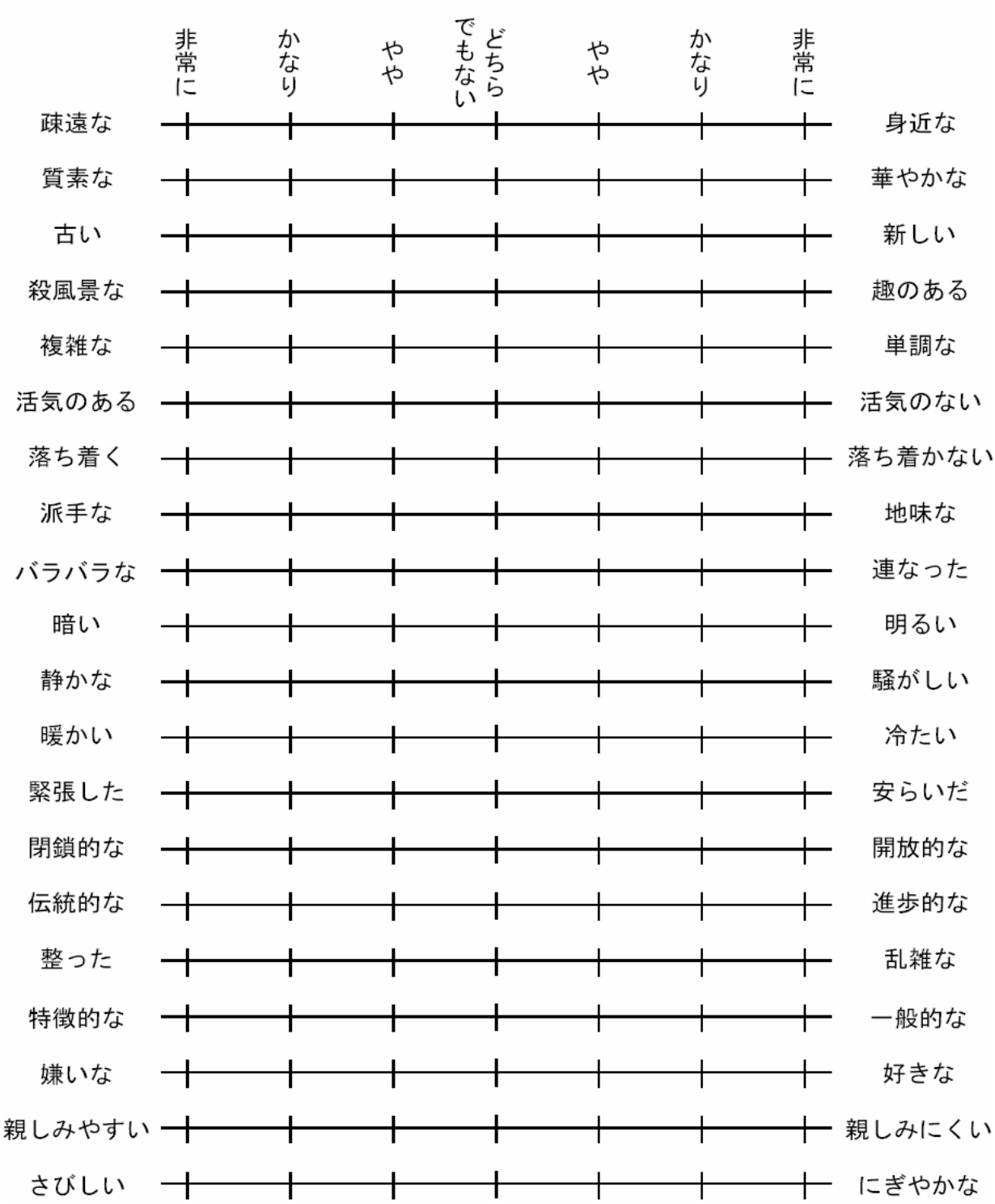


図 2-5　街並みの景観イメージに関するアンケート調査項目

2-5-4　景観認識に関するアンケート調査

本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後の調査対象者の景観認識を明らかにするために、景観認識に関するアンケート調査項目を用意した。景観認識に関するアンケート調査は、街並みをイメージする色に関する項目と街並みへの関心に関する項目からなる。

なお、景観認識に関するアンケート調査項目は、事前アンケート調査票と事後アンケート調査票に共通して含まれているアンケート調査項目である。

本研究では、調査対象者の景観認識を街並みをイメージする色と街並みへの関心の 2 つの調査項目によって明らかとしていく。「伝統的な町や集落には、その町、集落に固有の色があるといわれている。」[11)]とあるように、色彩は街並みの景観を作り出す大きな要因の一つである。そのため、調査対象者の抱く街並みをイメージする色を分析することは、景観認識を調査する上で必要な項目であると考えられる。

また、街並みへの関心へ回答される景観要素は、調査対象者の景観認識の中で重要な景観要素であると考えられる。そのため、街並みへの関心を分析することは、景観認識を調査する上で必要な項目であると考えられる。今後、調査対象者の街並みへの関心タイプと街並みをイメージする色を総称して景観認識と呼ぶ。街並みへの関心タイプについては「3-1 分析の流れ」において説明する。

街並みをイメージする色に関する項目は、街並みをイメージする色とその理由を回答する形式とした。これにより、調査対象者の景観認識を理由とともに色で把握することができる。街並みの関心に関する項目は、関心のある景観要素とその理由を回答する形式とした。これにより調査対象者の景観認識を基とした重要と感じる景観要素を理由とともに把握できる。

街並みをイメージする色に関する項目への回答形式は、イメージする色とその理由を自由に記述する形式で調査を実施した。これは、調査対象者の回答するイメージする色をあらかじめ予測することが不可能であるためである。また、選択項目にすることで多様な回答を得られることを期待したためである。

街並みの関心に関する項目への回答形式は、関心のある景観要素とその理由を自由に記述する形式で調査を実施した。これは、調査対象者の回答する街並みの景観要素をあらかじめ予測することが不可能であるためである。また、自由記述形式にすることで多様な回答を得られることを期待したためである。

街並みをイメージする色に関する項目を表 2-5 に、街並みへの関心に関する項目を表 2-6、表 2-7 に示す。

表 2-5　街並みをイメージする色に関する項目

内容	街並みをイメージする色
質問	高宮の街並みでイメージする色は何色ですか？
方法	自由記述
記述内容	色、理由

表 2-6　街並みへの関心に関する項目①

内容	街並みへの関心(選択)
質問	高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はありますか？
方法	一つ選択
回答項目	ある
	ない
	その他(　　)

表 2-7　街並みへの関心に関する項目②

内容	街並みへの関心(自由記述)
質問	高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はどこですか？
方法	自由記述
記述内容	場所、理由

2-5-5　実験への関心に関するアンケート調査

本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への関心と景観イメージの関係、景観認識との関係を明らかにするために実験への関心に関するアンケート調査項目を用意した。実験への関心に関するアンケート調査は、実験への参画度に関する項目と実験を見たか否かの項目からなる。

本研究では、実験への関心を実験への参画度の調査項目によって明らかとしていく。実験への参画度に関する項目は「色彩参画」によって街並みに飾り付けた数量と飾り付けた種類を回答する形式とした。これにより、参画者の実験への参画の度合いを飾ったものの数量と種類数で把握することができる。

実験を見たか否かの項目は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験により飾り付けた街並みを目にしていない調査対象者を判別するために設けた。本研究では、不参画者も赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験により飾り付けられた街並みを目にすることを考慮しているために、飾り付けた街並みを目にしていない調査対象者を把握するためである。

なお、実験への関心に関するアンケート調査項目は、事後アンケート調査票のみにしか含まれていないアンケート調査項目である。

実験への参画度に関する項目への回答形式は、「色彩参画」によって街並みに飾り付けた数量と飾り付けた種類を自由に記述する形式で調査を実施した。これは、調査対象者が街路に飾り付けるものをあらかじめ予測することが不可能であるためである。また、選択回答形式とすると選択項目に影響され、実験当日に街路に飾られるものが限定されることが考えられるためである。

実験を見たか否かの項目を表 2-8 に、実験への参画度に関する項目を表 2-9、表 2-10 に示す。

表 2-8　実験を見たか否かの項目

内容	実験の様子を見たか否か
質問	百彩創装(赤いものが飾られた中山道)を見ていただけましたか？
方法	一つ選択
回答項目	見た
	見てない
	その他 (　　)

表 2-9　実験への参画度に関する項目①

内容	実験への参画度(選択)
質問	道に何か赤いものを飾っていただけましたか？
方法	一つ選択
回答項目	飾った
	飾らなかった
	その他(　　)

表 2-10　実験への参画度に関する項目②

内容	実験への参画度(自由記述)
質問	どこに何を飾られましたか？
方法	自由記述
記述内容	飾ったもの、飾った数、 飾った場所

脚注及び参考文献

[1)]実験対象者への依頼書より抜粋。実験対象者への依頼書は巻末の付録を参照

[2)]Hikone City：人口の概要
〈http://www.city.hikone.shiga.jp/shiminkyoseibu/shimin/jinko.html〉，2005-11-17

[3)]彦根城博物館編：江戸時代の高宮ー在郷町の歴史ー，p.2，彦根市教育委員会(2001)

[4)]調査票は巻末の付録を参照

[5)]日本建築学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法，株式会社井上書院(1994)

[6)]日本建築学会編：前掲書，p.65，株式会社井上書院(1994)

[7)]日本建築学会編：前掲書，p.65，株式会社井上書院(1994)

[8)]絹原一寛・他,：歴史的街並みを持つ地方都市に対する出身者の景観認識に関する研究ー兵庫県出石町を事例として，都市計画論文集，(36)，739-744(2001)

[9)]谷口小百合･他,：庭園景から受ける癒しのイメージに関する調査研究, 東京農大農学集報, 48(3), 115-127(2003)

[10)]川崎雅史：港湾空間のイメージ分析ーメディアイメージと現地イメージの比較分析ー，土木計画学研究・論文集，(5)，99-106(1987)

[11)]景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.53，株式会社彰国社(2005)

第三章　分析方法

3-1　分析の流れ

本研究の分析の流れを図 3-1 に示す。

本研究では、景観認識と「色彩参画」の関係と「色彩参画」と景観イメージの関係、景観認識と景観イメージの関係の 3 点を明らかにするために、下記の流れに沿って分析を行う。分析を行い、上記の関係を明らかにすることにより、景観形成における「色彩参画」の効果を明らかにすることを狙いとしている。

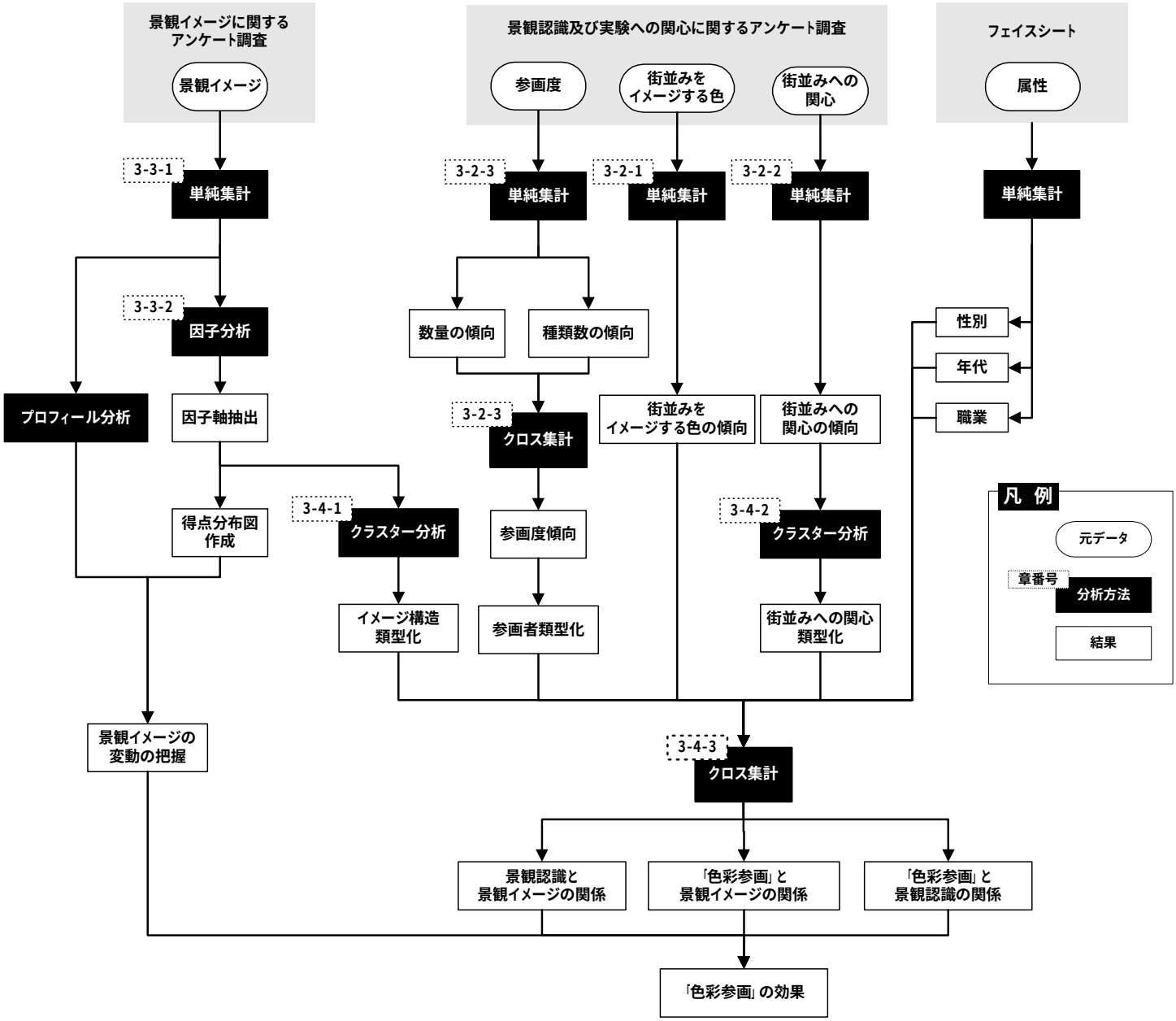


図 3-1　分析の流れ

調査対象者の特徴を明らかにするため、フェイスシートの結果を基に単純集計を行い、性別と年代、職業の傾向を明らかにする。

調査対象者の景観認識を明らかにするために、「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査」で述べた、街並みをイメージする色に関する項目(表 2-4　街並みをイメージする色に関する項目)と街並みの関心に関する項目(表 2-5　街並みへの関心に関する項目①　表 2-6 街並みへの関心に関する項目②)の結果を基に、単純集計(3-2-1、3-2-2)による分析を行う。この単純集計による分析によって、街並みをイメージする色の傾向と街並みへの関心の傾向を明らかにする。ここで得る、街並みをイメージする色と街並みへの関心の傾向をもとに考察を行い、「色彩参画」と景観認識の関係を明らかにする。なお、街並みへの関心は多様な回答が予想されるために、単純集計を行った後に、クラスター分析(3-4-2)を行い、調査対象者を街並みへの関心タイプによって類型化を行う。今後、街並みへの関心の傾向による調査対象者の分類結果を「街並みへの関心タイプ」と呼ぶ。

実験への参画の度合いによって参画者を分類するために、「2-5-5　実験への関心に関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(表 2-8　実験への参画度に関する項目①　表 2-9 実験への参画度に関する項目②)の結果を基に、単純集計(3-2-3)による分析を行い、街並みに飾り付けたモノの数量と種類数の傾向を把握する。その後、飾り付けた数量と種類数を用いてクロス集計(3-2-3)を行うことにより、実験への参加度の傾向を明らかにし、参画タイプによる参画者の類型化を行う。今後、実験への参角度による参画者の分類結果を「実験への参画タイプ」と呼ぶ。なお、この分析は参画者を実験への参画の度合いによって分類することを目的としているために、分析対象は参画者のみとなる。

調査対象者の景観イメージを把握するために、「2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(図 2-4　SD 法を用いたアンケート項目)の結果を基に、単純集計(3-3-1)による分析を行い、イメージプロフィールを作成し、プロフィール分析を行う。単純集計によって得た結果を基に因子分析(3-3-2)による分析を行い、調査対象者の景観イメージ構造を明らかにする。

調査対象者を景観イメージ構造タイプ毎に分類を行うために、上記の因子分析によって得られる因子得点を基に、クラスター分析(3-4-1)を行い調査対象者の類型化を行う。今後、景観イメージ構造の傾向による分類結果を「景観イメージ構造タイプ」と呼ぶ。

以上の分析によって得た結果を用いて、「色彩参画」と景観イメージの関係、景観認識と景観イメージの関係の 2 点を明らかにするために、クロス集計(3-4-3)による分析を行う。クロス集計には、調査対象者の景観認識(街並みをイメージする色、街並みへの関心タイプ)と景観イメージ構造タイプ、実験への参画の有無及び参画タイプを用いて行う。

全ての分析を終えた後、景観認識、景観イメージ、「色彩参画」の関係性を基に考察を行い、調査対象者の景観イメージ及び景観認識へ与える「色彩参画」の効果を明らかにする。

図中の番号は本章の章番号と対応している。以下、詳細を説明する。

3-2　景観認識及び実験への関心に関するアンケートの単純集計による分析

3-2-1　街並みをイメージする色の単純集計

調査対象者の景観認識を明らかにするために、街並みをイメージする色項目への回答結果の単純集計を行う。「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査」で述べたように、「伝統的な町や集落には、その町、集落に固有の色があるといわれている」[1)]。色彩は街並みの景観を作り出す大きな要因の一つである。つまり、調査対象者の抱く街並みをイメージする色を分析することは、景観認識を調査する上で必要な項目であると考えられる。

ここでは、「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(表 2-4　街並みをイメージする色に関する項目)への回答結果を基に、記述内容、想起理由を集計及び分類を行うことによって、参画者と不参画者の街並みをイメージする色の傾向と特徴を把握する。ここで得る結果と、「3-2-2　街並みへの関心の単純集計」で述べる、街並みへの関心の分析結果をもとに考察を行い、景観認識と「色彩参画」の関係性を明らかにする。

アンケート調査票の「街並みをイメージする色」項目は、調査対象者の抱く街並みをイメージする色を把握するために、イメージする色を問う設問とその色の想起理由を問う設問で構成されている。

「街並みをイメージする色」項目へ記述された想起理由は、以下の 6 つに分類された。

表 3-1　街並みをイメージする色の想起理由の分類と具体例

分類項目	分類基準	具体例
プラスイメージ	街並み、色彩の良い部分についての記述がある	「穏やかで暖かい色」
		「町の活気」
マイナスイメージ	街並み、色彩の悪い部分についての記述がある	「古く寂れているイメージ」
		「盛り上がりに欠ける」
具体的な対象から	具体的な想起対象についての記述がある	「町印の旗の色」
		「太鼓祭りのハッピの藍染めの色」
実験のイメージ	実験についての記述がある	「14 日は赤がすごく目に入った」
		「今回の百彩創装でイメージができた」
その他	上記の分類外	「野望」
無回答	想起理由が書かれていない	

3-2-2　街並みへの関心の単純集計

調査対象者の景観認識を明らかにするために、街並みへの関心の単純集計を行う。「2-5-4 景観認識に関するアンケート調査」で述べたように、アンケート調査票の「街並みへの関心」項目は調査対象者の関心を持つ場所やモノを問う設問とその関心要素の想起理由を問う設問で構成されている。街並みへの関心へ回答される場所やモノは、調査対象者の景観認識の中で重要な場所やモノであると考えられる。そのため、街並みへの関心を分析することは、景観認識を調査する上で必要な項目であると考えられる。

本研究では、「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(表 2-5 街並みへの関心に関する項目①　表 2-6　街並みへの関心に関する項目②)への回答結果を基に、記述内容、想起理由を集計、分類を行うことによって、調査対象者の街並みへの関心の傾向と特徴を把握する。ここで得る結果と、「3-2-1　街並みをイメージする色の単純集計」で述べた、街並みをイメージする色の分析結果をもとに考察を行い、景観認識と「色彩参画」の関係性を明らかにする。

なお、記述数の差の検定には、「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用い、カイ二乗検定を行う。

「街並みへの関心」項目へ記述された場所は、以下の 5 つに分類された。

詳細は表 3-2 を参照。()内は筆者加筆部分

表 3-2　街並みへの関心の記述内容の分類と具体例

分類項目	分類基準	具体例
中山道に関する記述	中山道・街並みに関する記述がある	「中山道」、「街並み」、「(中山道の)道幅」
シンボルに関する記述	高宮町のシンボルに関する記述がある	「大鳥居」、「常夜燈」、「無賃橋」
電柱・街路灯に関する記述	電柱・街路灯に関する記述がある	「街路灯」、「電柱」、「中山道の電柱」
家屋・空き地に関する記述	家屋・空き地に関する記述がある	「瓦屋根」、「商店」、「空き地」
その他の記述	上記の分類以外	「鳥居の前の信号」、「中山道の案内板」、「太鼓祭り」

「街並みへの関心」項目へ記述された想起理由は、以下の 3 つに分類された。
詳細は表 3-3 を参照。()内は筆者加筆部分。

表 3-3　街並みへの関心の想起理由の分類と具体例

分類項目	分類基準	具体例(理由)
利便性に関する理由	街並みに利便性を求める記述がある	「歩行や車の通行に障害になっている」
		「(数が)足りていない」
歴史に関する理由	街並みの歴史的価値を考慮した記述がある	「高宮の歴史を残したい」
		「古いのも大事」
景観に関する理由	街並みの景観的価値を考慮した記述がある	「宿場町のイメージに合致している」
		「宿場町としての景観を損ねないために」
その他の理由	上記の分類以外	「心のよりどころ」
		「素晴らしい祭りなので、もっと PR」
無回答		

3-2-3　実験への参画度の単純集計

参画者の実験への参画の度合いによって参画者を分類するために、実験への参画度の単純集計を行う。ここでは、「2-5-5　実験への関心に関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(表 2-8　実験への参画度に関する項目①　表 2-9　実験への参画度に関する項目②)への回答結果を基に、記述数、記述内容を集計、分類を行うことによって、実験参画者が街並みに飾り付けたものの数量、飾り付けたものの種類数を明らかにする。

「飾り付けた数量」と「飾り付けた種類数」は、実験へ参画するために調査対象者が用意し、街並みに飾り付けたものの種類数と種類数を表すものである。そのため、「飾り付けた数量」と「飾り付けた種類数」は調査対象者の実験への参画度を明らかにするために、有効な数値であると考えられる。

単純集計後は、集計結果を基に、「飾り付けた数量」と「飾り付けた種類数」とのクロス集計を行う。クロス集計で得た結果を基に、参画度が高いグループと参画度が低いグループに類型化を行う。

以後、参画度が高いグループを「高参画者」、参画度が低いグループを「低参画者」と表現する。

なお、クロス集計には「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用いて行った。

3-3　調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造の分析

3-3-1　プロフィール分析による街並みの景観イメージ構造の分析

調査対象者の景観イメージを把握するために、街路景観イメージに関するアンケート項目への回答を基に分析を行う。

ここでは、「2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(図 2-4　SD法を用いたアンケート項目)への回答結果を基に、単純集計を行い、参画者と不参画者及び「3-2-3　実験への参画度の単純集計」で説明を行った高参画者と低参画者の評価尺度ごとの平均値を算出し、得られた数値を基にグラフを作成する。これをイメージプロフィールと呼ぶ。イメージプロフィールとは「サンプルごとの平均値をプロットしたもの」[2)]である。イメージプロフィールを用いた分析を「プロフィール分析といい、対象の評価の特性を検討する材料となる」[3)]。つまり、イメージプロフィールを基に分析することにより、対象の評価の特性を明らかにすることが出来る。

本研究では、単純集計で得た結果を用いてイメージプロフィールを作成し、実験前後の参画者と不参画者及び低参画者と高参画者の実験前後のイメージプロフィールの変動の比較によって考察を行い、「実験前後の街路景観イメージの変動」を把握する。

なお、イメージプロフィールの差の検定は t 検定を用いた。

イメージプロフィールの例を図 3-2 示す。

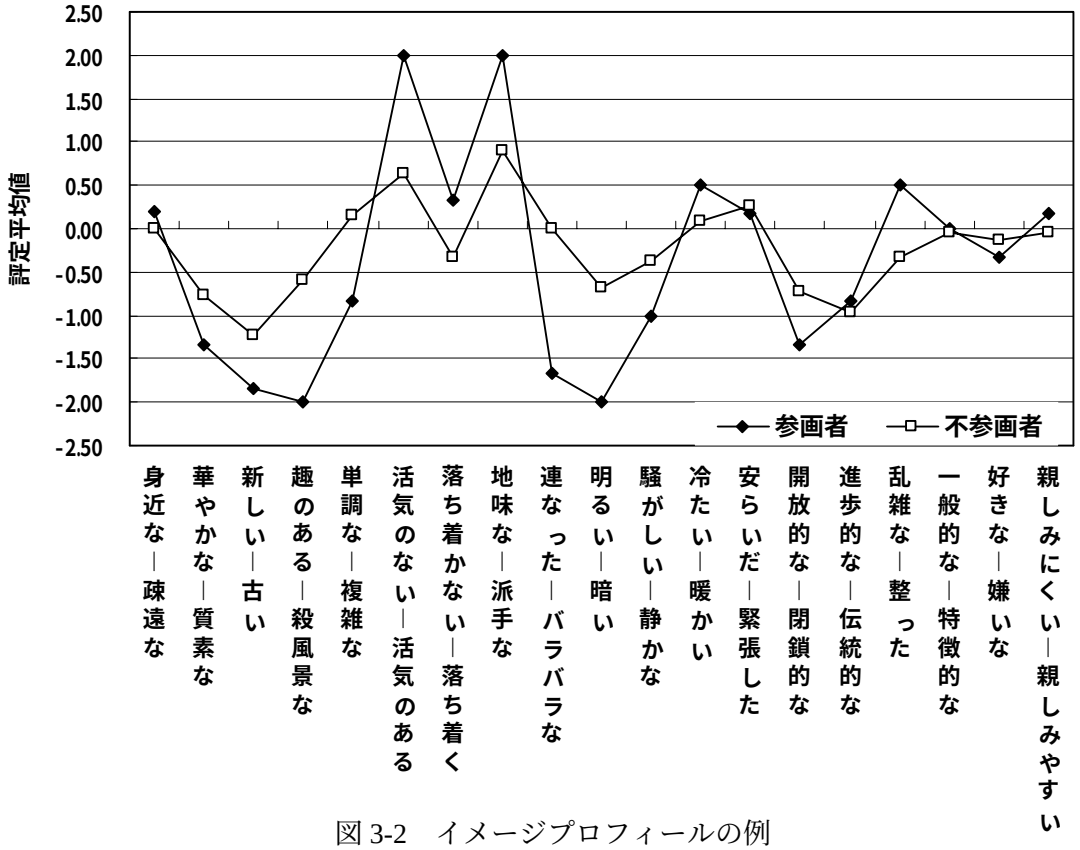


図 3-2　イメージプロフィールの例

3-3-2　因子分析による街並みの景観イメージ構造の分析

街路景観イメージに関するアンケート項目への回答を基に因子分析による分析を行う。

因子分析とは「複数の量的データの測定値に共通する変動(因子)を取り出す統計手法」[4)]である。

本研究ではSD法を用いた景観イメージ調査を行っている。SD法によるイメージ調査は「空間の〈雰囲気〉のような全体的な心理反応を、多くの評定尺度の量として回答してもらう方法である。(中略)数学的処理(因子分析)を施してこれを整理する。もしその結果、n個の項目(尺度)で代表させることが適当であることがわかったら、実際の 3 次元の空間(物理的空間)は、n次元の心理的空間上の点として、定量的に表現されたこととなる」[5)]。また、「SD法で多数の評価尺度(形容詞対)によって測定されたデータを因子分析することによって、いくつかの類似特性を持つ評価言語を統合して共通因子として抽出し、その因子の意味を解釈することによって、対象の評価を測定する代表的な評価軸を明らかにすることができる」[6)]。

以上からわかるように、景観イメージの調査手法として SD 法を採用した場合、調査によって得た言語尺度の評定値のデータを基にして、景観イメージを表現するための代表尺度を得るために因子分析を行う必要がある。

本研究では、対象地域の街路景観イメージ構造を把握するために、「2-5-3　街並みの景観イメージに関するアンケート調査」で述べたアンケート項目(図 2-4　SD 法を用いたアンケート項目)の結果を用いて因子分析を行う。因子分析後は、潜在的な共通因子として抽出された各軸を解釈し、ネーミングを行う。また、各調査対象者に与えられた因子得点を基に、因子得点分布図を作成し、その傾向を把握する。

なお、因子分析は、「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用いて行った。因子抽出法は主因子法、回転はバリマックス回転を用いた。

因子得点分布図の例を図 3-3 に示す。

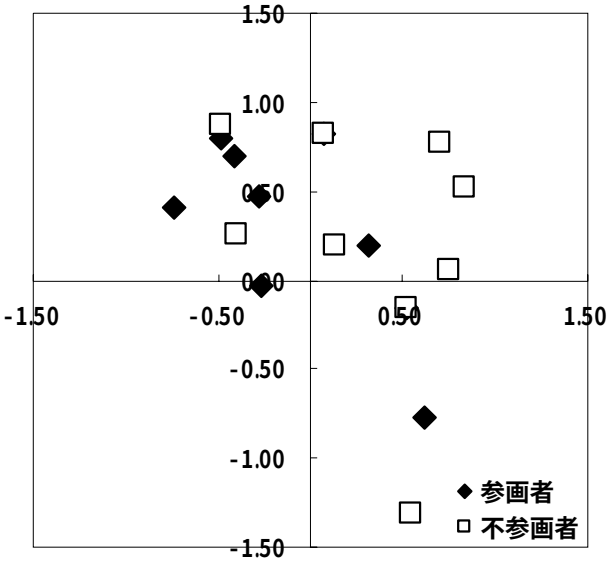


図 3-3　因子得点分布図の例

3-4　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係の分析

3-4-1　景観イメージ構造による調査対象者の類型化

調査対象者を景観イメージ構造タイプ毎に分類を行うために、因子分析によって求めた各調査対象者の因子得点を基に、クラスター分析を行う。

クラスター分析とは、「対象間に何らかの関係が存在し、その大きさが数値として与えられているときに、この数値で対象を分類し理解しやすいものとする」[7)]分析方法である。「ＳＤ法によって測定した値を因子分析して各サンプルの因子得点を計算し、その値を因子軸によって構成される意味空間上の座標と考えてサンプル間の距離の近接性からクラスター分析を行うことがある」[8)]。

本研究では、「3-3-2　因子分析による街並みの景観イメージ構造の分析」において説明した、調査対象者の各軸の因子得点をカテゴリーに用いてクラスター分析を行い、調査対象者のデンドログラムを作成する。クラスター分析後、デンドログラムを参考に調査対象者の類型化を行い、各クラスターのネーミングを行う。以上から、景観イメージ構造タイプ毎に調査対象者の類型化を行う。

なお、クラスター分析は「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用いて行った。クラスター化の方法は Ward 法、間隔は平方ユークリッド距離を用いた。

デンドログラムの例を図3-4に示す。

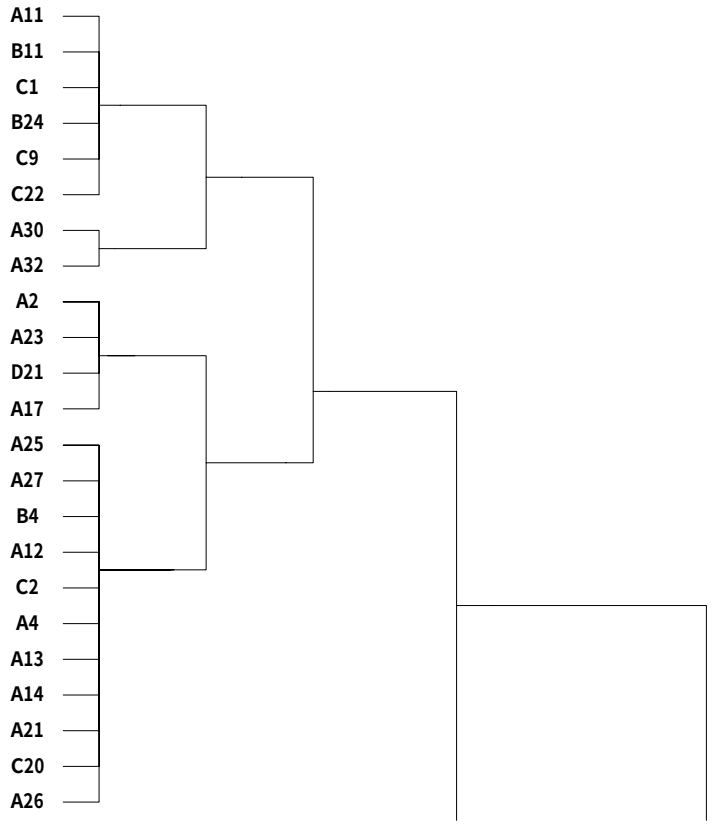


図 3-4　景観イメージ構造タイプのデンドログラムの例

3-4-2　街並みへの関心による調査対象者の類型化

「3-4-1　景観イメージ構造による調査対象者の類型化」で説明を行った、景観イメージ構造タイプへの調査対象者の分類と同様に、調査対象者を街並みへの関心タイプ毎に分類を行うために、「3-2-2　街並みへの関心の単純集計」で述べた単純集計の結果を基に、クラスター分析を行う。

本研究では、「3-2-2　街並みへの関心の単純集計」で得られる街並みへの関心の記述数と回答の有無をカテゴリーに用いて、クラスター分析を行い、調査対象者のデンドログラムを作成する。クラスター分析後、デンドログラムを参考に調査対象者の類型化を行い、各クラスターのネーミングを行う。以上から、景観認識タイプ毎に調査対象者の類型化を行う。

なお、クラスター分析は「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用いて行った。クラスター化の方法は Ward 法、間隔は平方ユークリッド距離を用いた。

3-4-3　景観認識及び実験への参画と景観イメージの関係の分析

本研究では、以下の 2 点を明らかにするためにクロス集計による分析を行う。

① 「色彩参画」と景観イメージの関係

② 景観認識と景観イメージの関係

クロス集計は「2 変数間の関連の仕方について、基本的な情報を過度に加工しないで示してくれる」[9)]手法である。「質的データによる関連性はクロス集計表(cross tabulation)とよばれる表を作成することによって」[10)]明らかにすることが出来る。また、「クロス集計では、2 つの質問項目をクロスして表を作成することにより」[11)]相互の関係性を明らかにすることが出来る。クロス集計はデータ間の関連性を明らかにするために、効果的な手法である。

本研究では、調査対象者の景観認識と景観イメージ構造タイプ、実験への参画の有無及び参画タイプ、フェイスシートより得られる調査対象者の属性を用いて、クロス集計を行う。以上から、「色彩参画」と景観イメージの関係、景観認識と景観イメージの関係を明らかにする。なお、実験への参画タイプに関しては、「3-2-3　実験への参画度の単純集計」で述べたように、調査対象が参画者のみに限られているために、景観イメージ構造タイプと参画タイプのクロス集計による分析は、参画者のみが対象となる。

本研究では、全てのクロス集計を「カテゴリ／カテゴリ」クロス集計で行う。

なお、比率の差の検定はカイ二乗検定を用いた。

クロス集計には「SPSS 12.0J for Windows」ソフトを用いて行った。

クロス集計の組み合わせを表 3-4 に示す。

表 3-4　クロス集計の組み合わせ

	属性			景観認識		参画の度合い	
	性別	年代	職業	街並みをイメージする色	街並みへの関心	参画別分類	参画度別分類
景観イメージタイプ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○

◎：全サンプル対象

○：参画者のみ対象

脚注及び参考文献

[1] 景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.53，株式会社彰国社(2005)
[2] 景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.72，株式会社彰国社(2005)
[3] 景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.72，株式会社彰国社(2005)
[4] 土田昭司：社会調査のためのデータ分析入門，p.137，株式会社有斐閣(1998)
[5] 日本建築学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法，p.65，株式会社井上書院(1994)
[6] 景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.75，株式会社彰国社(2005)
[7] 日本建築学会編：前掲書，p.152，株式会社井上書院(1994)
[8] 景観デザイン研究会：景観用語辞典，p.77，株式会社彰国社(2005)
[9] 盛山和夫・他，：社会調査法，p.111，財団法人放送大学教育振興会(1996)
[10] 土田昭司：社会調査のためのデータ分析入門，p.70，株式会社有斐閣(1998)
[11] 菅民郎：アンケートデータの分析，p.25，株式会社現代数学社(1998)

第四章　調査対象者の景観認識

4-1　調査実施概要

4-1-1　調査対象者

アンケート調査は 2005 年の 7 月～8 月の間に実施した。

「色彩参画」による景観形成実験へ参画した調査対象者に対しては、筆者らが 2005 年 8 月 11 日に各戸をまわり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートを配布した。回収は 2005 年 8 月 20 日に筆者らが各戸をまわり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートを同時に回収した。

「色彩参画」による景観形成実験へ参画しなかった調査対象者に対しては、2005 年 7 月 30 日に行われた夏まつり実行委員会の会議時、2005 年 8 月 6 日に行われた高宮学区連合自治会の定例会時に事前アンケート調査を実施し、その場で回収を行った。不参画者への事後調査は、2005 年 8 月 21 日の夏まつりの反省会時に、事後アンケート調査を実施し、その場で回収した。詳細は表 4-1 を参照。

表 4-1　アンケート調査実施概要

	参画者	不参画者		全体
対象	中町・本町の地域住民	夏まつり実行委員会	高宮学区連合自治会	
事前アンケート配布日	2005 年 8 月 11 日	2005 年 7 月 30 日	2005 年 8 月 6 日	
事前アンケート回収日	2005 年 8 月 20 日	2005 年 7 月 30 日	2005 年 8 月 6 日	
配布数	84	29	19	132
有効数	32	17	8	57
有効回答率	38.1%	58.6%	42.1%	43.2%
「色彩参画」実験	2005 年 8 月 14 日			
事後アンケート配布日	2005 年 8 月 11 日	2005 年 8 月 21 日		
事後アンケート回収日	2005 年 8 月 20 日	2005 年 8 月 21 日		
配布数	84	54		138
有効数	32	25		57
有効回答率	38.1%	46.3%		41.3%
総配布数	168	102		270
総有効数	64	50		114
総有効回答率	38.1%	49.0%		42.2%

以後、実験前に行ったアンケート調査を「事前アンケート調査」、実験後に行ったアンケート調査を「事後アンケート調査」と表現する。

「配布数」とは、アンケート調査票を配布した数である。「有効数」とは、調査有効サンプルの回答したアンケート調査票の数である。調査有効サンプルとは、総調査対象者から事前アンケートのみ、もしくは事後アンケートのみにしか回答していないサンプルを除いたものであり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートに回答したサンプルのみで構成されている。

以後、調査対象者を「サンプル」と表現する。

4-1-2　調査対象者のサンプリング

本研究における調査有効サンプルは、参画者 32 人、不参画者 25 名、合計 57 人である。調査有効サンプルの回答した事前アンケート、事後アンケートで構成される調査有効アンケート数は配布数 270 枚中 114 枚(42.2%)である。調査有効アンケートとは分析段階で分析可能なアンケート調査票を指す。本研究では、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートに回答したサンプルのみを調査有効サンプルとして扱っているために、有効回答率が低くなったと考えられる。

調査有効サンプルのうち、事前アンケートでは実験参画者 1 人、実験不参画者で 6 人、事後アンケートでは実験参画者 3 人、実験不参画者 3 人が、街路景観イメージに関するアンケート調査項目[1)]において一部、無回答の評価尺度があった。そのため、これらのアンケートは景観イメージ構造の分析には用いないとした。しかし、景観認識に関するアンケート調査項目[2)]に関しては回答している。そのため、一部の評価尺度は無回答ではあるものの、街並みをイメージする色の把握、街並みへの関心の把握、実験への参画度の把握を行う上では有効であると考えた。

そのため、街路景観イメージに関するアンケート調査項目において一部、無回答の評価尺度があったアンケート調査票も街並みをイメージする色の分析、街並みへの関心の分析、実験への参画度の分析に関しては、調査有効アンケートとして扱うこととした。

以下、各分析の対象とする調査有効アンケートについて説明する。

「街並みをイメージする色の記述数」、「街並みへの関心」に関する分析は、全調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「街並みをイメージする色の想起理由」に関する分析は、街並みをイメージする色項目への回答のある調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「実験への参画度」に関する分析は、実験後に参画者の回答した調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「景観イメージ構造」に関する分析は、街路景観イメージに関するアンケート調査項目で、欠損値の見られたアンケート調査票(事前アンケート：実験参画者 1、実験不参画 6　事後アンケート：実験参画者 3、実験不参画者 3　合計 13)を除いた、調査有効アンケートを対象に分析を行う。

分析の段階でそれぞれ対象となる調査アンケート数は表 4-2 を参照。

表 4-2　分析ごとの調査有効アンケート数

分析対象	内訳		計
	参画者	不参画者	
街並みをイメージする色の記述数	64	50	114
街並みをイメージする色の想起理由	48	32	80
街並みへの関心	64	50	114
実験への参画度	29	0	29
景観イメージ構造	58	32	90

4-2　サンプルの特徴

参画者、不参画者の両者の属性について単純集計を行った。

詳細は表 4-3、表 4-4 を参照。

表 4-3　参画者、不参画者の性別及び年代

	性別				年代							
	男性	女性	無回答	計	60代～	50代	40代	30代	20代	10代	無回答	計
参画者	17	14	1	32	17	5	3	4	1	1	1	32
不参画者	19	6	0	25	9	10	3	1	2	0	0	25
計	36	20	1	57	26	15	6	5	3	1	1	57
全体%	63.2%	35.1%	1.8%	100.0%	45.6%	26.3%	10.5%	8.8%	5.3%	1.8%	1.8%	100.0%

表 4-4　参画者、不参画者の職業

	職業								
	商工自営業	主婦(主夫)	無職	公務員	会社員	学生	その他	無回答	計
参画者	10	7	5	4	3	1	1	1	32
不参画者	6	2	5	1	7	0	4	0	25
計	16	9	10	5	10	1	5	1	57
全体%	28.1%	15.8%	17.5%	8.8%	17.5%	1.8%	8.8%	1.8%	100.0%

性別では、男性が参画者 17 人、不参画者 19 人、女性が参画者 14 人、不参画者 6 人であった。全体では男性が 36 人であり、全サンプルの 63.2%を占めていることがわかった。参画者と不参画者を比較してみると、不参画者の男性の割合が高いことがわかる。これは、不参画者として選定したサンプルに、高宮町の連合自治会が含まれているためである。連合自治会への出席者は全てが男性で構成されている。

年代では、参画者で 60 代以上が最も多く 17 人であった。不参画者では 50 代と 60 代以上が多く、50 代 10 人、60 代以上 9 人であった。参画者、不参画者ともにサンプルの年齢層は高いことがわかった。全体では 60 代以上が 26 人と最も多く、全サンプルの 45.6%を占めていることがわかった。年代に関しては、参画者と不参画者の間に大きな差は見られない。

職業では、参画者が商工自営業と主婦(主夫)が多く、商工自営業 10 人、主婦(主夫)7 人であった。不参画者は会社員、商工自営業が多く、会社員 7 人、商工自営業 6 人であった。全体で見てみると、商工自営業が 16 人と最も多く、全サンプルの 28.1%を占めていることがわかった。職業に関しても、参画者と不参画者の間に大きな差は見られない。

4-3　街並みをイメージする色に関するアンケート結果

4-3-1　街並みをイメージする色の傾向(全体)

街並みをイメージする色の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケートないの「街並みをイメージする色」項目[3)]への回答結果の単純集計を行い、考察する。

「街並みをイメージする色」項目へ回答された色の集計結果を表 4-5、図 4-1 に示す。

全体の合計値では、赤が最も多く、次に青、灰、茶、緑の順で割合が大きくなっている。

事前アンケートの合計値では、青が最も多く、次に茶、赤、灰の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの合計値では、赤が最も多く、次に青、灰、橙の順で割合が大きくなっている。

実験を行う前後の変化を見てみると、大きく回答数が増加した色は、赤と橙の 2 色である。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが 6 人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは 4 倍弱の 23 人に増加し、事後アンケート結果全体の 40%以上を占めている。また、橙は事前アンケートでは見られなかった色であるが、事後アンケートでは 4 人のサンプルが街並みをイメージする色を橙と回答している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、青と茶の 2 色である。事前アンケートの結果では街並みをイメージする色を青と回答したサンプルが 11 人と事前アンケート結果全体の 20%弱を占めているのに対し、事後アンケートの結果では青と回答したサンプルは半分程度の 6 人に減少している。また、茶は事前アンケートの結果では、7 人と 10%以上を占めてしたのに対して、事後アンケートの結果では、回答が無くなっている。

実験を行うことによって大きく回答数が増加した赤と橙の 2 色は、明度が高く、暖かいイメージを持つ色である。赤のイメージの特徴は、「情熱的、くどい、動的、暖かい」[4)]である。橙のイメージの特徴は、「明るさ、陽気さ、派手さ、情熱的な感じ、動的な感じ、暖かさ」[5)]である。実験を行うことによって大きく回答数が減少した青と茶の 2 色は、明度が低く、冷たいイメージや暗いイメージを持つ色である。青のイメージの特徴は、「深い、固い、理知的な、強い、男性的な」[6)]である。茶のイメージの特徴は、「暗さ、陰気さ、深さ、重さ、にごった感じ、地味さ、大人っぽさ、男性的な」[7)]である。

以上の結果より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みをイメージする色は暗さや、暗さ、地味さや男性的なイメージを持つ色が減り、明るさ、陽気さ、暖かさのイメージを持つ色が増加することがわかった。

表 4-5　実験前後における街並みをイメージする色

	事前		事後		全体
	参画者	不参画者	参画者	不参画者	
赤	2	4	15	8	29
青	4	7	1	5	17
灰	5	0	3	1	9
茶	7	0	0	0	7
緑	1	2	2	1	6
橙	0	0	4	0	4
藍	1	2	0	1	4
黒	2	0	0	1	3
黄	1	0	0	0	1
無回答	9	10	7	8	34
計	32	25	32	25	114

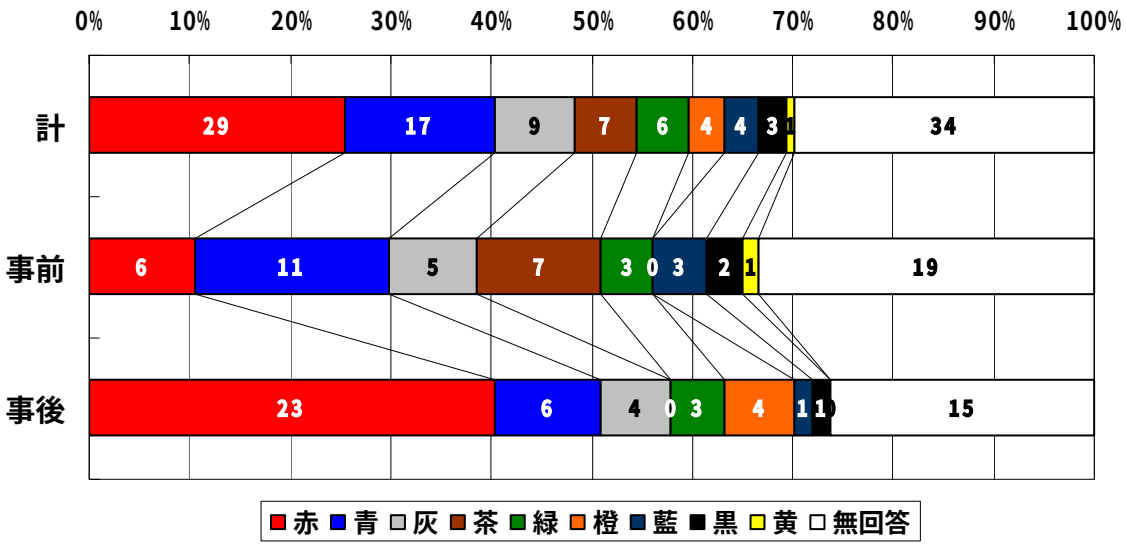


図 4-1　実験前後における街並みをイメージする色の記述数(全体)

4-3-2　街並みをイメージする色の傾向(参画者×不参画者)

参画者、不参画者毎の集計結果を図 4-2 に示す。

参画者と不参画者の事前アンケートの結果を比較してみると、茶と灰の割合に違いが見られる。街並みをイメージする色として、参画者では茶や灰と回答する割合が高くなっているが、不参画者では茶と灰の回答が見られない。

茶は「4-3-1　街並みをイメージする色の傾向(全体)」で述べたように、暗さ、陰気さ、深さ、重さ、にごった感じ、地味さ、大人っぽさ、男性的なのイメージを持つ色である。灰は「暗い、陰気、にごった、地味な、静的な、冷たい、大人っぽい」[8)]イメージを持つ色である。実験前の参画者は、不参画者に比べ街並みの地味さや暗さを強く感じていたと考えられる。参画者は実験対象地域で生活しているために街並みを日常的に目にしている。そのため街並みの地味さや暗さが強く印象付けられているためであると考えられる。

次に、参画者と不参画者の実験を行う前後の街並みをイメージする色の変化を見てみる。

参画者の事前アンケートの結果では、茶が最も多く、次に青、灰の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの結果では、赤が最も多く、次に橙、灰の順で割合が大きくなっている。

参画者の実験を行う前後の変化を見てみる。事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が増加した色は、赤と橙の 2 色である。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが 2 人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは7倍強の15人に増加し､参画者の事後アンケート結果全体の45%以上を占めている。また、橙は事前アンケートの結果では見られなかった色であるが、事後アンケートの結果では 4 人のサンプルが街並みをイメージする色を橙と回答している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、茶と青、黒の 3 色である。事前アンケートの結果では街並みをイメージする色を茶と回答したサンプルが 7 人と参画者の事前アンケート結果全体の 20%以上を占めているのに対し、事後アンケートの結果では、回答が無くなっている。青は事前アンケートの結果では 4 人のサンプルが回答した色であるが、事後アンケートの結果では、1/4 の 1 人に減少している。黒は事前アンケートの結果では 2 人のサンプルが回答した色であるが、事後アンケートの結果では見られなくなっている。

参画者のアンケート結果を見てみると､「4-3-1 サンプル全体から見た街並みをイメージする色の傾向」で述べた全体から見た街並みをイメージする色と同様に、実験を行うことによって大きく回答数が増加した色は、暖かいイメージを持つ色であり、大きく回答数が減少した色は、暗いイメージを持つ色であることがわかった。

不参画者の事前アンケートの結果では、青が最も多く、次に赤の割合が大きくなっている。事後アンケートの結果では、赤が最も多く、次に青の割合が大きくなっている。

不参画者の実験を行う前後の変化を見てみると、事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が増加した色は、赤のみである。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが 4 人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは 2 倍の 8 人に増加している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、見受けられない。

不参画者のアンケート結果を見てみると、実験を行うことによって大きく回答数が増加した色は、赤であった。しかし、「4-3-1 サンプル全体から見た街並みをイメージする色の傾向」で述べた、全体から見た街並みをイメージする色の変動や、上述の参画者から見た街並みをイメージする色の変動のような、大きな変化は見られなかった。

以上より、「色彩参画」による景観形成実験に参画したサンプルの方が、実験に参画していないサンプルよりも、街並みをイメージする色が大きく変動することがわかった。また、実験に参画したサンプルは、実験を行うことによって街並みでイメージする色として、暖かいイメージを持つ、赤や橙といった色を選択しやすくなり、暗いイメージを持つ色を選択しにくくなることがわかった。

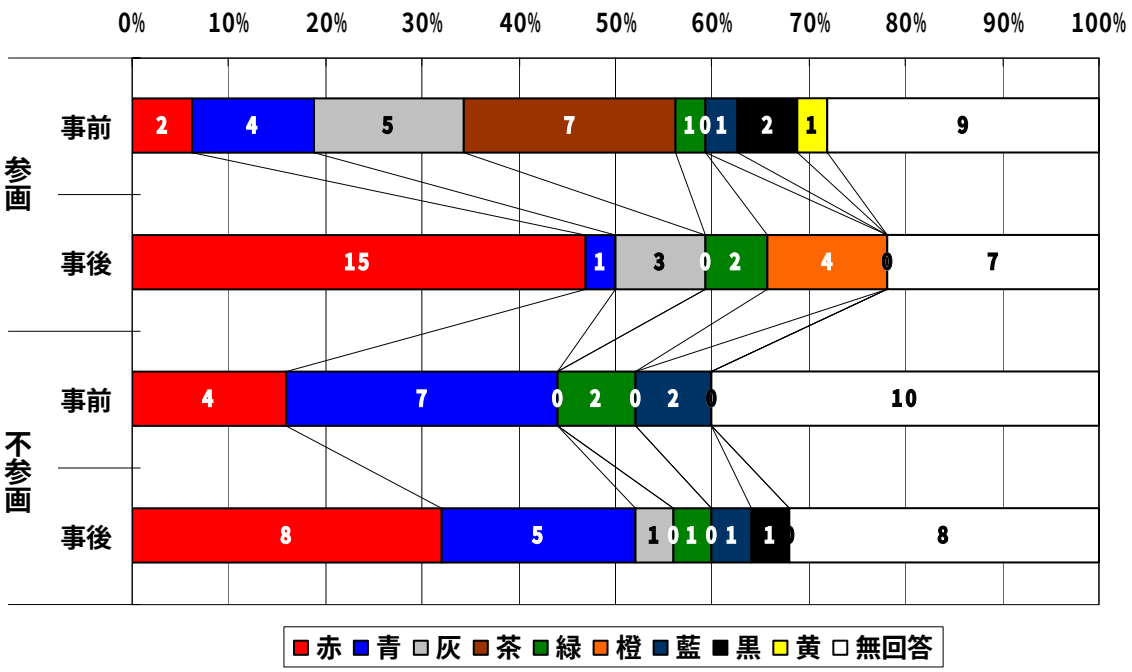


図 4-2　実験前後における街並みをイメージする色の記述数(参画者×不参画者)

4-3-3　街並みをイメージする色の想起理由

街並みをイメージする色の想起理由の傾向を明らかにするために、4-3-1 で集計を行った各色の想起理由の分類と単純集計を行い、考察する。なお、想起理由の分類方法は「3-2-1 街並みをイメージする色の単純集計」で述べた分類基準を用いる。

「街並みをイメージする色」項目へ回答された色の想起理由の集計結果を表 4-6、図 4-3 に示す。

「プラスイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は、赤と橙であった。赤は記述量が多く、50%以上を「プラスイメージ」の想起理由が占めている。橙は記述量は少ないものの、75%を「プラスイメージ」の想起理由が占めている。赤の想起理由は「暖かさ」や「華やかさ、暖かさ」、「活気を呼ぶ」など暖かさや華やかさに関する記述が目立った。「プラスイメージ」以外では「太鼓祭りでのハッピをイメージ」、「井伊の赤鬼をイメージ」といった、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由や、「14 日は赤いものが目に付いたので」といった、「実験のイメージ」からの想起理由などであった。橙の想起理由は「穏やかで暖かい色」、「気分が華やかになった」などであり、赤の想起理由と類似した想起理由が記述されていた。

「マイナスイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は灰であった。灰は 50%以上を「マイナスイメージ」の想起理由が占めている。灰の想起理由は「沈滞化した商店街」や「町全体が暗いから」など街並みの活気の無さ、街並みの暗さに関する記述がほとんどであった。「マイナスイメージ」以外の想起理由は「旧宿場町のイメージ」であり、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由であった。

「具体的な対象のイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は青であった。青は 60%以上を「具体的な対象のイメージ」からの想起理由の記述が占めている。青の想起理由は「琵琶湖をイメージして」、「川・水をイメージ」など琵琶湖、河川の水に関する記述がほとんどであった。想起理由の対象は具体的ではあるが、対象地域である高宮町に直接的な関わりのあるものではない。「具体的な対象のイメージ」からの想起理由以外は、「寂れた町」、「盛り上がりに欠ける」といった、「マイナスイメージ」からの想起理由であった。

「プラスイメージ」からの想起理由、「マイナスイメージ」からの想起理由、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由がほぼ同数となっていた色は茶であった。茶の想起理由の内容を見てみると、「古風な感じがするから」、「古い木造住宅が多く、暖かくふんわりとした感じがするため」、「古く寂れているイメージ」、「中山道の街並み」といったように、街並みの古さに関する想起理由がほとんどを占めていることがわかった。

なお、街並みをイメージする色の想起理由において、参画者と不参画者の間に明確な差は見られなかった。

表 4-6　街並みをイメージする色の想起理由

	プラスイメージ	マイナスイメージ	具体的な対象のイメージ	実験のイメージ	その他	無回答	計
赤	15	1	7	4	1	1	29
青	3	3	11	0	0	0	17
灰	1	5	2	0	0	1	9
茶	2	3	1	0	0	1	7
緑	3	0	1	0	2	0	6
橙	3	0	0	1	0	0	4
藍	0	0	2	0	0	2	4
黒	1	1	1	0	0	0	3
黄	0	1	0	0	0	0	1
計	27	14	25	5	3	5	80

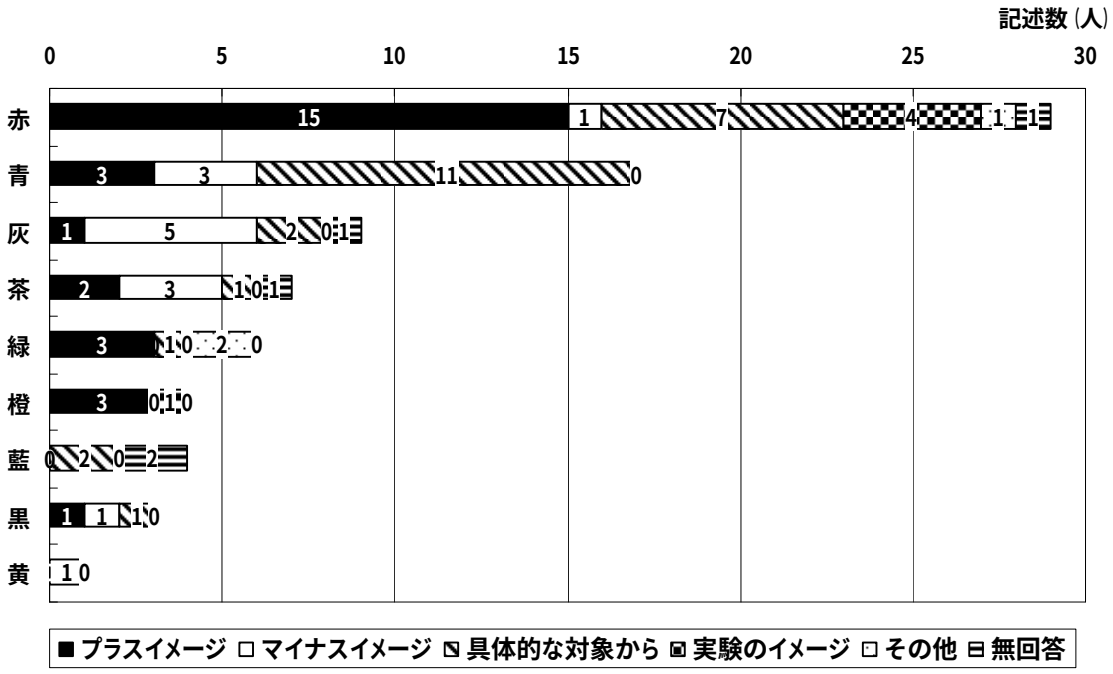


図 4-3　街並みをイメージする色の想起理由

4-3-4　街並みをイメージする色のまとめ

街並みをイメージする色について、以下にまとめる。

- サンプル全体では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みをイメージする色は、暗さや固さ、地味さのイメージを持つ色が減り、明るさ、陽気さ、快活さのイメージを持つ色が増加する。
- 参画者では、街並みをイメージする色を赤と答えるサンプルが 7.5 倍に増加するなど、サンプル全体に比べて、街並みをイメージする色が暖かいイメージを持つ色へ変化する傾向が顕著である。
- 不参画者では、街並みをイメージする色を赤と答えるサンプルが増加しているものの、サンプル全体や参画者と比べると、全体的に街並みをイメージする色の変化は小さい。

街並みをイメージする色の想起理由について、以下にまとめる。

- 実験後に大きく記述数が増加した色は赤と橙であった。赤と橙の想起理由は、街並みの活気に関する「プラスイメージ」の記述がほとんどであり、これらの色は街並みに活気を感じた、もしくは活気を願う心から選択されたと考えられる。
- 実験後に大きく記述数が減少した色は青と茶であった。青の想起理由は、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由がほとんどであった。しかし、その多くは対象地域である高宮町に直接関係するものでは無く、「琵琶湖をイメージして」や「川・水をイメージして」という理由であった。茶の想起理由は「プラスイメージ」によるものと、「マイナスイメージ」によるものの割合の差はほとんど無いものの、その想起理由は街並みの古さに関するものがほんどであった。
- 街並みをイメージする色の想起理由において、参画者と不参画者の間に明確な差は見られなかった。

以上の結果より、サンプルの抱く街並みをイメージする色の傾向を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を選びやすくなる傾向があることがわかった。つまり、実験を行うことによって、サンプルは街並みに活気を感じた、もしくは活気を願うようになったと考えられる。この傾向は、不参画者よりも参画者の方が顕著に現れている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの古さをイメージする色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、街並みの古さのイメージが薄くなったと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、対象地域との関わりの薄い色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験をおこなうことによって、実験前には意識していなかった、新しいイメージを対象地域の街並みに感じるようになったと考えられる。

4-4　街並みへの関心に関するアンケート結果

4-4-1　街並みへの関心の傾向(全体)

街並みへの関心の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「街並みへの関心」項目[9)]への回答結果を分類、単純集計し、考察を行う。

「街並みへの関心」項目へ回答された景観要素の分類方法は「3-2-2　街並みへの関心の単純集計」で述べた分類基準を用いる。回答された景観要素の分類は「中山道に関する記述」、高宮町の「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」、「電柱・街路灯に関する記述」、「その他の記述」の 5 項目に分類した。「シンボルに関する記述」とは「3-2-2 街並みへの関心の単純集計」で述べたように、大鳥居や常夜燈、無賃橋などといった景観要素が記述されているものである。

「街並みへの関心」項目へ回答された景観要素の集計結果を表 4-7、図 4-4 に示す。

全体の合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次に「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」、「その他の記述」、「電柱・街路灯に関する記述」の順で割合が大きくなっている。

事前アンケートの合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次にシンボル、電柱・街路灯の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次に「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」の順で割合が大きくなっている。

実験を行う前後の回答数の変化を見てみると、事後アンケートでは事前アンケートに比べて、回答数が減少していることがわかる。記述数は 21 減少している。減少した記述の内容を見るために、実験を行う前後の景観要素の変化を見てみると、事前アンケートでは全体の 20%弱を占めていた「電柱・街路灯に関する記述」が見られなくなっていることがわかる。一方、「電柱・街路灯以外に関する記述」以外の記述では、実験を行う前後での変化はほとんど見られない。事前アンケート結果での電柱・街路灯の記述数は 13 であった。回答数の減少分全体の 60%以上を占めている。

以上より、「街路灯」、「電柱」、「中山道の電柱」といった「電柱・街路灯に関する記述」が、実験を行うことによって減少することがわかった。「電柱・街路灯に関する記述」は、減少した回答のほとんどを占めていることがわかった。実験を行うことにより、街並みの電柱や街路灯に対する不満が少なくなったと考えられる。つまり、街並みを考える上で、電柱や街路灯への関心が薄くなったと考えられる。

表 4-7　実験前後における街並みへの関心の分類結果

	参画者		不参画者		全体	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
中山道	10	11	10	8	20	19
シンボル	12	12	3	2	15	14
家屋・空き地	5	5	5	3	10	8
電柱・街路灯	8	0	5	0	13	0
その他	6	3	5	3	11	6
計	41	31	28	16	69	47

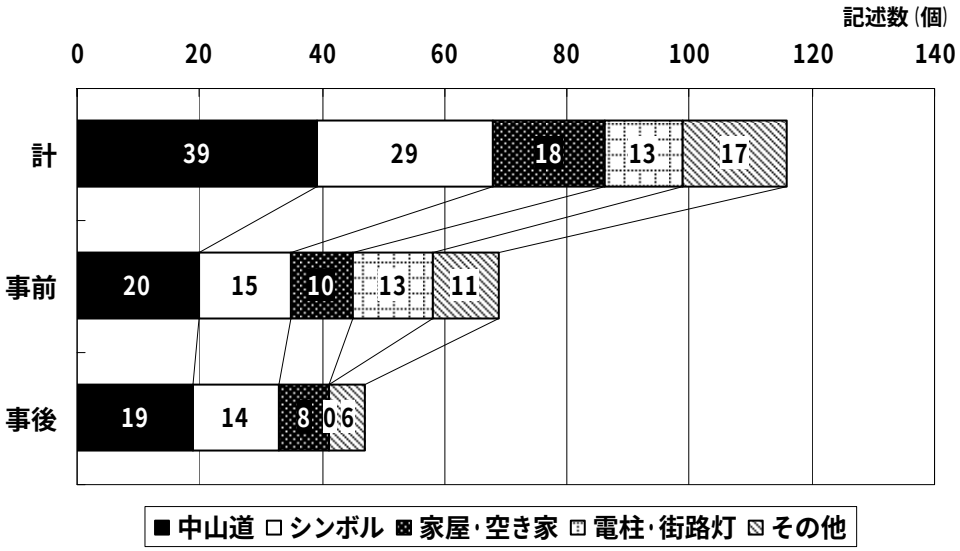


図 4-4　実験前後における街並みへの関心の傾向(全体)

4-4-1　街並みへの関心の傾向(参画者×不参画者)

参画者、不参画者毎の集計結果を図 4-5 に示す。

事前アンケート、事後アンケートともに参画者と不参画者間の回答数に差があるように見える。実験の前後ともに参画者の方が街並みの関心が高いと考えられる。参画者は対象地域内で生活を営んでいるために、日常的に対象地域の街並みを目にしている。そのため、街並みの不満点や保護したい点を多く想起しやすいためであると考えられる。

統計的にこの差を明らかにするために、有意水準 0.05 で Pearson のカイ二乗検定を行い両者の回答数の差を検定した。事前アンケートに対する検定結果を表 4-8、事後アンケートに対する検定結果を表 4-9 に示す。

事前アンケートへの検定の結果、漸近有意確率 0.382 となった。0.382>0.05 であるために、事前アンケートの回答数に統計的な有意差があるとはいえない。

事後アンケートへの検定の結果、漸近有意確率 0.077 となった。0.077>0.05 であるために、事後アンケートの回答数に統計的な有意差があるとはいえない。

以上の結果より、実験の前後ともに参画者と不参画者の街並みへの関心に統計的な有意差があるとは言えない。つまり、実験を行うことによる、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないと考えられる。

実験を行う前後の回答数の変化を見てみると、参画者、不参画者ともに、「4-4-1　サンプル全体から見た街並みへの関心の傾向」で述べた全体の回答数の変化と同様に「電柱・街路灯に関する記述」が減少していることがわかった。

表 4-8　実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定(事前アンケート)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	0.76	1	0.382

表 4-9　実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定(事後アンケート)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	3.13	1	0.077

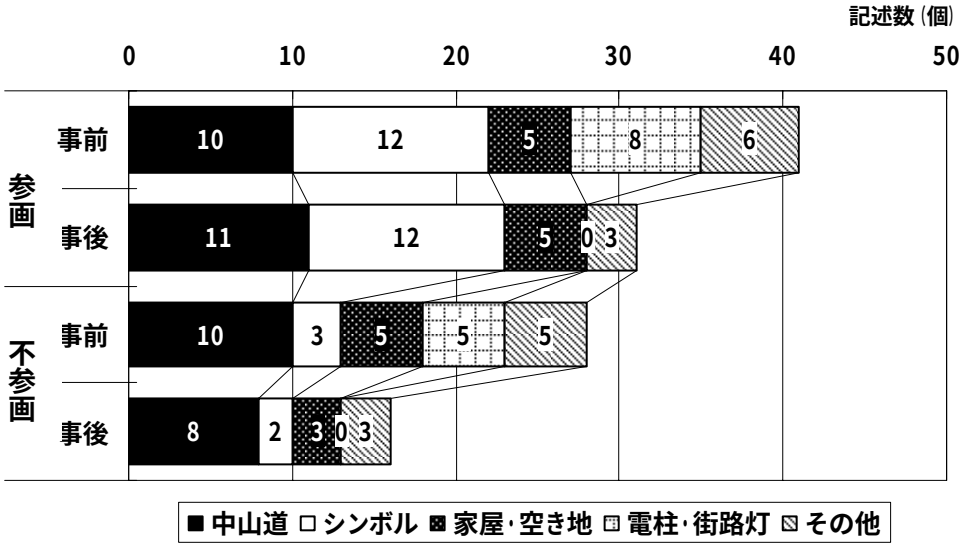


図 4-5　実験前後における街並みへの関心の傾向(参画者×不参画者)

4-4-3　街並みへの関心の想起理由

街並みをイメージする色の想起理由の傾向を明らかにするために、「4-4-1　サンプル全体から見た街並みへの関心の傾向」で集計を行った各分類項目の想起理由の分類及び単純集計を行い考察する。なお、想起理由の分類方法は「3-2-2　街並みへの関心の単純集計」で述べた分類基準を用いる。

「街並みへの関心」項目へ回答された想起理由の集計結果を表 4-10、図 4-6 に示す。

街並みへの関心全体の想起理由を見てみると、「利便性に関する理由」、「歴史に関する理由」、「景観に関する理由」の 3 つの理由によって 80%以上を占めている。

「中山道に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「利便性に関する理由」と「景観に関する理由」の二つの理由によって想起されている景観要素がほとんどであった。「利便性に関する理由」、「景観に関する理由」ともに、「中山道に関する記述」全体の 35%以上を占めている。このことより、中山道は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性や「色の調和」や「街並みの統一感」といったような景観の向上を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

「シンボルに関する記述」の項目に分類された景観要素は、「歴史に関する理由」によって想起されている記述がほとんどであった。「歴史に関する理由」は、「シンボルに関する記述」全体の 80%以上を占めている。このことより、常夜燈や無賃橋といった高宮町のシンボルは、「宿場町の面影」や「歴史的価値」といった歴史的な理由によって関心をもたれていることがわかった。

「家屋・空き地に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「景観に関する理由」によって想起されている記述が最も多かった。「景観に関する理由」は「家屋・空き地に関する記述」全体の 50%を占めている。このことより、家屋や空き地は「色の調和」や「街並みの統一感」といったような街並みの景観の向上を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

「電柱・街路灯に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「利便性に関する理由」によって想起されている景観要素がほとんどであった。「利便性に関する理由」は「電柱・街路灯に関する記述」全体の 75%以上を占めている。このことより、電柱や街路灯は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

表 4-10　街並みへの関心の想起理由の分類結果

	利便	歴史	景観	その他	無回答	計
中山道	14	6	15	3	1	39
シンボル	0	24	3	0	2	29
家屋・空き地	2	2	9	1	4	18
電柱・街路灯	10	1	2	0	0	13
その他	2	1	6	6	2	17
計	28	34	35	10	9	116

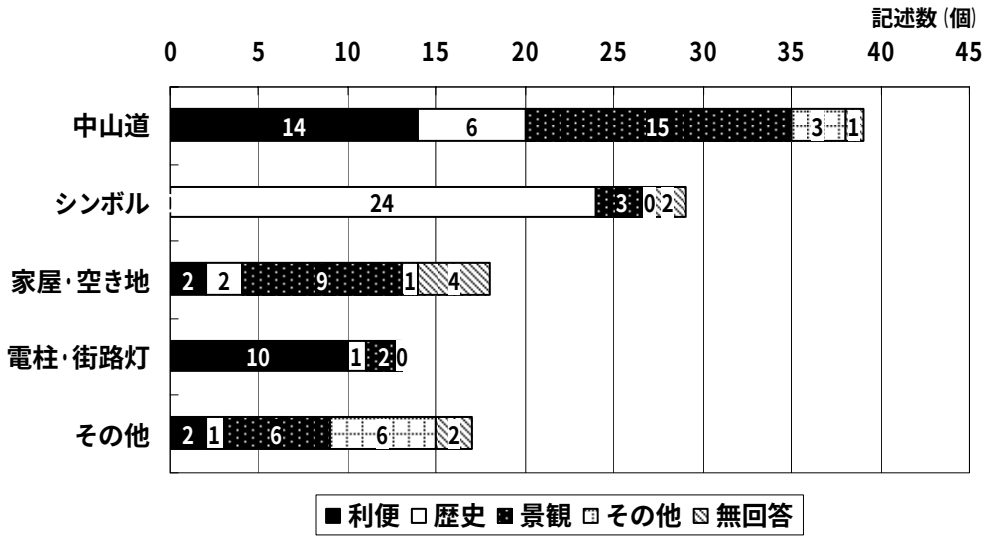


図 4-6　街並みへの関心の想起理由の傾向

4-4-4　街並みへの関心のまとめ

街並みへの関心について、以下にまとめる。

- サンプル全体では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少することがわかった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、参画者、不参画者ともに、サンプル全体と同様に「電柱・街路灯に関する記述」が減少することがわかった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外は、ほとんど変化が見られなかった。
- 実験を行うことにより、街並みの電柱や街路灯に対する不満が少なくなったと考えられる。つまり、街並みを考える上で、電柱や街路灯への関心が薄くなり、相対的に電柱や街路灯以外の構成要素への関心が強くなったと考えられる。
- Pearson のカイ二乗検定を用いて、参画者と不参画者の回答数を有意水準 0.05 で比較した結果、実験の前後ともに参画者と不参画者の街並みへの関心に差があるとは言えなかった。つまり、実験を行うことによる、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないと考えられる。

街並みへの関心の想起理由について、以下にまとめる。

- 街並みへの関心の想起理由の割合に、大きな特徴が見られた分類項目は、「シンボルに関する記述」、「電柱、街路灯に関する記述」の 2 項目であった。
- 「シンボルに関する記述」の想起理由は、「歴史に関する理由」がほとんどであった。つまり、常夜燈や無賃橋といった高宮町のシンボルは、「宿場町の面影」や「歴史的価値」といった歴史的な理由によって関心をもたれていることがわかった。
- 「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、街並みにある電柱や街路灯は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

以上の結果より、サンプルの抱く街並みへの関心の傾向を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向がわかった。「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性についての不満が減少したと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後において、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性以外の欲求は、実験によって変化しないと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後ともに、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がない。

4-5　実験への参画度に関するアンケート結果

4-5-1　飾り付けた数量の傾向

実験への参画度の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「実験への参画度」項目への回答を単純集計し、考察を行う。

「実験への参画度」項目へ回答された、街並みに飾り付けたものの数量の集計結果を表 4-11、図 4-7 に示す。

表 4-11　街並みに飾り付けた数量

数量	サンプル数
1	2
2	1
3	7
4	2
5	2
6	5
7	5
8	3
9	2
10～	3
計	32

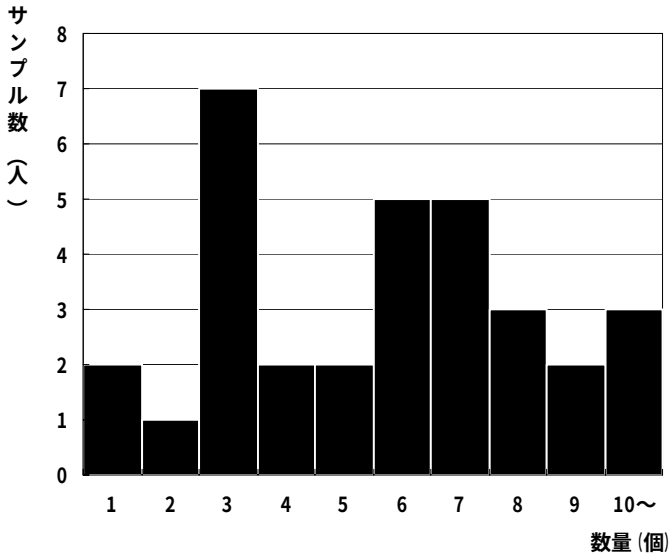


図 4-7　街並みに飾り付けた数量の傾向

図 4-8　飾りつけの様子

街並みへ飾り付けた数量を集計した結果、3 個飾り付けたサンプルが最も多いことがわかった。以下、6 個、7 個と飾り付けたサンプルが続いている。また、最も少なかったのは 2 個飾り付けたサンプルであった。

飾り付けたものが 10 個以上のサンプルも見受けられた。

4-5-2　飾り付けた種類数の傾向

実験への参画度の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「実験への参画度」項目への回答を単純集計し、考察を行う。

「実験への参画度」項目へ回答された、街並みに飾り付けたものの種類数の集計結果を表 4-12、図 4-9 に示す。

表 4-12　街並みに飾り付けた種類数

種類数	サンプル数
1	5
2	6
3	2
4	3
5	7
6	5
7	3
8	1
計	32

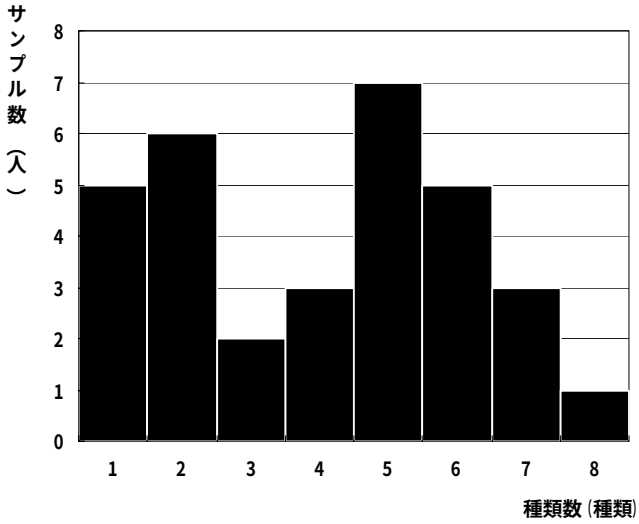


図 4-9　街並みに飾り付けた種類数の傾向

図 4-10　最も多くの種類を飾り付けた例

飾り付けた種類数が最も多かったのは 8 種類飾り付けたサンプルであった。

街並みへ飾り付けた種類数を集計した結果、最もサンプル数が多いのは 5 種類飾り付けたサンプルであった。以下、2 種類、1 種類、6 種類を飾り付けたサンプルが続いている。また、最もサンプル数が少なかったのは 8 種類飾り付けたサンプルであった。

4-6　実験への参画度によるサンプルの分類

「4-5　実験への参画度に関するアンケート結果」で得た集計結果を基に、飾り付けた数量と飾りつけた種類数によってクロス集計を行い、実験への参画度により参画者の分類を行う。

街並みに飾り付けた数量と飾り付けた種類数のクロス集計結果を表 4-13、図 4-11 に示す。

表 4-13　街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果

		飾り付けた種類数								計
		1	2	3	4	5	6	7	8	
飾り付けた数量	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	3	1	4	2	0	0	0	0	0	7
	4	0	0	0	2	0	0	0	0	2
	5	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	6	0	1	0	0	1	3	0	0	5
	7	0	0	0	0	2	1	2	0	5
	8	0	0	0	1	2	0	0	0	3
	9	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	10～	2	0	0	0	0	0	0	1	3
計		5	6	2	3	7	5	3	1	32

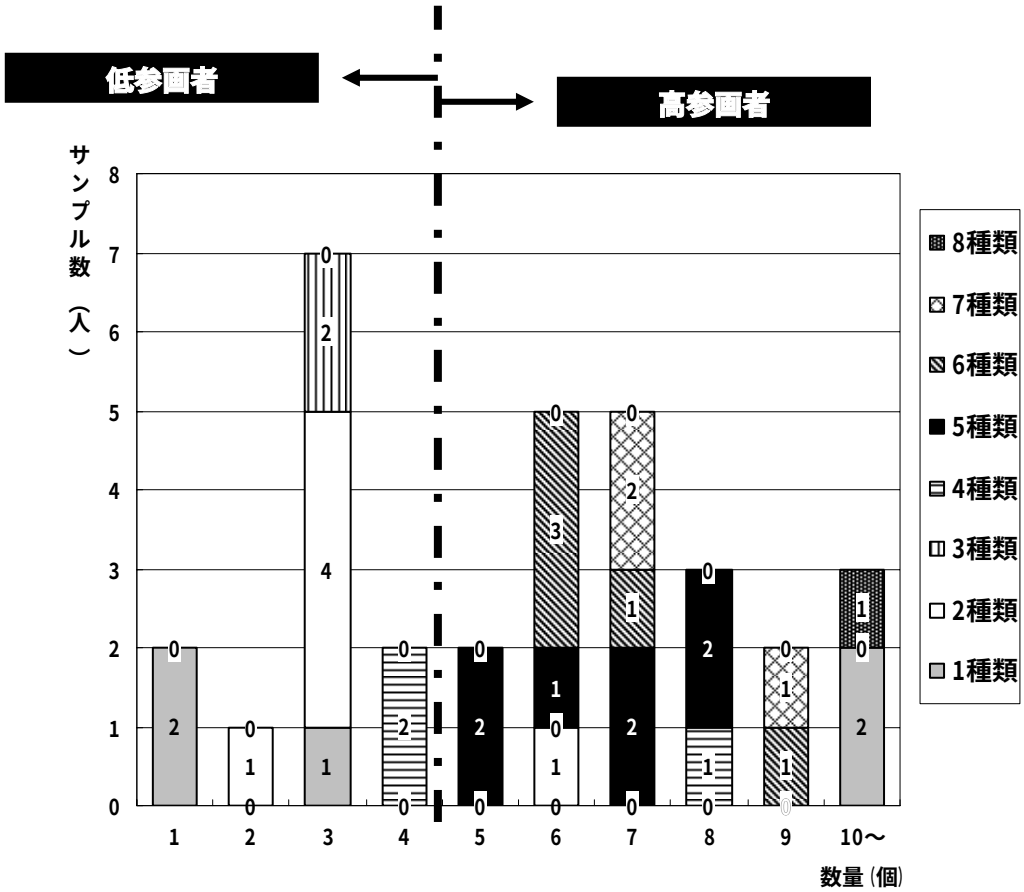


図 4-11　街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果

図 4-11 を見てみると、街並みへ飾り付けた数量が 5 個以上と 5 個未満を分類軸として、サンプルの分類を行うと、飾り付けた種類数の割合も大きく二分されることがわかった。

以上の結果より、街並みに飾り付けた数量が 5 個以上のサンプルを「高参画者」、街並みに飾り付けた数量が 5 個未満のサンプルを「低参画者」と分類した。

以上のように、実験への参画度によって参画者を 2 つの参画タイプに分類することが出来ると考えられる。

「低参画者」、「高参画者」の詳細は表 4-14 を参照。

表 4-14　飾り付けた数量によるサンプルの分類

	低参画者	高参画者	計
飾り付けた数量	5 個未満	5 個以上	
サンプル数	12	20	32

4-7　まとめ

本章では、本研究で実施した調査の結果を単純集計、クロス集計、カイ二乗検定を用いて明らかにしてきた。以下に、本章で得られた結果をまとめる。

街並みをイメージする色の集計結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を選びやすくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、サンプルは街並みに活気を感じた、もしくは活気を願うようになる傾向にあることがわかった。この傾向は、不参画者よりも参画者の方が顕著に現れている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの古さをイメージする色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、街並みの古さのイメージが薄くなる傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、対象地域との関わりの薄い色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験をおこなうことによって、実験前には意識していなかった新しいイメージを対象地域の街並みに感じるようになる傾向にあることがわかった。

街並みへの関心の集計結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向がわかった。「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性についての不満が減少する傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性以外の欲求は、実験を行っても変化しない傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後ともに、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないことがわかった。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画度によるサンプルの分類

- 街並みに飾り付けたものの数量と種類数によってクロス集計を行った結果、街並みへ飾り付けた数量が 5 個以上と 5 個未満を分類軸として、飾り付けた種類数の割合も大きく二分されることがわかった。
- 街並みに飾り付けた数量が 5 個以上のサンプルを高参画者に、街並みに飾り付けた数量が 5 個未満のサンプルを低参画者に分類することが出来た。

以下に、本章で得られた結果を基に考察を行う。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を、街並みをイメージする色として選びやすくなる傾向にあることが示された。また、街並みの古さをイメージする色や、対象地域との関わりの薄い色を選びにくくなる傾向にあることが示された。さらには、実験の感想として「静かで色味の無い町が、赤く色づけて頂いて浮きたっているよう」や「町が明るく感じました」ということが聞かれた。つまり、実験をおこなうことによって街並みの古さのイメージが薄くなり、実験前は意識していなかった街並みの活気を感じた、もしくは活気を願うようになると考えられる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向にあることが示された。「電柱・街路灯に関する記述」は「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性を理由として想起されているものがほとんどであった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外は実験の前後で大きな変化をしないことが示された。実験を行っても、歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心は変化しないと考えられる。つまり、実験は歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心へは影響しないと考えられる。また、実験を行うことによって変化するのは街並みの利便性への関心であり、街並みの利便性に対する不満が減少すると考えられる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後において、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に差が見られなかったことから、実験への参画の有無は街並みへの関心に大きな影響を与えないと考えられる。

脚注及び参考文献

[1)]巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票　設問 A-2、事後アンケート調査票　設問 A-4)

[2)]巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票　設問　A-3.4、事後アンケート調査票　設問A-2.3.5.6)

[3)]巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票　設問　A-1、事後アンケート調査票　設問 A-1)

[4)]財団法人日本色研究所編：色イメージと配色，日本規格協会，p.25，(1993)

[5)]財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.35，(1993)

[6)]財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.41，(1993)

[7)]財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.97，(1993)

[8)]財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.137，(1993)

[9)]巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票　設問　A-4，事後アンケート調査票　設問 A-6)

第五章　調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造

5-1　景観イメージに関するアンケート結果

実験対象地域の景観イメージを明らかにするために、街路景観イメージに関するアンケート項目[1)]への回答結果を単純集計する。データは「4-1-2　調査対象者のサンプリング」で説明を行った、景観イメージの分析対象としたアンケート(参画者 58 枚、不参画者 32 枚、計 90 枚)を用いた。

各形容詞対の評定平均値、標準偏差の算出を行った。評定平均値と標準偏差を表 5-1 に示す。

同時に、各形容詞対間の関係性を明らかにするために、相関係数の算出を行った。相関係数は Spearman の相関係数を計算した。形容詞対間における相関係数を表 5-2 に示す。

表 5-1　形容詞対の評定平均値と標準偏差

	参画者				不参画者				全体			
	事前		事後		事前		事後		事前		事後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
身近な―疎遠な	0.83	1.34	1.10	1.18	1.00	1.17	1.38	1.27	0.89	1.29	1.20	1.22
華やかな―質素な	-1.00	0.83	0.31	1.46	-0.50	1.27	-0.06	1.09	-0.82	1.04	0.18	1.35
新しい―古い	-1.21	0.85	-0.28	1.36	-1.50	0.79	-0.56	1.37	-1.31	0.84	-0.38	1.37
趣のある―殺風景な	-0.41	1.22	0.55	1.33	-0.31	1.04	0.69	1.16	-0.38	1.16	0.60	1.27
単調な―複雑な	0.55	1.10	-0.14	1.11	-0.13	1.11	0.25	0.66	0.31	1.15	0.00	0.99
活気のない―活気のある	1.34	1.15	-0.03	1.56	0.81	1.24	0.13	1.05	1.16	1.21	0.02	1.41
落ち着かない―落ち着く	-0.83	0.99	-0.38	1.13	-0.75	1.25	-0.94	0.97	-0.80	1.09	-0.58	1.11
地味な―派手な	1.34	0.88	0.00	1.39	1.13	1.05	0.63	1.11	1.27	0.95	0.22	1.33
連なった―バラバラな	-0.17	1.37	0.24	1.30	0.31	1.49	0.25	0.90	0.00	1.43	0.24	1.18
明るい―暗い	-0.83	1.08	0.45	1.38	-0.31	0.85	0.00	0.94	-0.64	1.04	0.29	1.26
騒がしい―静かな	-0.34	1.37	0.07	1.23	-0.88	0.70	-0.88	0.86	-0.53	1.20	-0.27	1.20
冷たい―暖かい	-0.48	0.86	-0.86	1.14	-0.94	1.14	-1.19	0.81	-0.64	0.99	-0.98	1.04
安らいだ―緊張した	0.72	1.01	0.31	1.18	1.06	1.03	0.94	1.03	0.84	1.03	0.53	1.17
開放的な―閉鎖的な	-0.86	1.20	0.24	1.48	-0.44	1.06	-0.06	1.09	-0.71	1.17	0.13	1.36
進歩的な―伝統的な	-0.86	1.04	0.03	1.25	-1.06	1.20	-1.31	0.92	-0.93	1.10	-0.44	1.31
乱雑な―整った	0.14	0.86	-0.34	0.71	0.06	0.66	0.00	0.61	0.11	0.80	-0.22	0.70
一般的な―特徴的な	0.14	1.25	-0.48	0.93	-0.31	0.77	-0.25	0.97	-0.02	1.13	-0.40	0.95
好きな―嫌いな	0.69	0.83	0.59	1.10	0.75	0.97	1.13	1.11	0.71	0.88	0.78	1.13
親しみにくい―親しみやすい	-0.59	1.10	-0.41	1.07	-0.56	1.41	-0.75	1.20	-0.58	1.22	-0.53	1.13
にぎやかな―さびしい	-0.83	0.87	0.55	1.45	-0.56	0.70	-0.38	0.78	-0.73	0.83	0.22	1.33

表 5-2　各形容詞対間における相関係数

網掛けの数値：相関係数の絶対値が 0.50 以上の数値

	身近な―疎遠な	華やかな―質素な	新しい―古い	趣のある―殺風景な	単調な―複雑な	活気のない―活気のある	落ち着かない―落ち着く	地味な―派手な	連なった―バラバラな	明るい―暗い	騒がしい―静かな	冷たい―暖かい	安らいだ―緊張した	開放的な―閉鎖的な	進歩的な―伝統的な	乱雑な―整った	一般的な―特徴的な	好きな―嫌いな	親しみにくい―親しみやすい	にぎやかな―さびしい
身近な―疎遠な	1.00																			
華やかな―質素な	0.10	1.00																		
新しい―古い	0.04	0.45	1.00																	
趣のある―殺風景な	0.23	0.44	0.45	1.00																
単調な―複雑な	0.09	-0.28	-0.20	-0.27	1.00															
活気のない―活気のある	-0.04	-0.46	-0.42	-0.52	0.33	1.00														
落ち着かない―落ち着く	-0.30	0.39	0.24	0.02	-0.20	-0.24	1.00													
地味な―派手な	0.02	-0.51	-0.49	-0.47	0.30	0.70	-0.44	1.00												
連なった―バラバラな	0.24	0.10	-0.01	0.35	-0.20	-0.22	-0.13	-0.17	1.00											
明るい―暗い	0.17	0.44	0.45	0.65	-0.28	-0.57	0.17	-0.60	0.37	1.00										
騒がしい―静かな	-0.24	0.25	0.18	0.10	-0.20	-0.18	0.35	-0.22	-0.12	0.22	1.00									
冷たい―暖かい	-0.36	-0.14	-0.21	-0.47	0.15	0.27	0.33	0.19	-0.48	-0.44	0.21	1.00								
安らいだ―緊張した	0.32	-0.33	-0.31	-0.08	0.17	0.24	-0.56	0.42	0.17	-0.18	-0.43	-0.24	1.00							
開放的な―閉鎖的な	0.17	0.47	0.44	0.58	-0.23	-0.59	0.12	-0.56	0.23	0.57	0.11	-0.36	-0.16	1.00						
進歩的な―伝統的な	-0.12	0.36	0.37	0.20	-0.23	-0.24	0.47	-0.43	-0.14	0.27	0.31	0.11	-0.52	0.32	1.00					
乱雑な―整った	-0.20	-0.21	-0.09	-0.25	0.19	0.33	0.02	0.31	-0.39	-0.28	0.09	0.26	-0.01	-0.21	-0.08	1.00				
一般的な―特徴的な	-0.13	-0.17	-0.05	-0.28	0.30	0.33	0.05	0.27	-0.42	-0.32	-0.09	0.33	0.03	-0.30	-0.01	0.33	1.00			
好きな―嫌いな	0.40	0.04	0.07	0.39	0.00	-0.21	-0.32	-0.07	0.39	0.33	-0.10	-0.52	0.25	0.29	-0.21	-0.22	-0.32	1.00		
親しみにくい―親しみやすい	-0.38	0.08	-0.01	-0.21	0.03	0.02	0.35	-0.07	-0.34	-0.21	0.19	0.45	-0.32	-0.17	0.19	0.18	0.27	-0.46	1.00	
にぎやかな―さびしい	0.05	0.48	0.36	0.42	-0.45	-0.48	0.25	-0.56	0.14	0.48	0.28	-0.24	-0.24	0.52	0.42	-0.25	-0.30	0.13	-0.03	1.00

Spearman の相関係数を算出した結果、高い相関係数(相関係数 r≧0.50)を記録した、形容詞対の組み合わせは 15 通りであった。

特に、各形容詞対との強い相関が見られた形容詞対は、「活気のない―活気のある」、「地味な―派手な」、「明るい―暗い」、「開放的な―閉鎖的な」の 4 組の形容詞対であった。「地味な―派手な」、「開放的な―閉鎖的な」の 2 組の形容詞対は、5 組の形容詞対への相関が強く、「活気のない―活気のある」、「明るい―暗い」の 2 組の形容詞対は、4 組の形容詞対への相関が強いことがわかった。

これら 4 組の形容詞対は、多くの形容詞対との関係が強いことがわかった。今後、街並みの景観イメージについての考察を行う際に、重要となる形容詞対であると考えられる。

5-2　プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析

5-2-1　実験前後のイメージプロフィールの分析(全体)

サンプル全体の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1　街路景観イメージ関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

サンプル全体の実験前後のイメージプロフィールを図 5-1 に、イメージプロフィールの変動を図 5-2 に示す。

図 5-1 を見てみると、実験を行う前後でイメージプロフィールが大きく変化していることがわかる。半数近くの形容詞対に対する評定平均値が大きく変化している。実験を行うことによって、対象地域の景観イメージが変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-2 を見てみると、対象地域の景観イメージは実験を行うことによって、「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが高くなることがわかった。実験を行うことによって、華やかさや明るさなどといった街並みの雰囲気のイメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-3 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「乱雑な-整った」、「にぎやかな-さびしい」の 9 組であった。

上記の 9 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 9 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「乱雑な-整った」、「にぎやかな-さびしい」の 9 組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

サンプル全体の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが変化することがわかった。また、イメージの変動の傾向を見てみると、実験を行うことによって街並みのイメージが華やかで、明るく、活気のあるイメージに変化することがわかった。

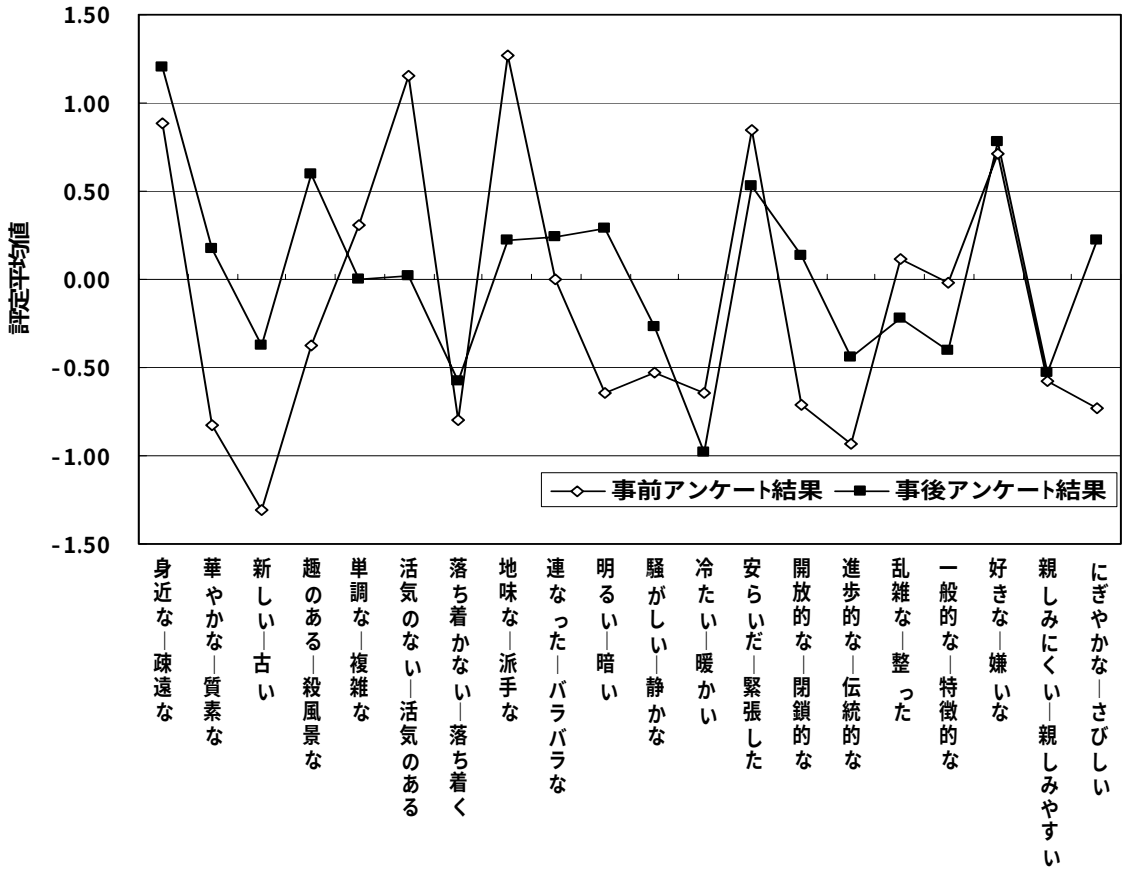


図 5-1　実験前後のイメージプロフィール(全体)

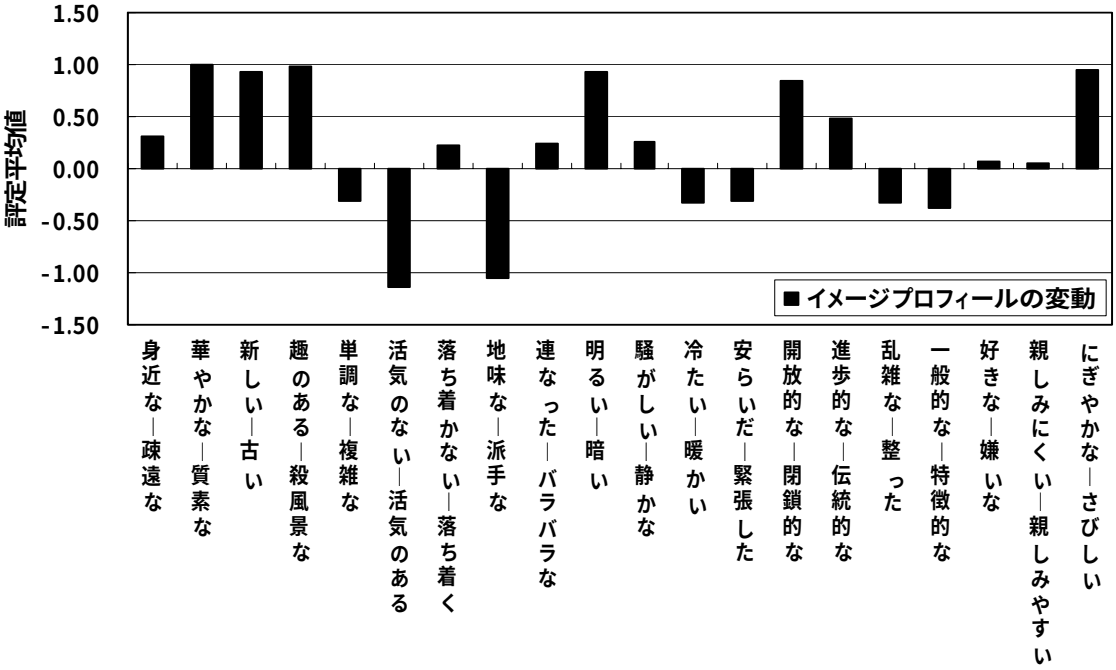


図 5-2　実験前後のイメージプロフィールの変動(全体)

表 5-3　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(全体)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-1.53209	44	0.133
華やかな-質素な	-4.16754	44	0.000
新しい-古い	-4.62023	44	0.000
趣のある-殺風景な	-4.89576	44	0.000
単調な-複雑な	1.57106	44	0.123
活気のない-活気のある	4.33712	44	0.000
落ち着かない-落ち着く	-1.18375	44	0.243
地味な-派手な	4.74552	44	0.000
連なった-バラバラな	-1.12003	44	0.269
明るい-暗い	-4.31117	44	0.000
騒がしい-静かな	-1.21870	44	0.229
冷たい-暖かい	1.88372	44	0.066
安らいだ-緊張した	1.65884	44	0.104
開放的な-閉鎖的な	-4.05396	44	0.000
進歩的な-伝統的な	-1.97566	44	0.054
乱雑な-整った	2.47207	44	0.017
一般的な-特徴的な	1.84985	44	0.071
好きな-嫌いな	-0.50287	44	0.618
親しみにくい-親しみやすい	-0.26448	44	0.793
にぎやかな-さびしい	-4.81714	44	0.000

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-2　実験前後のイメージプロフィールの分析(参画者)

参画者 29 人の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1　街路景観イメージ関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

参画者の実験前後のイメージプロフィールを図 5-3 に、イメージプロフィールの変動を図 5-4 に示す。

図 5-3 を見てみると、実験を行う前後でイメージプロフィールの波形が大きく変化していることがわかる。ほぼ全ての形容詞対に対する評定平均値が大きく変化している。実験を行うことによって、参画者の抱く景観イメージが大きく変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-4 を見てみると、対象地域の景観イメージは、「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「複雑な」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「進歩的な」、「整った」、「特徴的な」、「にぎやかな」のイメージが高くなることがわかった。実験を行うことによって、華やかさや明るさなどといった雰囲気のイメージと開放感や整いといった空間構成のイメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-4 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「5-2-1　実験前後のイメージプロフィールの分析(全体)」で実験前後の評定平均の差が確認された、9 組の形容詞対に「単調な-複雑な」、「進歩的な-伝統的な」、「一般的な-特徴的な」の 3 組を加えた計 12 組であった。

参画グループの実験前後のアンケート結果において、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「単調な-複雑な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「進歩的な-伝統的な」、「乱雑な-整った」、「一般的な-特徴的な」、「にぎやかな-さびしい」の 12 組である。

上記の 12 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 12 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「単調な-複雑な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「進歩的な-伝統的な」、「乱雑な-整った」、「一般的な-特徴的な」、「にぎやかな-さびしい」の 12 組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

参画者の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、参画者は実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが大きく変化することがわかった。景観イメージの変化は、サンプル全体の変化よりも大きい。

実験前後のイメージの変動の傾向を見てみると、サンプル全体と同様に街並みのイメージが華やかで、明るく、活気のあるイメージに変化することがわかった。また、参画者の特徴としては、サンプル全体に比べて、特徴的で、進歩的なイメージを街並みに感じる傾向にあることがわかった。

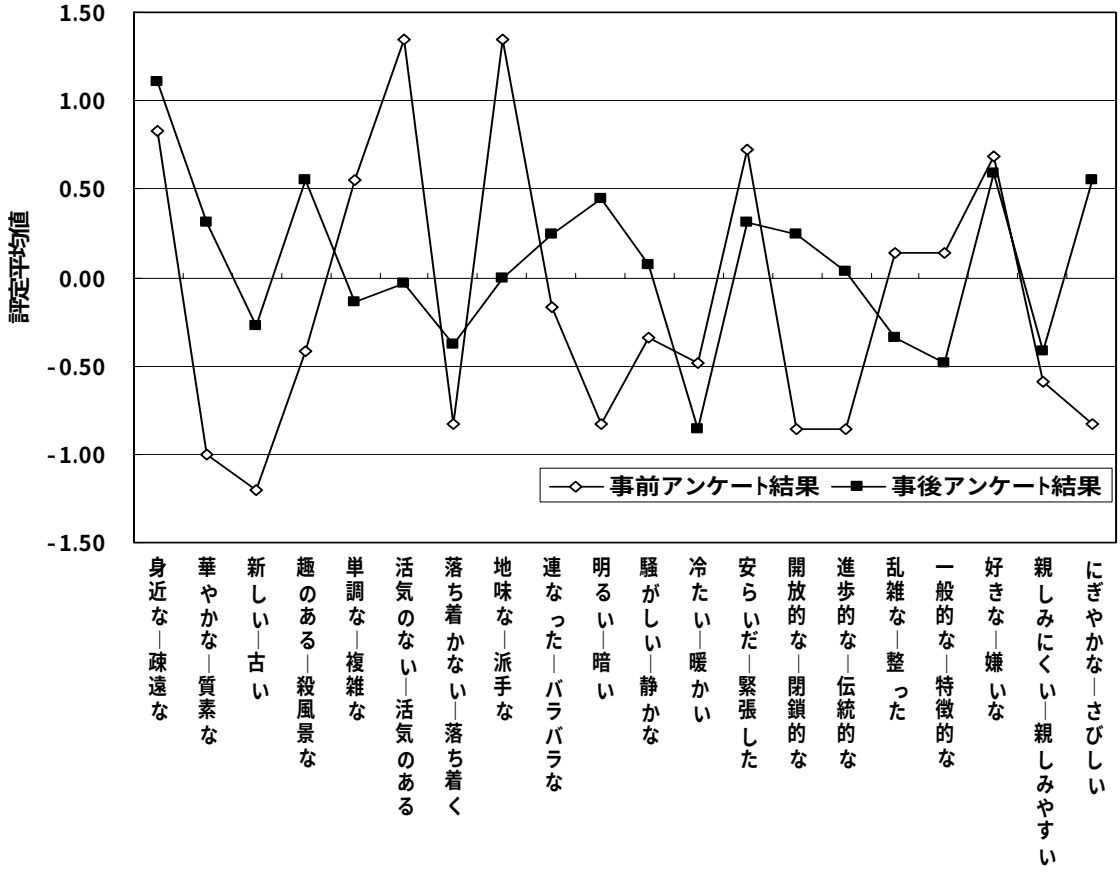


図 5-3　実験前後のイメージプロフィール(参画者)

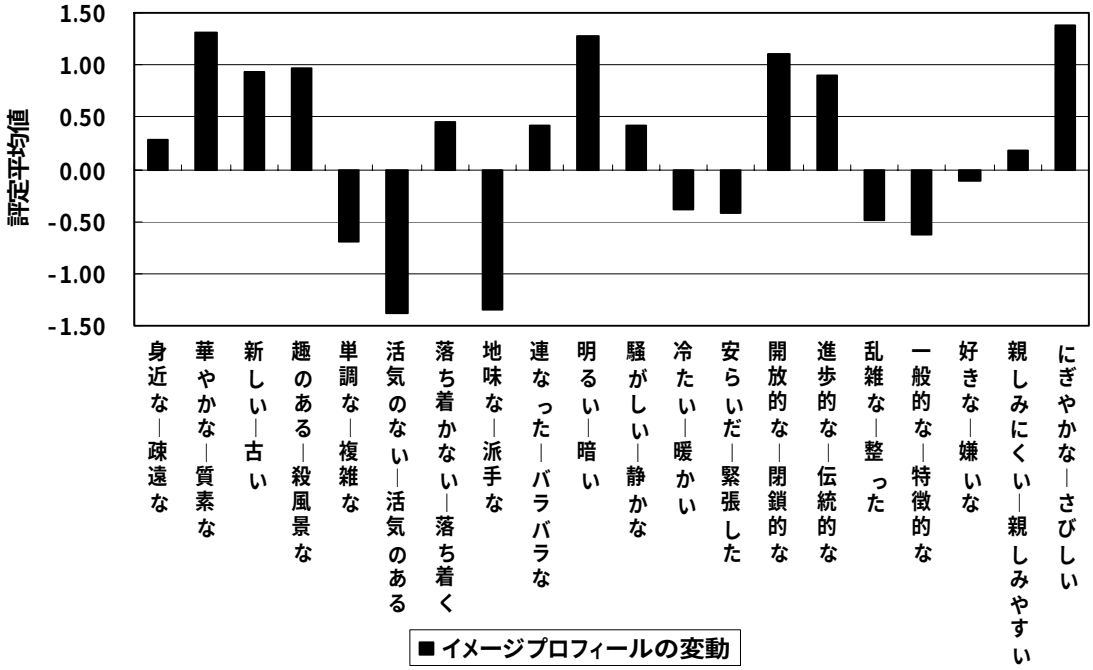


図 5-4　実験前後のイメージプロフィールの変動(参画者)

表 5-4　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(参画者)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-0.96913	28	0.341
華やかな-質素な	-4.11822	28	0.000
新しい-古い	-3.22055	28	0.003
趣のある-殺風景な	-3.78043	28	0.001
単調な-複雑な	2.62129	28	0.014
活気のない-活気のある	3.91427	28	0.001
落ち着かない-落ち着く	-1.68939	28	0.102
地味な-派手な	4.37993	28	0.000
連なった-バラバラな	-1.46214	28	0.155
明るい-暗い	-4.29082	28	0.000
騒がしい-静かな	-1.30986	28	0.201
冷たい-暖かい	1.57951	28	0.125
安らいだ-緊張した	1.65055	28	0.110
開放的な-閉鎖的な	-3.79389	28	0.001
進歩的な-伝統的な	-2.68271	28	0.012
乱雑な-整った	2.73811	28	0.011
一般的な-特徴的な	2.26779	28	0.031
好きな-嫌いな	0.61885	28	0.541
親しみにくい-親しみやすい	-0.81728	28	0.421
にぎやかな-さびしい	-5.30812	28	0.000

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-3　実験前後のイメージプロフィールの分析(不参画者)

不参画者 16 人の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1　街路景観イメージ関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

不参画者の実験前後のイメージプロフィールを図 5-5 に、イメージプロフィールの変動を図 5-6 に示す。

図 5-5 を見てみると、実験を行う前後で一部の形容詞対については、評定平均値に違いが見られるものの、全体的なイメージプロフィールの波形はほぼ同一である。評定平均値に変化が見られた形容詞対は「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」の 3 組の形容詞対のみである。上記 3 つの形容詞対は、実験を行うことによって、評定平均が変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-6 を見てみると、対象地域の景観イメージは、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」のイメージが強くなることがわかった。実験を行うことによって、趣や活気などといった街並みのイメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-5 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「地味な-派手な」の 3 組の形容詞対であった。

上記の 3 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 3 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「派手な-地味な」の 3 組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

参画者の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、不参画者は実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが変化するもの。しかし、サンプル全体と比べると、景観イメージの変化は小さいことがわかった。

実験前後のイメージの変動の傾向を見てみると、街並みのイメージが新しく、趣のある、派手なイメージに変化することがわかった。不参画者の特徴は、サンプル全体や参画者が感じたような街並みの明るさや華やかさ、にぎやかさを感じない傾向にあることがわかった。

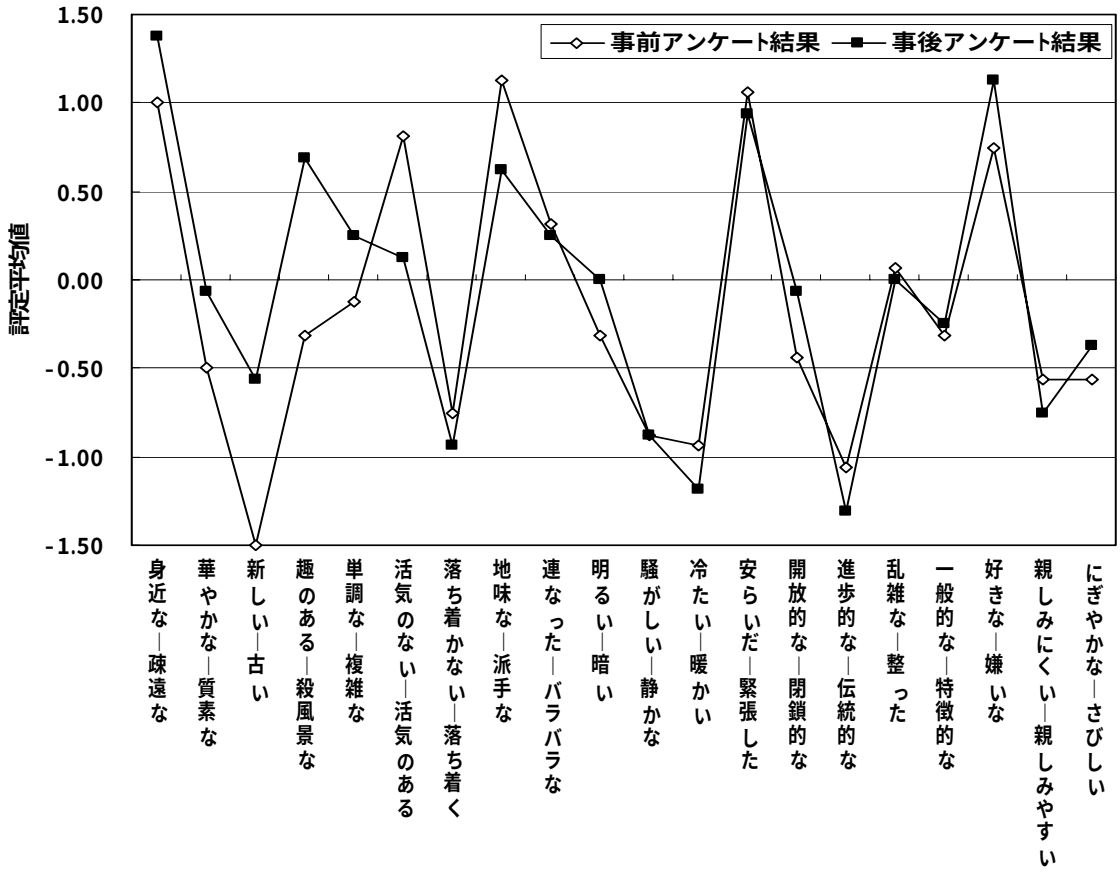


図 5-5　実験前後のイメージプロフィール(不参画者)

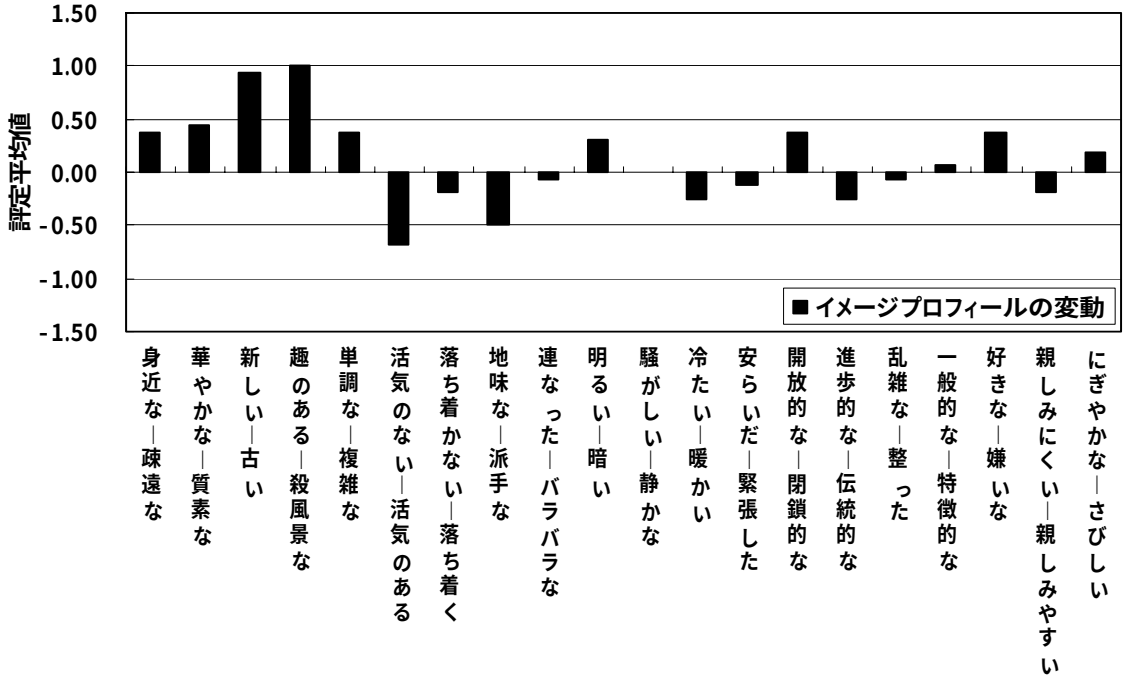


図 5-6　実験前後のイメージプロフィールの変動(不参画者)

表 5-5　実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(不参画者)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-1.46385	15	0.164
華やかな-質素な	-1.38530	15	0.186
新しい-古い	-4.03786	15	0.001
趣のある-殺風景な	-3.03822	15	0.008
単調な-複雑な	-1.86052	15	0.083
活気のない-活気のある	1.96303	15	0.068
落ち着かない-落ち着く	1.00000	15	0.333
地味な-派手な	2.23607	15	0.041
連なった-バラバラな	0.18656	15	0.855
明るい-暗い	-1.43150	15	0.173
騒がしい-静かな	0.00000	15	1.000
冷たい-暖かい	1.00000	15	0.333
安らいだ-緊張した	0.45964	15	0.652
開放的な-閉鎖的な	-1.69480	15	0.111
進歩的な-伝統的な	0.93934	15	0.362
乱雑な-整った	0.32388	15	0.751
一般的な-特徴的な	-0.23527	15	0.817
好きな-嫌いな	-1.86052	15	0.083
親しみにくい-親しみやすい	0.67648	15	0.509
にぎやかな-さびしい	-1.00000	15	0.333

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-4　実験前後のイメージプロフィールの変動の比較(参画者×不参画者)

参画者と不参画者の実験前後における景観イメージの変動の差を明らかにするために、参画者と不参画者のイメージプロフィールの変動を作成した。

参画者と不参画者のイメージプロフィールの変動を図 5-7 に示す。

図 5-7 を見てみると、全体的に参画者の方がイメージプロフィールの変動が大きいことがわかる。特に「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「にぎやかな-さびしい」の 7 組の形容詞対では、イメージプロフィールの変動に大きな差がある。また、参画者と不参画者でイメージプロフィールの変動にほとんど差が見られなかった形容詞対は、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の 2 組である。

以上の結果より、全体的に見ると実験に参画した場合の方が、参画しなかった場合よりも景観イメージが大きく変動することがわかった。特に変動の差が顕著に現れた形容詞対は、「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「にぎやかな-さびしい」の 7 組であった。また、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の 2 組の形容詞対では、参画した場合と参画しなかった場合の景観イメージの変動にほとんど差が無いことがわかった。

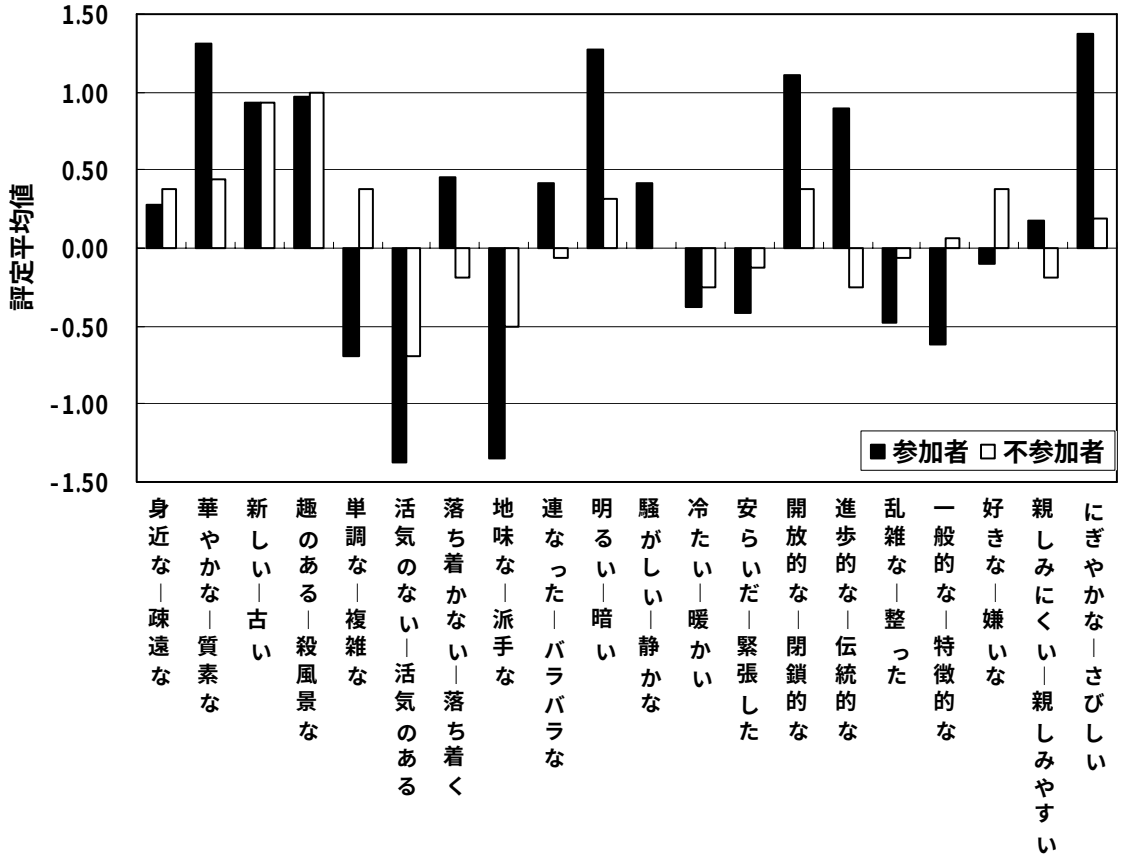


図 5-7　実験前後のイメージプロフィールの変動(参画者×不参画者)

5-2-5　実験への参画タイプごとの実験前後のイメージプロフィールの分析

実験への参画タイプごとの実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、「5-1　景観イメージに関するアンケート結果」で行った単純集計と同様に集計を行い、参画タイプごとの各形容詞対の評定平均値、標準偏差の算出を行った。

評定平均値と標準偏差を表5-6に示す。

評定平均値、標準偏差の算出を行った後、参画タイプごとのイメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは表5-6で求めた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

参画タイプとは、実験への参画度によって参画者を高参画者(20人)と低参画者(12人)の2つの参画タイプに分類したものである。詳細は「4-6　実験への参画度によるサンプルの分類」を参照。

参画タイプごとのイメージプロフィールを図 5-8 に、イメージプロフィールの変動を図5-9に示す。

図5-8を見てみると、高参画者と低参画者では、実験前のイメージプロフィール、実験後のイメージプロフィールのどちらの波形もほぼ同一である。全体的な波形に大きな違いは見られない。実験への参画度は対象地域の景観イメージに大きな影響を与えないと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図5-9を見てみると、一部の形容詞対の変動には差が見られるものの、全体的なイメージプロフィールの変動に大きな差は見られない。高参画者と低参画者で実験前後の変動に差が見られた形容詞対は、「にぎやかな-さびしい」であった。「にぎやかな-さびしい」の形容詞対では、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっている。ここで、図5-8を見てみると、実験後のにぎやかな-さびしい」の形容詞対への回答には大きな差が無い。つまり、「にぎやかな-さびしい」の形容詞対は、実験前のイメージの差によって変動に差が出ていることがわかる。

以上の結果より、高参画者と低参画者のイメージプロフィールに大きな差が無いことがわかった。また、実験前後のイメージプロフィールの変動においても、一部の形容詞対を除き、変動に大きな差は見られなかった。

イメージプロフィールの変動に差が見られた形容詞対は「にぎやかな-さびしい」であった。「にぎやかな-さびしい」の形容詞対では、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっていることがわかった。これは、実験前のイメージの差が原因であると考えられる。

表 5-6　形容詞対の評定平均値と標準偏差(高参画者×低参画者)

	高参画者				低参画者			
	事前		事後		事前		事後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
身近な―疎遠な	1.00	1.25	1.17	1.12	0.55	1.44	1.00	1.28
華やかな―質素な	-1.06	0.91	0.22	1.51	-0.91	0.67	0.45	1.37
新しい―古い	-1.22	0.92	-0.22	1.36	-1.18	0.72	-0.36	1.37
趣のある―殺風景な	-0.44	1.30	0.50	1.38	-0.36	1.07	0.64	1.23
単調な―複雑な	0.67	1.29	-0.06	1.13	0.36	0.64	-0.27	1.05
活気のない―活気のある	1.28	1.19	0.00	1.60	1.45	1.08	-0.09	1.50
落ち着かない―落ち着く	-0.94	0.91	-0.44	1.21	-0.64	1.07	-0.27	0.96
地味な―派手な	1.17	0.90	0.11	1.41	1.64	0.77	-0.18	1.34
連なった―バラバラな	-0.17	1.26	-0.06	1.31	-0.18	1.53	0.73	1.14
明るい―暗い	-0.83	1.07	0.33	1.45	-0.82	1.11	0.64	1.23
騒がしい―静かな	-0.78	1.18	-0.22	1.31	0.36	1.37	0.55	0.89
冷たい―暖かい	-0.67	0.75	-0.94	1.18	-0.18	0.94	-0.73	1.05
安らいだ―緊張した	0.89	0.99	0.44	1.21	0.45	0.99	0.09	1.08
開放的な―閉鎖的な	-0.61	1.30	0.33	1.45	-1.27	0.86	0.09	1.50
進歩的な―伝統的な	-0.83	1.12	0.11	1.29	-0.91	0.90	-0.09	1.16
乱雑な―整った	0.06	0.91	-0.39	0.59	0.27	0.75	-0.27	0.86
一般的な―特徴的な	0.28	1.19	-0.44	0.83	-0.09	1.31	-0.55	1.08
好きな―嫌いな	0.72	0.73	0.56	0.96	0.64	0.98	0.64	1.30
親しみにくい―親しみやすい	-0.67	1.00	-0.44	0.96	-0.45	1.23	-0.36	1.23
にぎやかな―さびしい	-0.61	0.95	0.39	1.57	-1.18	0.57	0.82	1.19

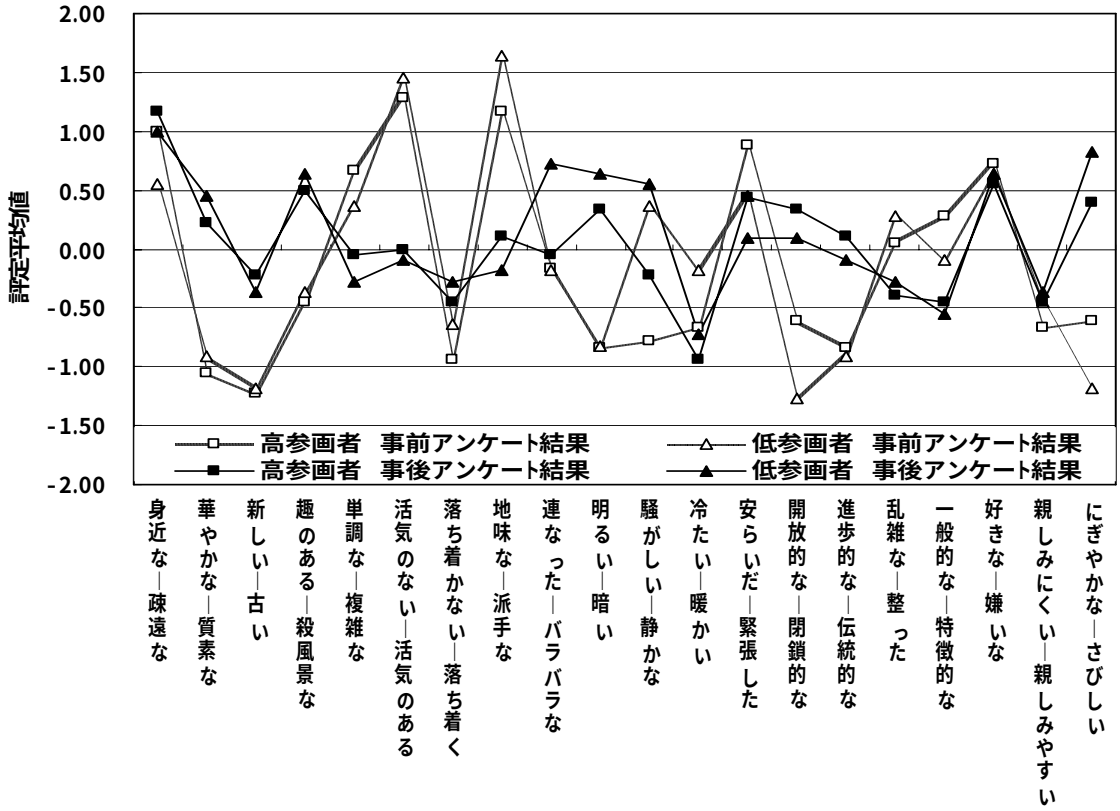


図 5-8　実験前後のイメージプロフィール(高参画者×低参画者)

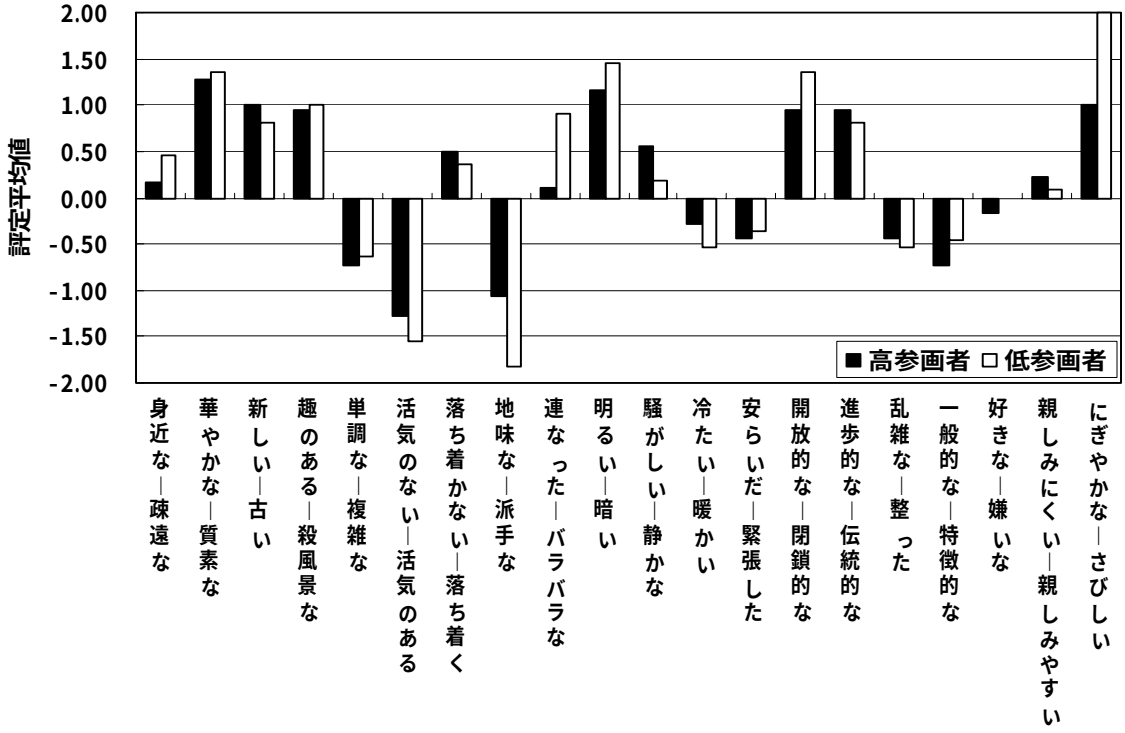


図 5-9　実験前後のイメージプロフィールの変動(高参画者×低参画者)

5-2-6　プロフィール分析から見た街並みの景観イメージのまとめ

プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析から街並みに対する景観イメージの傾向を読み取った。サンプル全体と各サンプルグループの街並みに対する景観イメージの傾向を以下に述べる。

- サンプル全体の景観イメージの傾向を見てみると、実験を行うことによって対象地域に対する景観イメージが変化している。
- サンプル全体では、実験を行うことによって「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが強くなる。
- 参画者の方が不参画者よりも、全体的に事件前後のイメージの変動が大きい。
- 不参画者と比べて、実験を行うことによって「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが強くなる。
- 「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の 2 組の形容詞対は、実験前後で大きく変動した形容詞対である。これらの形容詞対の変動の大きさは、参画者と不参画者でほとんど差が無い。
- 高参画者と低参画者では、実験前のイメージプロフィール、実験後のイメージプロフィールのどちらの波形もほぼ同一であり、全体的な波形に大きな違いは見られない。
- 高参画者と低参画者で、イメージプロフィールの変動に差が見られた形容詞対は「にぎやかな-さびしい」であり、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっている。

以上の結果より、考察を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなったと言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画した場合の方が、参画しなかった場合に比べ、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなると言える。
- 街並みの新しさ、趣のイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とは関係なく、強くなると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、景観イメージの変化に大きな影響を与えないと言える。
- にぎやかな街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが低い方が大きく変動する。これは、参画の度合いが低いサンプルが、様々なものを飾り付けて積極的に「色彩参画」を行っているサンプルを見ることによって、街並みの賑わいを感じたためであると考えられる。

5-3　因子分析による街並みの景観イメージの分析

5-3-1　因子の抽出

実験対象地域の景観イメージを明らかにするために、KMO 及び Bartlett の球面性検定を行った後、因子分析を行った。KMO 及び Bartlett の球面性検定は有意水準 0.05 でおこなった。因子分析は因子抽出法として主因子法、回転はバリマックス回転を採用した。

データは「5-1　景観イメージに関するアンケート結果」と同様に、景観イメージの分析対象としたアンケート(参画者 58 枚、不参画者 32 枚、計 90 枚)による、街路景観イメージに関するアンケート項目への回答結果を用いた。

KMO 及び Bartlett の球面性検定結果を表 5-7 に示す。

KMO を行った結果、KMO＝0.875 であった。KMO＝0.875＞0.5 となり、本研究で用いた 20 組の形容詞対への回答結果を用いて因子分析を行うことに意味があることが明らかとなった。

Bartlett の球面性検定を行った結果、有意確率 0.000 であった。有意確率 0.000＜0.05 となり、本研究で用いた 20 組の形容詞対に関連があることがわかった。

因子分析の結果、得られた各形容詞対の共通性を表 5-7 に示す。

表 5-8 を見てみると、全ての形容詞対で、共通性の値が 0.4 以上である。そのため、全ての形容詞対が因子分析に貢献していることがわかった。よって、本研究で用いた 20 組の形容詞対の全てを用いて因子分析を行うことは妥当であると考えた。

因子分析の結果、得られた因子の固有値、累積寄与率を表 5-8 に示す。

表 5-8 を見てみると、固有値が 1.0 を超えている因子は第 4 因子までである。そのため、第 4 因子までを採用する。また、累積寄与率は第 4 因子までで 65%を超えている。

表 5-7　KMO 及び Bartlett の検定結果

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		0.875
Bartlett の球面性検定	近似ｶｲ 2 乗	1107.618
	自由度	190
	有意確率	0.000

表 5-8　各形容詞対の共通性

	共通性
身近な-疎遠な	0.409024
華やかな-質素な	0.628872
新しい-古い	0.581612
趣のある-殺風景な	0.713272
単調な-複雑な	0.460825
活気のない-活気のある	0.704818
落ち着かない-落ち着く	0.702792
地味な-派手な	0.810566
連なった-バラバラな	0.603545
明るい-暗い	0.784068
騒がしい-静かな	0.498045
冷たい-暖かい	0.693821
安らいだ-緊張した	0.610334
開放的な-閉鎖的な	0.706796
進歩的な-伝統的な	0.622947
乱雑な-整った	0.437681
一般的な-特徴的な	0.493668
好きな-嫌いな	0.593523
親しみにくい-親しみやすい	0.543087
にぎやかな-さびしい	0.699992

表 5-9　因子分析による固有値と累積寄与率

	固有値	寄与率	累積寄与率
因子 No.1	7.2304	36.15%	36.15%
因子 No.2	4.2394	21.20%	57.35%
因子 No.3	1.2209	6.10%	63.45%
因子 No.4	1.0226	5.11%	68.57%
因子 No.5	0.8232	4.12%	72.68%
因子 No.6	0.7249	3.62%	76.31%
因子 No.7	0.6253	3.13%	79.43%
因子 No.8	0.5722	2.86%	82.29%
因子 No.9	0.5273	2.64%	84.93%
因子 No.10	0.4284	2.14%	87.07%
因子 No.11	0.4043	2.02%	89.09%
因子 No.12	0.3552	1.78%	90.87%
因子 No.13	0.3246	1.62%	92.49%
因子 No.14	0.3119	1.56%	94.05%
因子 No.15	0.2989	1.49%	95.55%
因子 No.16	0.2353	1.18%	96.72%
因子 No.17	0.2128	1.06%	97.79%
因子 No.18	0.1765	0.88%	98.67%
因子 No.19	0.1336	0.67%	99.34%
因子 No.20	0.1323	0.66%	100.00%

網掛けの因子：固有値 1.0 以上の因子

5-3-2　因子の解釈

バリマックス回転後の第 1 因子から第 4 因子までの因子負荷量を表 5-10 に示し、第 1 因子と第 2 因子の因子負荷両を表 5-11 に、第 3 因子と第 4 因子の因子負荷両を表 5-12 に示す。

因子の解釈には、バリマックス回転後の因子負荷量を用いて考察を行った。考察は因子負荷量の大きさを絶対値で判断し、マイナスの数値は形容詞対を逆の意味に解釈して行った。

以下に述べる因子の解釈や考察をわかりやすくするために、先に解釈結果を示す。第 1 因子は街並みの「活気度」軸、第 2 因子は街並みの「親接度」軸、第 3 因子は街並みの「整然度」軸、第 4 因子は街並みの「静寂度」軸と解釈を行った。

第 1 因子は、「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「明るい-暗い」、「にぎやかな-さびしい」といった、街並みの雰囲気、明るさに関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「活気度」を表している因子であると解釈した。

第 2 因子は、「好きな-嫌いな」、「冷たい-暖かい」、「親しみにくい-親しみやすい」、「身近な-疎遠な」といった、街並みの印象、精神的な距離感に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「親接度」を表している因子であると解釈した。

第 3 因子は、「乱雑な-整った」、「連なった-バラバラな」、「一般的な-特徴的な」といった、街並みの空間構造、統一感に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「整然度」を表している因子であると解釈した。

第 4 因子は、「騒がしい-静かな」、「単調な-複雑な」といった、街並みの喧騒に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「静寂度」を表している因子であると解釈した。

表 5-10　各因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
地味な-派手な	-0.847	0.068	0.334	-0.011
新しい-古い	0.764	0.100	0.069	0.052
華やかな-質素な	0.743	-0.020	-0.169	0.090
開放的な-閉鎖的な	0.735	0.322	-0.169	0.038
明るい-暗い	0.732	0.380	-0.226	0.220
活気のない-活気のある	-0.711	-0.136	0.319	-0.066
趣のある-殺風景な	0.678	0.461	-0.145	0.135
にぎやかな-さびしい	0.673	0.025	-0.334	0.282
進歩的な-伝統的な	0.672	-0.321	-0.058	0.146
安らいだ-緊張した	-0.535	0.464	-0.031	-0.276
好きな-嫌いな	0.124	0.763	-0.155	-0.027
冷たい-暖かい	-0.236	-0.759	0.213	0.073
親しみにくい-親しみやすい	0.034	-0.703	0.144	0.012
落ち着かない-落ち着く	0.523	-0.568	-0.065	0.199
身近な-疎遠な	0.074	0.489	-0.106	-0.306
乱雑な-整った	-0.255	-0.160	0.593	0.189
連なった-バラバラな	0.072	0.515	-0.583	0.023
一般的な-特徴的な	-0.233	-0.327	0.563	-0.192
騒がしい-静かな	0.294	-0.307	0.113	0.590
単調な-複雑な	-0.317	0.001	0.374	-0.455

表 5-11　第 1 因子、第 2 因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 1 因子			第 2 因子	
新しい-古い	0.764	活気あり	好きな-嫌いな	0.763	身近
華やかな-質素な	0.743	↑	連なった-バラバラな	0.515	↑
開放的な-閉鎖的な	0.735		安らいだ-緊張した	0.464	
明るい-暗い	0.732		趣のある-殺風景な	0.461	
趣のある-殺風景な	0.678		身近な-疎遠な	0.489	
にぎやかな-さびしい	0.673		明るい-暗い	0.380	
進歩的な-伝統的な	0.672		開放的な-閉鎖的な	0.322	
落ち着かない-落ち着く	0.523		にぎやかな-さびしい	0.025	
騒がしい-静かな	0.294		新しい-古い	0.100	
好きな-嫌いな	0.124		地味な-派手な	0.068	
身近な-疎遠な	0.074		単調な-複雑な	0.001	
連なった-バラバラな	0.072		華やかな-質素な	-0.020	
親しみにくい-親しみやすい	0.034		活気のない-活気のある	-0.136	
一般的な-特徴的な	-0.233		乱雑な-整った	-0.160	
冷たい-暖かい	-0.236		騒がしい-静かな	-0.307	
乱雑な-整った	-0.255		進歩的な-伝統的な	-0.321	
単調な-複雑な	-0.317		一般的な-特徴的な	-0.327	
安らいだ-緊張した	-0.535		落ち着かない-落ち着く	-0.568	
活気のない-活気のある	-0.711	↓	親しみにくい-親しみやすい	-0.703	↓
地味な-派手な	-0.847	活気なし	冷たい-暖かい	-0.759	疎遠

表 5-12　第 3 因子、第 4 因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 3 因子	
乱雑な-整った	0.593	乱雑
一般的な-特徴的な	0.563	↑
単調な-複雑な	0.374	
地味な-派手な	0.334	
活気のない-活気のある	0.319	
冷たい-暖かい	0.213	
親しみにくい-親しみやすい	0.144	
騒がしい-静かな	0.113	
新しい-古い	0.069	
安らいだ-緊張した	-0.031	
進歩的な-伝統的な	-0.058	
落ち着かない-落ち着く	-0.065	
身近な-疎遠な	-0.106	
趣のある-殺風景な	-0.145	
好きな-嫌いな	-0.155	
華やかな-質素な	-0.169	
開放的な-閉鎖的な	-0.169	
明るい-暗い	-0.226	
にぎやかな-さびしい	-0.334	↓
連なった-バラバラな	-0.583	整然

	第 4 因子	
騒がしい-静かな	0.590	喧噪
にぎやかな-さびしい	0.282	↑
明るい-暗い	0.220	
落ち着かない-落ち着く	0.199	
乱雑な-整った	0.189	
進歩的な-伝統的な	0.146	
趣のある-殺風景な	0.135	
華やかな-質素な	0.090	
冷たい-暖かい	0.073	
新しい-古い	0.052	
開放的な-閉鎖的な	0.038	
連なった-バラバラな	0.023	
親しみにくい-親しみやすい	0.012	
地味な-派手な	-0.011	
好きな-嫌いな	-0.027	
活気のない-活気のある	-0.066	
一般的な-特徴的な	-0.192	
安らいだ-緊張した	-0.276	
身近な-疎遠な	-0.306	↓
単調な-複雑な	-0.455	静寂

次に、各因子の因子得点の扱いについて、各形容詞対の因子負荷量を基に考察を行う。マイナスの因子負荷量は形容詞対を逆の意味に解釈して考察を行う。

各因子軸の解釈を表 5-13 に示す。

第 1 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「華やかな-質素な」、「明るい-暗い」、「にぎやかな-さびしい」などである。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「地味な-派手な」、「活気のない-活気のある」などである。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 1 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「華やかな」、「明るい」、「にぎやかな」、「派手な」、「活気のある」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 1 因子の因子得点がプラスである場合を「活気あり」、マイナスである場合を「活気なし」と解釈した。

第 2 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「好きな-嫌いな」、「身近な-疎遠な」の 2 組である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「冷たい-暖かい」、「親しみにくい-親しみやすい」、「落ち着かない-落ち着く」の 3 組である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 2 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「好きな」、「身近な」、「暖かい」、「親しみやすい」、「落ち着く」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 2 因子の因子得点がプラスである場合を「身近」、マイナスである場合を「疎遠」と解釈した。

第 3 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「乱雑-整った」、「一般的-特徴的」の 2 組である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「連なった-バラバラな」である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 3 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「乱雑な」、「一般的な」、「バラバラな」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 3 因子の因子得点がプラスである場合を「乱雑」、マイナスである場合を「整然」と解釈した。

第 4 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「騒がしい-静かな」である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「単調な-複雑な」である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 4 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「騒がしい」、「複雑な」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 4 因子の因子得点がプラスである場合を「喧噪」、マイナスである場合を「静寂」と解釈した。

表 5-13　各因子の解釈

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
プラス	活気あり	身近	乱雑	喧噪
マイナス	活気なし	疎遠	整然	静寂
名称	［活気度」軸	「親接度」軸	「整然度」軸	「静寂度」軸

5-3-3　実験前後の因子得点分布図の分析(参画者×不参画者)

サンプル全体の実験前後における景観イメージを明らかにするために、「5-3-1　因子軸の抽出」で解釈を行った、第 1 因子から第 4 因子までを x 軸、y 軸に用いて、サンプル全体の実験前後の因子得点分布図を作成した。

実験前後の因子得点分布図を図 5-10 に示す。

図 5-10 から、実験前後の「活気度」、「親接度」の傾向を読み取った。

参画者、不参画者の事前アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「活気度軸」(x 軸)において「活気なし」側への偏りが見られる。実験前の「活気なし」側への偏りは、参画者と不参画者の間で大きな差は見られない。「親接度軸」(ｙ軸)においては、参画者、不参画者ともに「疎遠」、「身近」のどちらにも偏ることなく、分散していることがわかる。

参画者、不参画者の事後アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「活気度軸」(x 軸)において「活気あり」側への偏りが見られる。実験後の「活気あり」側への偏りは、参画者の方が不参画者に比べて強くなっている。「親接度軸」(ｙ軸)においては、実験前と同様に参画者、不参画者ともに偏りが見られない。

図 5-10 から、実験前後の「整然度」、「静寂度」の傾向を読み取った。

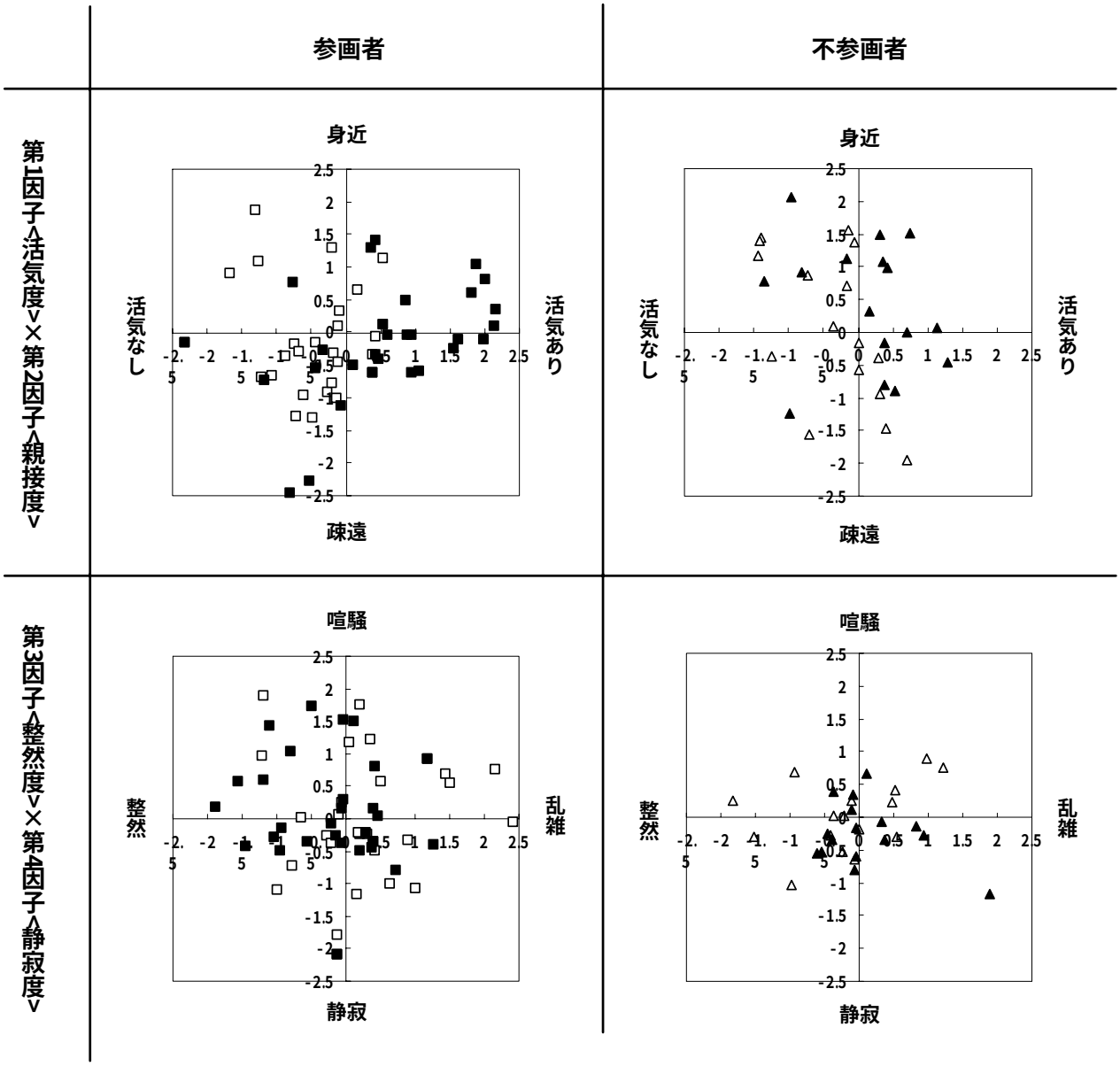
参画者、不参画者の事前アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「整然度軸」(x 軸)において明確な偏りは見られなかった。「静寂度軸」(y 軸)においても、参画者、不参画者ともに明確な偏りは見られなかった。

参画者、不参画者の事後アンケートの結果を見てみると、参画者は「整然度軸」(x 軸)において「整然」側への偏りが見られる。不参画者は「整然度軸」において、原点付近に集まってきていることがわかる。「静寂度軸」(ｙ軸)においては、参画者では「喧噪」側への偏りが見られる。不参画者においては実験前と同様に偏りは見られない。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画者、不参画者ともに因子得点分布が「活気あり」側へ変動する傾向にあることがわかった。実験を行うことによって、参画者は因子得点分布が「活気あり」、「整然」、「喧噪」側へ変動する傾向にあることがわかった。また、不参画者は因子得点分布が「活気あり」側へ変動する傾向にあることがわかった。

「活気あり」側への変動の傾向は、参画者の方が不参画者に比べて強いことがわかった。



□参画者　事前アンケート結果　　△不参画者　事前アンケート結果

■参画者　事後アンケート結果　　▲不参画者　事後アンケート結果

図 5-10　サンプル全体の因子得点分布図

5-3-4　実験前後の因子得点の変動の分析(参画者×不参画者)

実験前後の参画者と不参画者の景観イメージの変動を明らかにするために、「5-3-3　実験前後の因子得点分布図の分析」で示した図 5-10 を基に、参画者と不参画者の因子得点の変動を作成した。

参画者と不参画者の因子得点の変動を図 5-11 に示す。

以下、図 5-11 から読み取った、参画の有無によって分類したグループごとの各因子に対する因子得点の変動の傾向を述べる。

参画者の実験前後の第 1 因子〈活気度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。ほぼ全てのサンプルが「活気あり」側へ大きく変動していることがわかる。実験を行うことによって「活気あり」の方向へ街並みの景観イメージが大きく変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 1 因子〈活気度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。多くのサンプルが「活気あり」側へ変動していることがわかる。しかし、上記で述べた、参画者の変動ほどの強い傾向は見られない。

参画者の実験前後の第 2 因子〈親接度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。多くのサンプルは〈親接度〉の因子得点が変化していないことがわかる。明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

同様に、不参画者の実験前後の第 2 因子〈親接度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。あまり大きくは無いものの、多くのサンプルが「身近」側へ変動していることがわかる。少しではあるが、実験を行うことによって「身近」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。この傾向は参画者には見られない傾向である。

参画者の実験前後の第 3 因子〈整然度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。多くのサンプルが「整然」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「整然」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 3 因子〈整然度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。不参画者は第 3 因子〈整然度〉において、参画者のような明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

参画者の実験前後の第 4 因子〈静寂度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。多くのサンプルが「喧噪」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「喧噪」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 4 因子〈静寂度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。不参画者は第 4 因子〈静寂度〉において、参画者のような明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、参画者の因子得点分布は、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側へ変動する傾向にあることがわかった。不参画者の因子得点分布は「活気あり」、「身近」側へ変動する傾向にあることがわかった。

実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側に大きく因子得点分布が変動する傾向にあることがわかった。また、「身近」側へは参画しなかった場合の方が、大きく変動する傾向にあることがわかった。

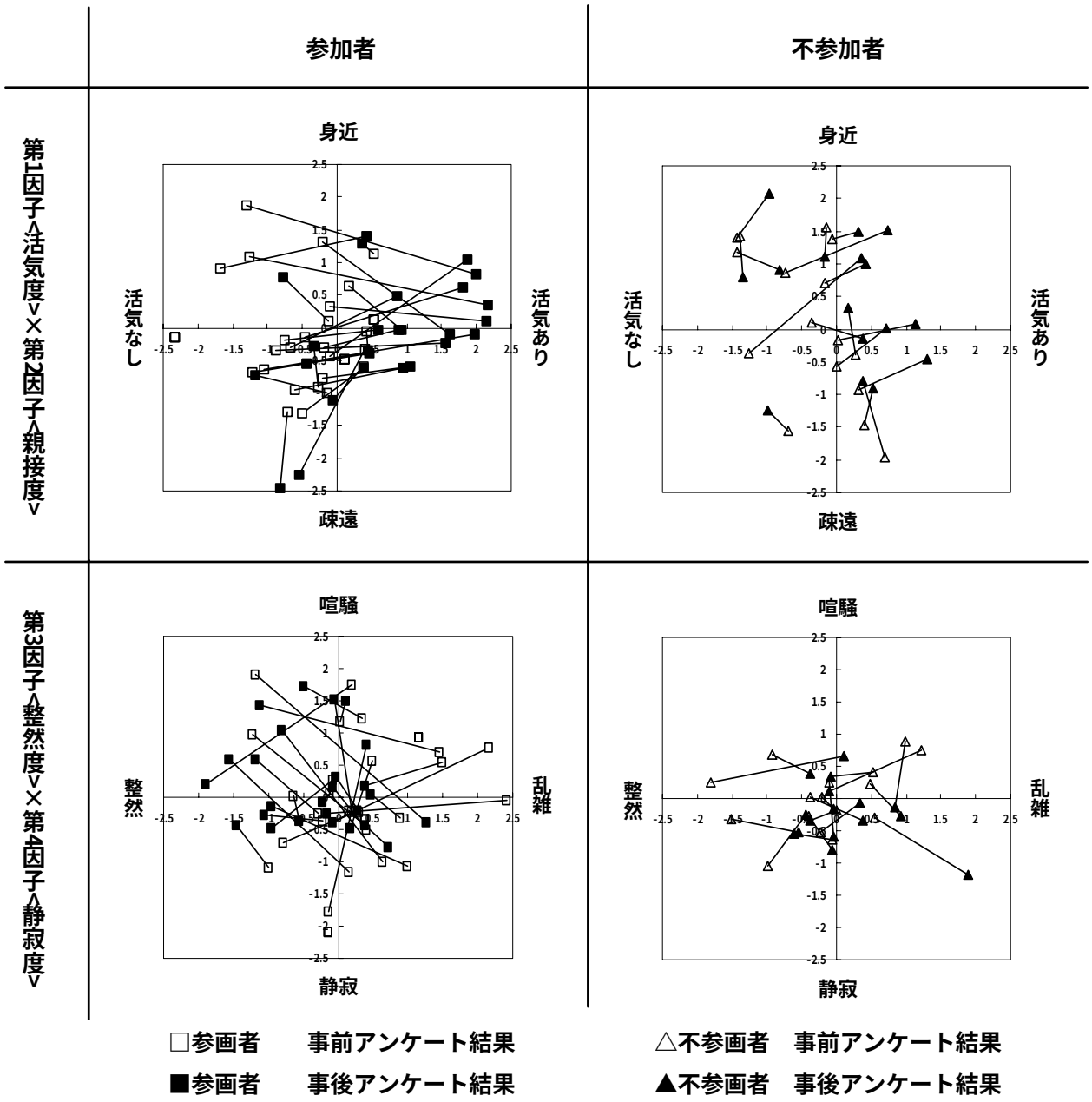


図 5-11　実験前後の因子得点の変動(参画者×不参画者)

5-3-5　実験前後の因子得点の変動の分析(高参画者×低参画者)

実験前後の高参画者と低参画者の景観イメージの変動を明らかにするために、「5-3-4　実験前後の因子得点の変動の分析(参画者×不参画者)」で示した図 5-11 を基に、参画タイプごとの因子得点の変動を作成した。

参画タイプごとの因子得点の変動を図 5-12 に示す。

以下、図 5-12 から読み取った、参画タイプごとの各因子に対する因子得点の変動の傾向を述べる。

参画タイプごとの実験前後の第 1 因子〈活気度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験を行うことによって「活気あり」の方向へ街並みの景観イメージが大きく変動する傾向にあることがわかる。高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 2 因子〈親接度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験前後における明確な因子得点の変動の傾向は見られない。上記の第 1 因子〈活気度〉に対する因子得点の変動と同様に、第 2 因子〈親接度〉に対する因子得点の変動においても、高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 3 因子〈整然度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験を行うことによって「整然」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。上記の第 1 因子〈活気度〉や第 2 因子〈親接度〉に対する因子得点の変動と同様に、第 3 因子〈整然度〉に対する因子得点の変動に対する因子得点の変動においても、高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 4 因子〈静寂度〉に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者は多くのサンプルが「喧噪」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「喧噪」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。しかし、低参画者では「喧噪」側へ向かって変動する傾向は見られない。

上記の第 1 因子〈活気度〉や第 2 因子〈親接度〉、第 3 因子〈整然度〉に対する因子得点の変動とは違い、第 4 因子〈静寂度〉に対する因子得点の変動においては、高参画者と低参画者の間で因子得点の変動の傾向に違いがあることがわかった。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

参画タイプごとの因子得点分布の傾向を見てみると、第 1 因〈活気度〉、第 2 因子〈親接度〉、第 3 因子〈整然度〉の 3 因子において、変動の傾向に大きな違いは見られない。第 4 因子〈静寂度〉においては、高参画者と不参画者で変動の違いが見られた。実験への参画の度合いが高い方が、因子得点が「喧噪」側へ変動する傾向にある。

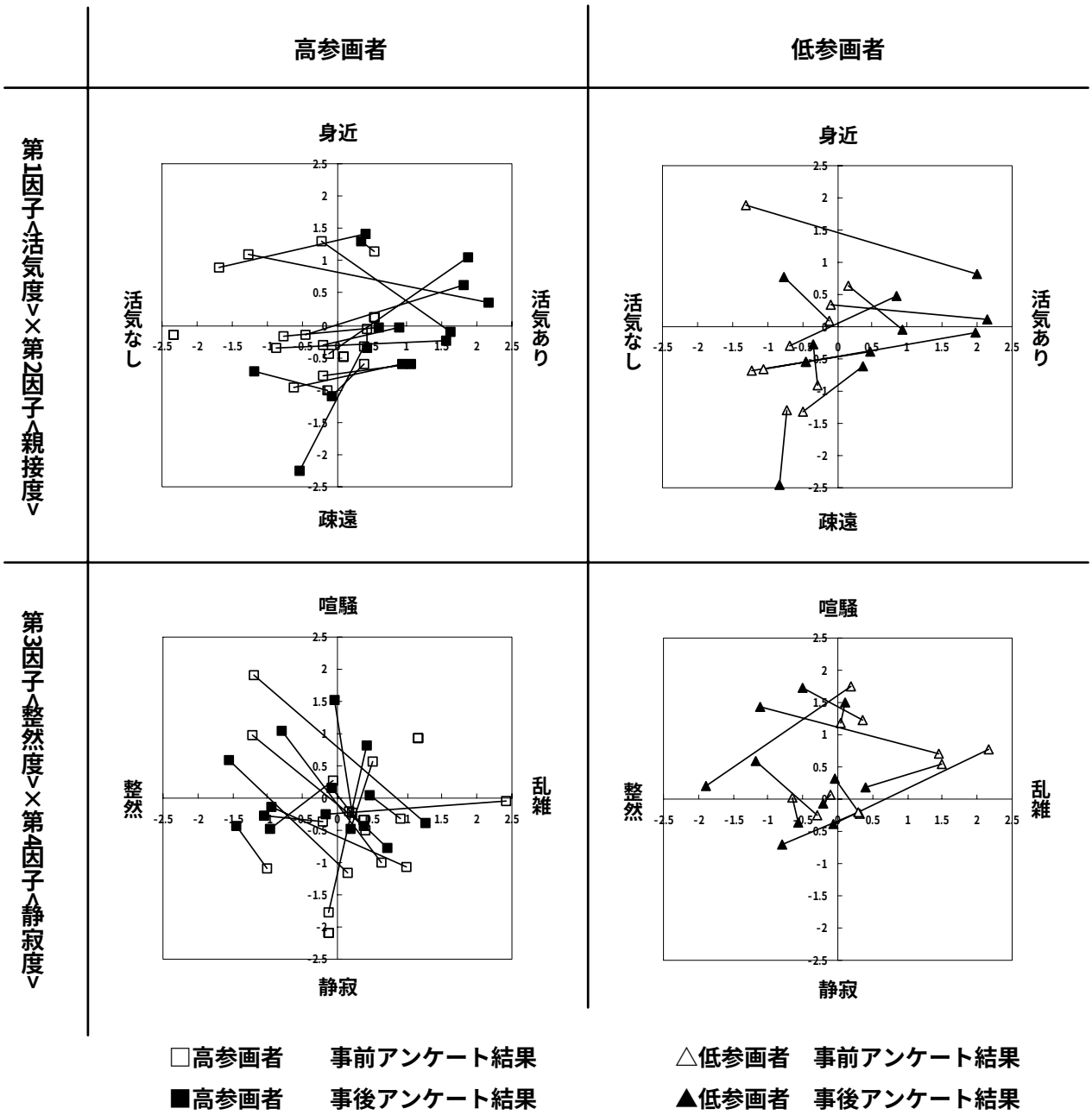


図 5-12　実験前後の因子得点の変動(高参画者×低参画者)

5-3-6　因子分析から見た街並みの景観イメージの変動のまとめ

因子分析による街並みの景観イメージの分析から街並みに対する景観イメージの傾向を読み取った。サンプル全体と各サンプルグループの街並みに対する景観イメージの傾向を以下に述べる。

- サンプル全体の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」側へ変動する傾向にある。
- 参画者の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側に大きく因子得点分布が変動する傾向にある。
- 不参画者の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」、「身近な」側へ変動する傾向にある。
- 参画タイプごとの因子得点分布の傾向を見てみると、「活気度軸」、「親接度軸」、「整然度軸」の 3 軸において、変動の傾向に大きな違いは見られない。「静寂度軸」においては、実験への参画の度合いが高い方が、因子得点が「喧噪」側へ変動する傾向にある。

以上より、考察を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みは活気があり、整った、そして騒がしいイメージとなると言える。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、活気あるイメージ、整ったイメージ、喧噪のイメージが強くなると言える。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画しなかった場合の方が参画した場合に比べて、身近なイメージが強くなると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、街並みの活気、親近感、整然性のイメージの変化へは大きな影響を与えないと言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが影響を与えるイメージは、街並みの喧噪のイメージであると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ積極的に参画するほど街並みの喧噪のイメージは強くなると言える。

5-4　まとめ

本章では、景観イメージに関するアンケート結果と「4-6　実験への参画度によるサンプルの分類」で分類を行った参画タイプを用いてプロフィール分析と因子分析を行い、サンプルの抱く街並みの景観イメージについて分析を行った。本章で得られたサンプルの抱く街並みの景観イメージの分析結果を以下にまとめる。

プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画した場合の方が、参画しなかった場合に比べ、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなる。
- 街並みの新しさ、趣のイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とは関係なく、強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、景観イメージの変化に大きな影響を与えない。
- にぎやかな街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが低い方が大きく変動する。これは、参画の度合いが低いサンプルが、様々なものを飾り付けて積極的に「色彩参画」を行っているサンプルを見ることによって、街並みの賑わいを感じたためであると考えられる。

因子分析による街並みの景観イメージの分析結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みは活気があり、整った、そして騒がしいイメージとなる。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、活気あるイメージ、整ったイメージ、喧噪のイメージが強くなる。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画しなかった場合の方が参画した場合に比べて、身近なイメージが強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、街並みの活気、親近感、整然性のイメージの変化へは大きな影響を与えない。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが影響を与えるイメージは、街並みの喧噪のイメージである。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ積極的に参画するほど街並みの喧噪のイメージは強くなる。

以下に、本章で得られた結果を基に考察を行う。

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、実験を行うことにより、街並みのイメージが活気あるイメージになることが示された。また、実験の感想として「華やかで活気のある街並みに見えました」や「いつもの高宮とちがって魅力を感じました」といった声が聞かれた。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行い、飾り付けられた街並みを見たことで、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたために街並みの「活気」のイメージが向上したと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は街並みの「活気」のイメージを向上させる効果があると考えられる。

図 5-13　「色彩参画」前後のイメージの変動

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、参画者の方が、街並みに活気あるイメージを感じる傾向が強いことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みの「活気」のイメージは大きく向上すると考えられる。また、因子分析の結果では参画者の方が、整ったイメージ、喧噪のイメージも強くなることが示されている。これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、街並みの景観を整え、街並みのにぎやかさを感じたためであると考えられる。

表 5-14　「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動

	参画者の変動		不参画者の変動
街並みの活気のイメージ	up	>	up

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がないことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無は、街並みの景観イメージの変化に影響を与えるが、参画の度合いは街並みの景観イメージの変化に大きな影響は与えないことがわかった。以上より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく、参画の有無であると考えられる。

表 5-15　「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動

	高参画者の変動		低参画者の変動
街並みの活気のイメージ	↑ up	＝	↑ up

脚注及び参考文献

[1] 巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票　設問 A-2，事後アンケート調査票　設問 A-4)

第六章　景観認識、実験への参画と景観イメージの関係

6-1　サンプルの類型化

6-1-1　景観イメージ構造によるサンプルの類型化

景観イメージ構造別にサンプルの類型化を行うために、「4-1-2　調査対象者のサンプリング」で説明を行った、景観イメージ構造の分析対象アンケート 90 部を対象としてクラスター分析を行った。クラスター分析は「5-3-1　因子の抽出」で得られた、各サンプルの第 1 因子から第 4 因子までの因子得点をカテゴリーに用いて行った。クラスター化の方法は Ward 法、距離行列は平方ユークリッド距離を用いた。

クラスター分析の結果、3 つのクラスターグループに整理することが出来た。次に、クラスターグループごとの景観イメージプロフィールを基に、それぞれの特徴について考察し、ネーミングを行った。

以下に述べるクラスターグループの考察やネーミングをわかりやすくするために、先に各クラスターグループのネーミング結果を示す。クラスター1 は「伝統不満型」、クラスター2 は「活気認知型」、クラスター3 は「伝統評価型」と名付けた。

各クラスターグループのイメージプロフィールを図 6-1 に示す。

クラスター1 は、「古い」、「伝統的な」といった街並みの古さの要素に反応している。また、「質素な」、「殺風景な」、「活気のない」、「地味な」、「暗い」、「閉鎖的な」、「さびしい」といった要素に反応している。クラスター1 に分類されたサンプルは、街並みの古さを活気の無さ、暗さ、地味さといったようにマイナス要素として捉えていると考えられる。よって、クラスター1 を街並みの古さに不満を持つ「伝統不満型」と名付けた。

クラスター2 は、「華やかな」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「にぎやかな」といった要素に反応しており、クラスター１やクラスター3 とは大きく異なるイメージプロフィールの波形を示している。クラスター1 やクラスター3 が強く反応をしている「古さ」へは反応していない。クラスター2 に分類されたサンプルは、街並みの古さに対するイメージが薄く、街並みの活気を華やかさ、明るさ、賑やかさといった要素によって感じ取っていると考えられる。よって、クラスター2 は街並みに活気を感じている、「活気認知型」と名付けた。

クラスター3 は、クラスター1 と同様に「古い」、「伝統的な」、「地味な」といった街並みの古さの要素に反応している。また、「身近な」、「落ち着く」、「暖かい」、「安らいだ」、「好きな」、「親しみやすい」といった要素に反応している。クラスター3 に分類されたサンプルは、街並みに古さを感じているものの、街並みの古さをプラス要素として捉え、落ち着く、好きな、親しみやすいといったようにプラス要素として捉えていると考えられる。よって、クラスター3 は街並みに親近感を抱き、満足している「伝統評価型」と名付けた。

以上のように、景観イメージ構造によって、サンプルを 3 つの景観イメージ構造タイプに分類することが出来た。

分類結果は「伝統不満型」、「活気認知型」、「伝統評価型」の 3 タイプである。

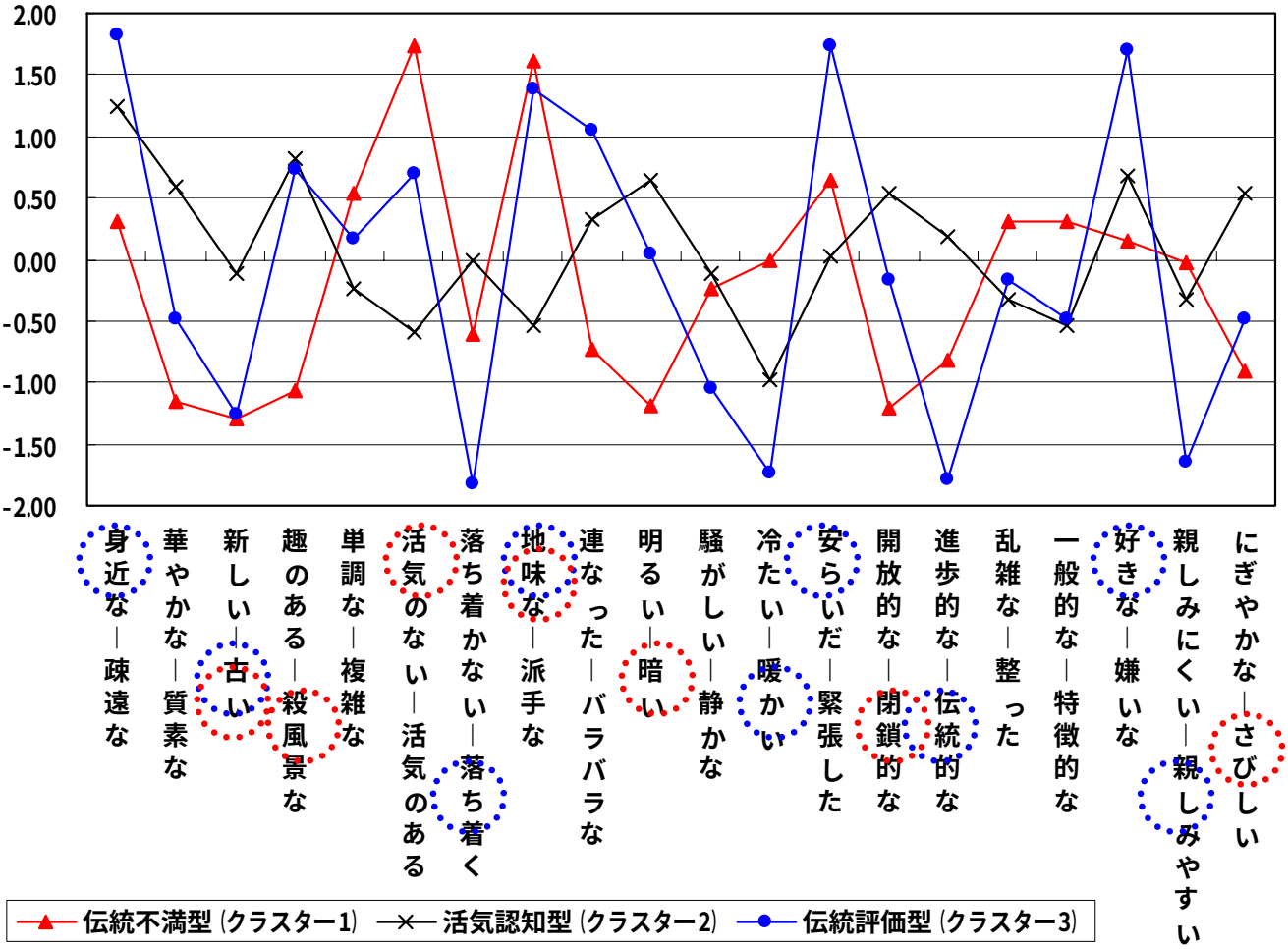


図 6-1　各クラスターグループの対象地域に抱く景観イメージ

各クラスターグループの詳細を表 6-1 にまとめ、各クラスターグループの因子得点分布図を図 6-2、図 6-3 に示す。

表 6-1　各クラスターグループのネーミング結果(景観イメージタイプ)

	名称	サンプル数	割合
クラスター1	伝統不満型	33	36.7%
クラスター2	活気認知型	34	37.8%
クラスター3	伝統評価型	23	25.6%
	計	90	100.0%

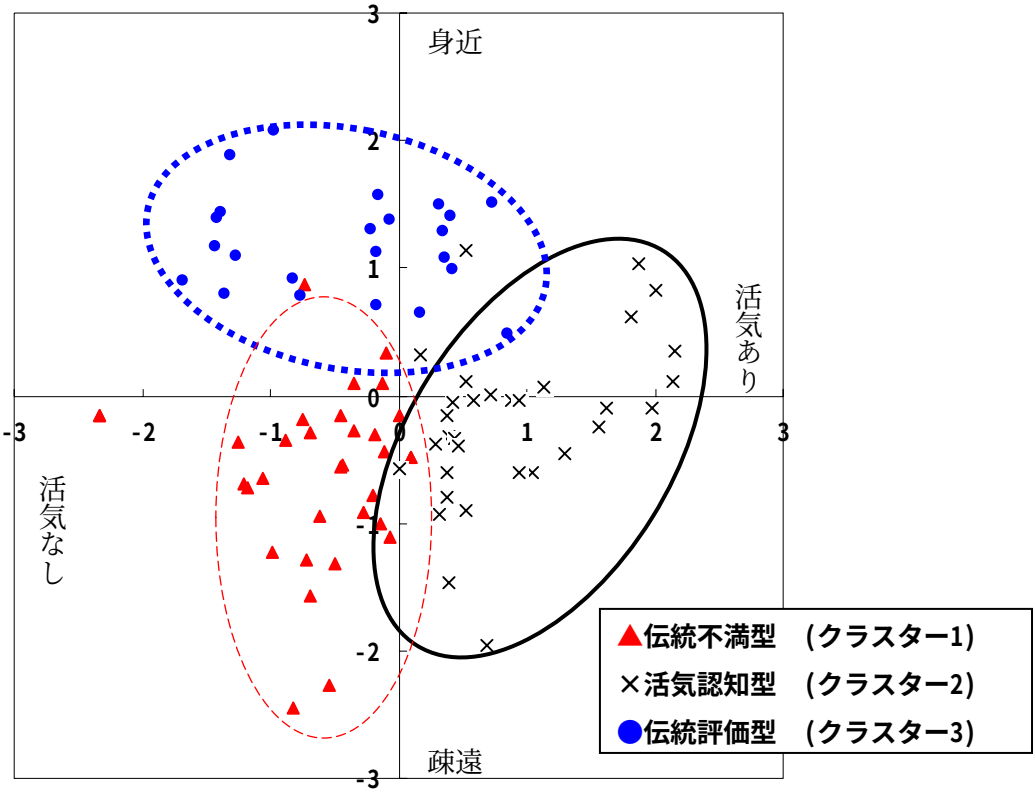


図 6-2　クラスターグループの因子得点分布図(第 1 因子〈活気度〉×第 2 因子〈親接度〉)

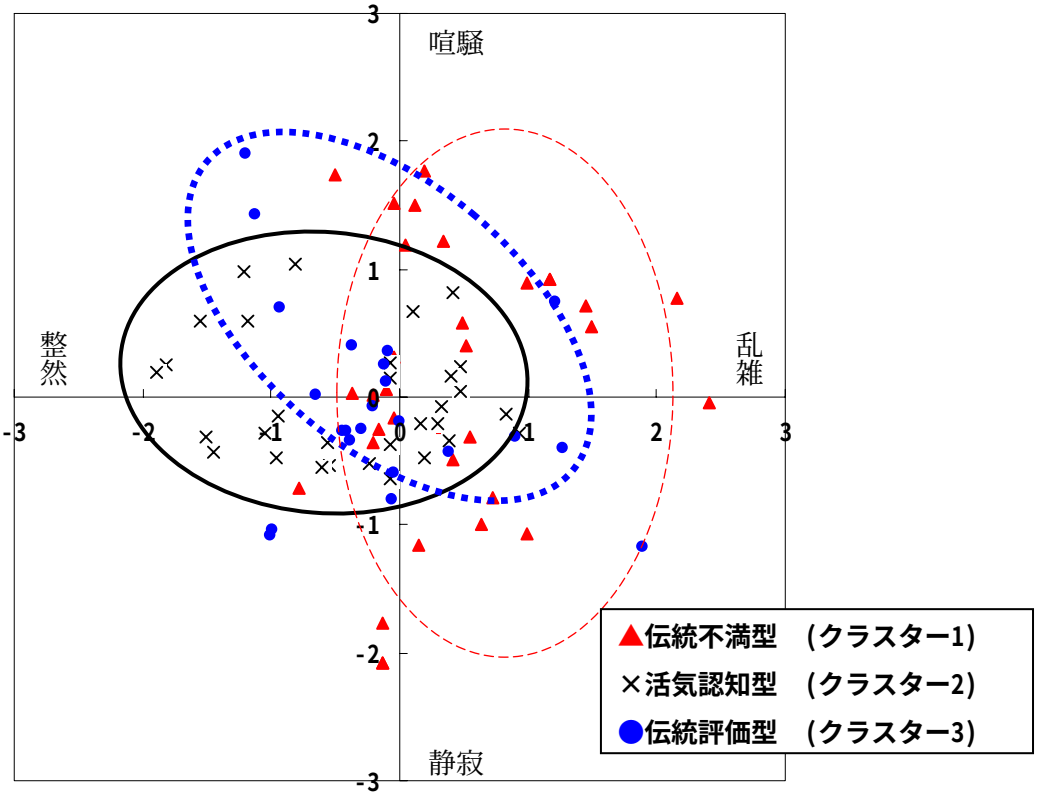


図 6-3　クラスターグループの因子得点分布図(第 3 因子〈整然度〉×第 4 因子〈静寂度〉)

6-1-2　街並みへの関心の傾向によるサンプルの類型化

街並みへの関心の傾向別にサンプルの類型化を行うために、「4-1-2　調査対象者のサンプリング」で説明を行った、景観イメージ構造の分析対象アンケート 90 部を対象としてクラスター分析を行った。クラスター分析は「4-4-1　街並みへの感心に関するアンケート結果(全体)」で得られた、各サンプルの「中山道に関する記述」、高宮町の「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」、「電柱・街路灯に関する記述」、「その他の記述」の回答数と「街並みへの関心に関するアンケート」への回答の有無をカテゴリーに用いて行った。クラスター化の方法は Ward 法、距離行列は平方ユークリッド距離を用いた。

クラスター分析の結果 4 つのクラスターグループに整理することが出来た。次に、クラスターグループごとの街並みへの関心の傾向を基に、それぞれの特徴について考察し、ネーミングを行った。各クラスターグループの街並みへの関心の傾向を図 6-4 に示す。

以下に述べるクラスターグループの考察やネーミングをわかりやすくするために、先に各クラスターグループのネーミング結果を示す。クラスター1 は「歴史重視型」、クラスター2 は「関心抽象型」、クラスター3 は「景観重視型」、クラスター4 は「道路関心型」と名付けた。

クラスター1 は、シンボルに関する記述数が最も多くなっている。シンボルに関する記述は、「4-4-3　街並みへの関心の想起理由」で述べたように、そのほとんどが歴史に関する理由によって想起されているものである。よって、クラスター1 を街並みの「歴史重視型」と名付けた。

クラスター2 は、街並みへの関心項目が無回答であったサンプルのみで構成されている。そのため、クラスター2 に分類されたサンプルは、明確な関心対象が無いと考えられる。よって、「関心抽象型」と名付けた。

クラスター3 は、家屋・空き地に関する記述やその他の記述数が多くなっている。家屋・空き地に関する記述は、「4-4-3　街並みへの関心の想起理由」で述べたように、景観に関する理由によって想起されている割合が大きい。よって、クラスター3 を街並みの「景観重視型」と名付けた。

クラスター4 は、中山道に関する記述数の平均値が最も高くなっている。また、電柱・街路灯に関する記述数の平均値も高くなっている。電柱・街路灯とは道路上にあるものである。そのため、クラスター4 に分類されたサンプルは道路に対する関心が高いと考えられる。よってクラスター4 を「道路関心型」と名付けた。

以上のように、街並みへの関心の傾向によって、サンプルを 4 つの街並みへの関心タイプに分類することが出来た。

分類結果は「歴史重視型」、「関心抽象型」、「景観重視型」、「道路関心型」の 4 タイプである。

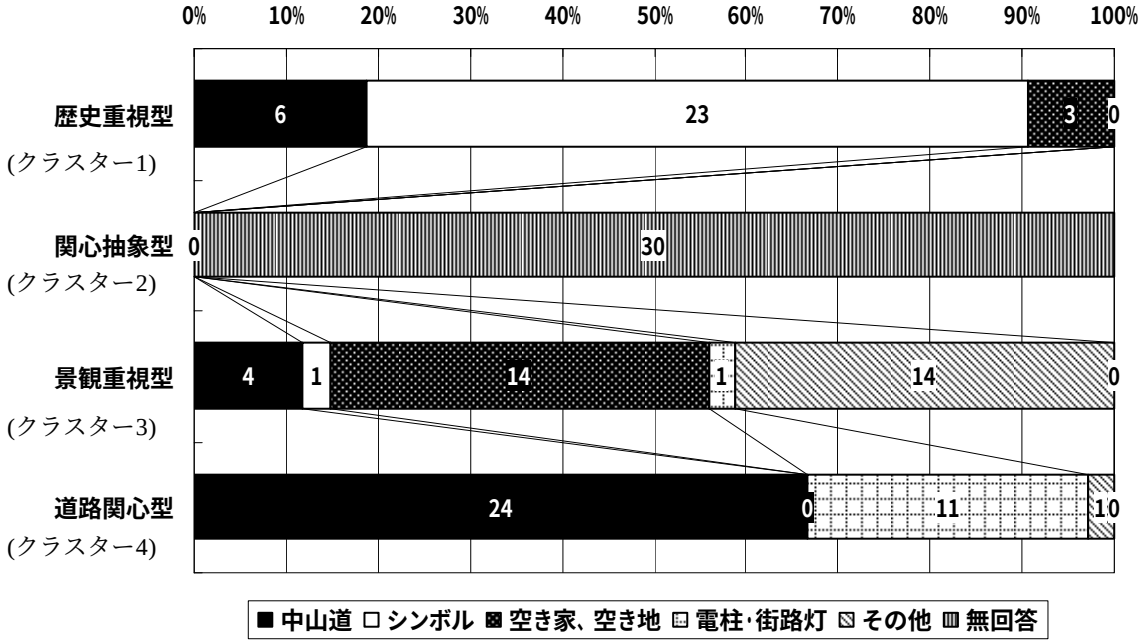


図 6-4　各クラスターグループの街並みへの関心の傾向

各クラスターグループの詳細を表 6-2 に示す。

表 6-2　各クラスターグループのネーミング結果(街並みへの関心タイプ)

	名称	サンプル数	割合
クラスター1	歴史重視型	15	16.7%
クラスター2	関心抽象型	30	33.3%
クラスター3	景観重視型	20	22.2%
クラスター4	道路関心型	25	27.8%
	計	90	100.0%

6-2　景観認識と景観イメージ構造の関係

景観認識、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係を明らかにするために、景観認識と景観イメージ構造タイプ、実験への参画の有無及び参画タイプ、属性を用いてクロス集計を行った。景観認識とは「2-5-4　景観認識に関するアンケート調査」で述べたように、「4-3　街並みをイメージする色に関するアンケート結果」より得られた、街並みをイメージする色の傾向と街並みへの関心タイプから構成されている。

また、同時に統計的に各グループの比率の差を明らかにするために、有意水準 0.05 で Pearson のカイ二乗検定を行った。

6-2-1　サンプルの属性と景観イメージ構造の関係

サンプルの属性と景観イメージ構造の関係を明らかにするために、景観イメージ構造タイプと「4-2　サンプルの特徴」で集計を行ったサンプルの(1)性別、(2)年代、(3)職業のそれぞれについてクロス集計を行い、同時にカイ二乗検定を行った。

(1)性別と景観イメージ構造の関係

景観イメージ構造タイプと性別のクロス集計の結果を図 6-5 に、カイ二乗検定の結果を表 6-3 に示す。

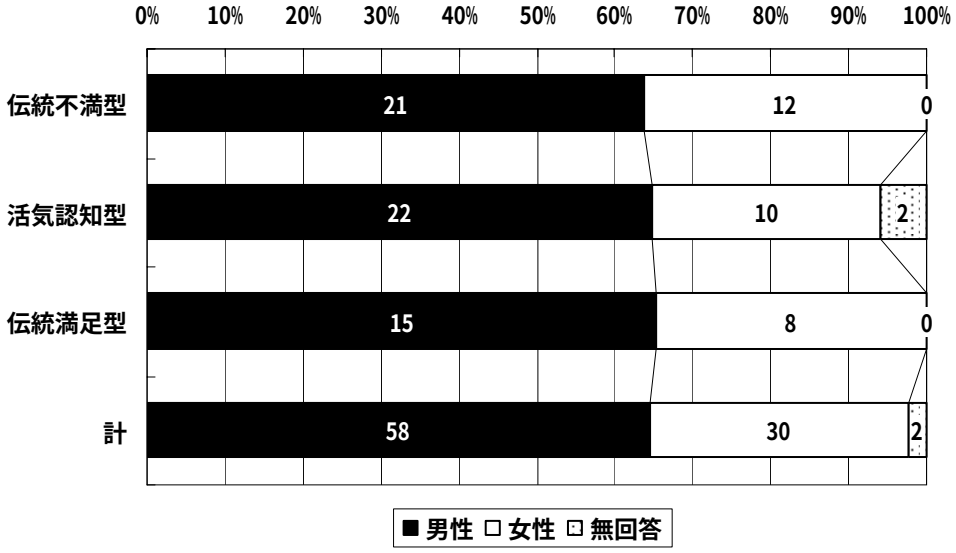


図 6-5　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×性別)

表 6-3　カイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×性別)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	3.56	4	0.468

図 6-5 を見てみると、「伝統不満型」、「活気認知型」、「伝統評価型」の全てにおいて特徴的な傾向は見られなかった。性別による違いは景観イメージ構造に影響しないと考えられる。

カイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.468 となった。0.468＞0.05 であるために、性別ごとの景観イメージ構造に統計的な有意差が無いことがわかった。

(2)年代と景観イメージ構造の関係

景観イメージ構造タイプと年代のクロス集計の結果を図 6-6 に、カイ二乗検定の結果を表 6-4 に示す。

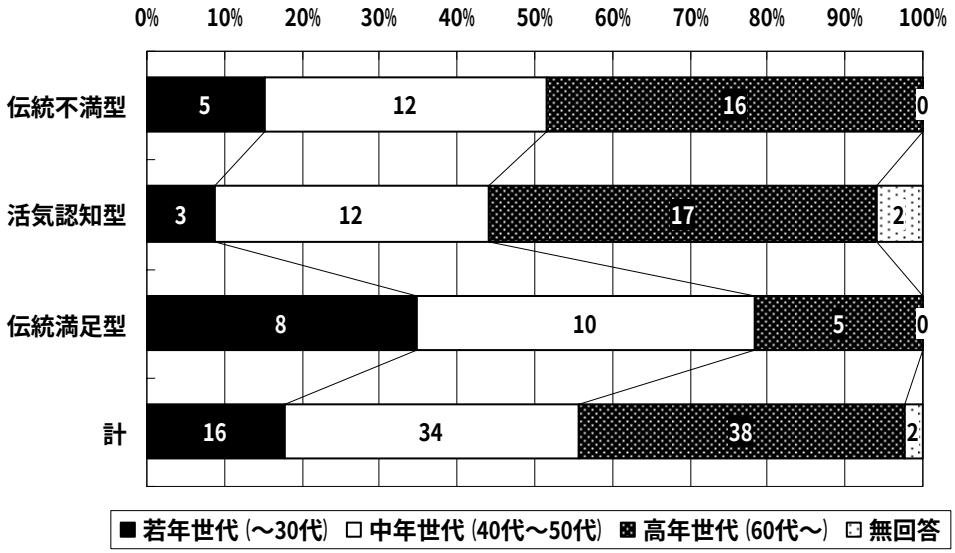


図 6-6　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×年代)

表 6-4　カイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×年代)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	12.05	6	0.061

図 6-6 を見てみると、「伝統評価型」は若年世代の割合が高いことがわかる。このことから、若年世代は街並みの古さや伝統を好意的に受け止め、落ち着きや安らぎを感じる傾向にあると考えられる。

カイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.061 となった。0.061＞0.05 であるために、年代ごとの景観イメージ構造に統計的な有意差があるとは言えない。

(3)職業と景観イメージ構造の関係

景観イメージ構造タイプと職業のクロス集計の結果を図 6-7 に、カイ二乗検定の結果を表 6-5 に示す。

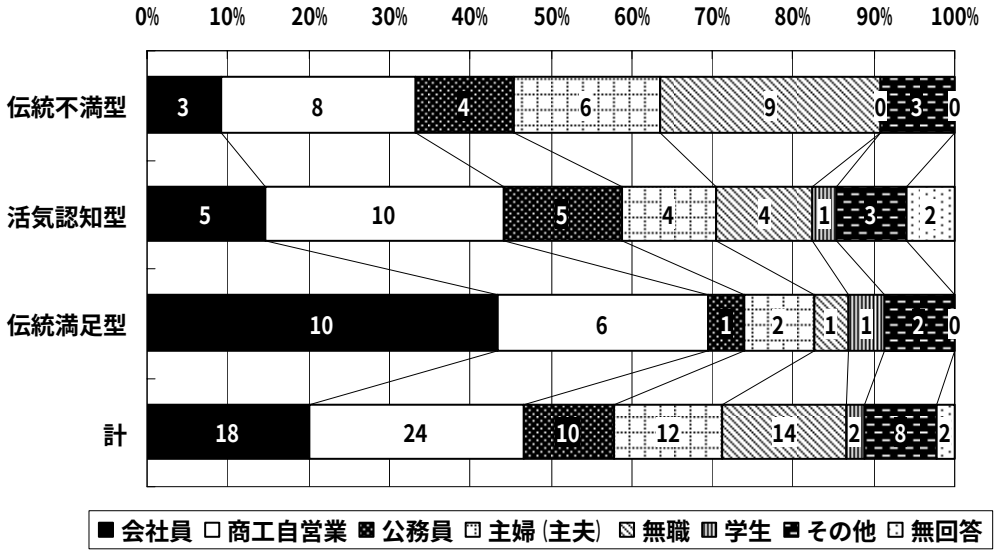


図 6-7　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×職業)

表 6-5　カイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×職業)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	21.00	14	0.102

図 6-7 を見てみると、「伝統評価型」は会社員の割合が高いことがわかる。このことから、会社員のように平日は対象地域の街並みを目にしない仕事の場合、街並みの古さや静かさを落ち着きや安らぎと感じる傾向にあると考えられる。

カイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.102 となった。0.102＞0.05 であるために、職業ごとの景観イメージ構造に統計的な有意差があるとは言えない。

6-2-2　街並みをイメージする色と景観イメージ構造の関係

街並みをイメージする色と景観イメージ構造の関係を明らかにするために、景観イメージ構造タイプと「4-3-1　街並みをイメージする色の傾向(全体)」で集計を行った街並みをイメージする色についてクロス集計を行い、同時にカイ二乗検定を行った。

なお、事前アンケートでは街並みをイメージする色は 3 色まで回答できるが、クロス集計には最初に回答されてある色のみを用いた。これは、最初に回答されている色は、サンプルがはじめに思いついた色である。つまり、最もイメージしやすい色彩であったと考えられる。そのため、サンプルの考える街並みをイメージする色として最も適当な色であったと考えられるためである。

景観イメージ構造タイプと街並みをイメージする色のクロス集計の結果を図 6-8 に、カイ二乗検定の結果を表 6-6 に示す。

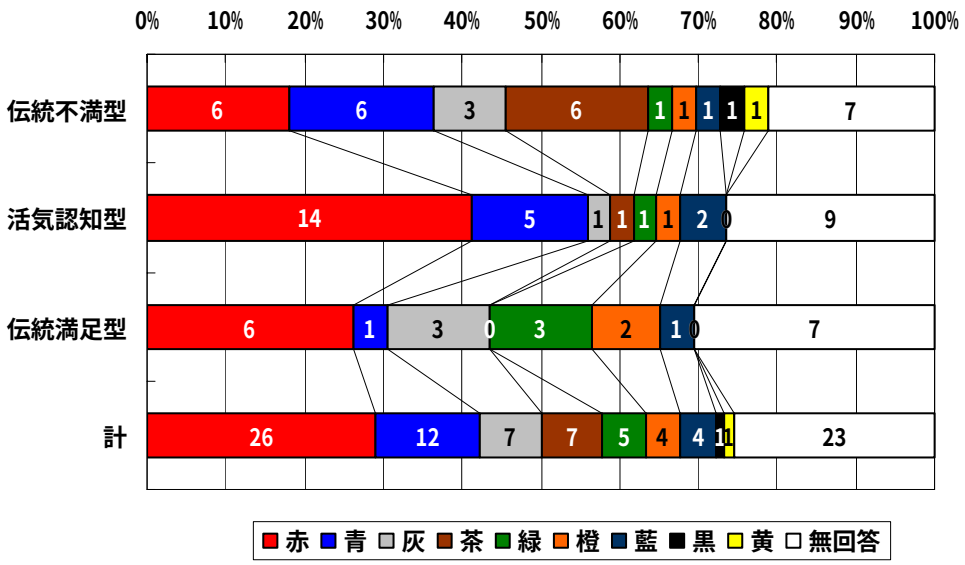


図 6-8　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×街並みをイメージする色)

表 6-6　カイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×街並みをイメージする色)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	23.10	18	0.187

図 6-8 を見てみると、「伝統不満型」は茶の割合が高く、「活気認知型」は赤の割合が高いことがわかる。「4-3-3　街並みをイメージする色の想起理由」で述べたように茶の想起理由の多くは街並みの古さである。同様に、赤の想起理由の多くはプラスイメージであった。

つまり、「伝統不満型」は街並みの古さに対して特に不満を感じていると考えられる。また、「活気認知型」は街並みの活気を華やかさ、暖かさとして肯定的に捉えていると考えられる。

カイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.182 となった。統計的に見た場合 0.182＞0.05 であるために、景観イメージ構造に街並みをイメージする色による有意差があるとは言えない。

6-2-3　街並みへの関心と景観イメージ構造の関係

街並みへの関心と景観イメージ構造の関係を明らかにするために、景観イメージ構造タイプと街並みへの関心タイプについてクロス集計を行い、同時にカイ二乗検定を行った。

景観イメージ構造タイプと街並みへの関心タイプのクロス集計の結果を図 6-9 に、カイ二乗検定の結果を表 6-7 に示す。

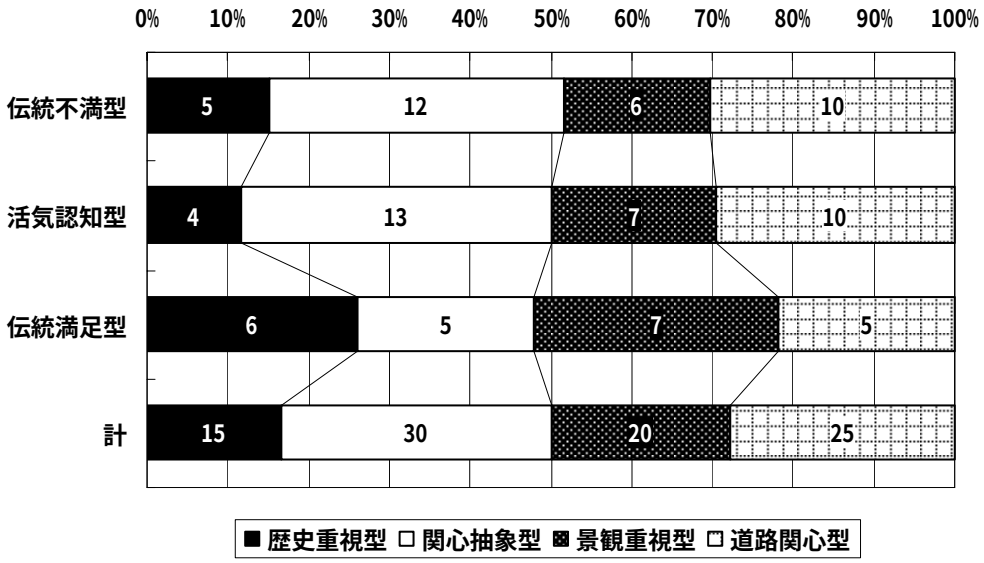


図 6-9　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×街並みへの関心タイプ)

表 6-7　カイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×街並みへの関心タイプ)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	4.42	6	0.621

図 6-9 を見てみると、「伝統不満型」、「活気認知型」、「伝統評価型」の全てにおいて特徴的な傾向は見られなかった。街並みへの関心タイプの違いは景観イメージ構造に影響しないと考えられる。

カイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.621 となった。0.621＞0.05 であるために、統計的にも街並みへの関心タイプごとの景観イメージ構造に有意差が無いことがわかった。

6-3　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係を明らかにするために、景観イメージ構造タイプと実験への参画の有無、参画タイプのそれぞれについてクロス集計を行った。なお、参画タイプとは参画度による参画者の分類結果である。詳細は「4-6　実験への参画度によるサンプルの分類」を参照。

また、同時に統計的に比率の差を明らかにするために、有意水準 0.05 で Pearson のカイ二乗検定を行った。

6-3-1　実験への参画の有無と景観イメージ構造の関係

景観イメージ構造タイプと実験前後の参画者、不参画者のクロス集計の結果を図 6-10 に示す。また、参画者に対するカイ二乗検定の結果を表 6-8、不参画者に対するカイ二乗検定の結果を表 6-9 に示す。

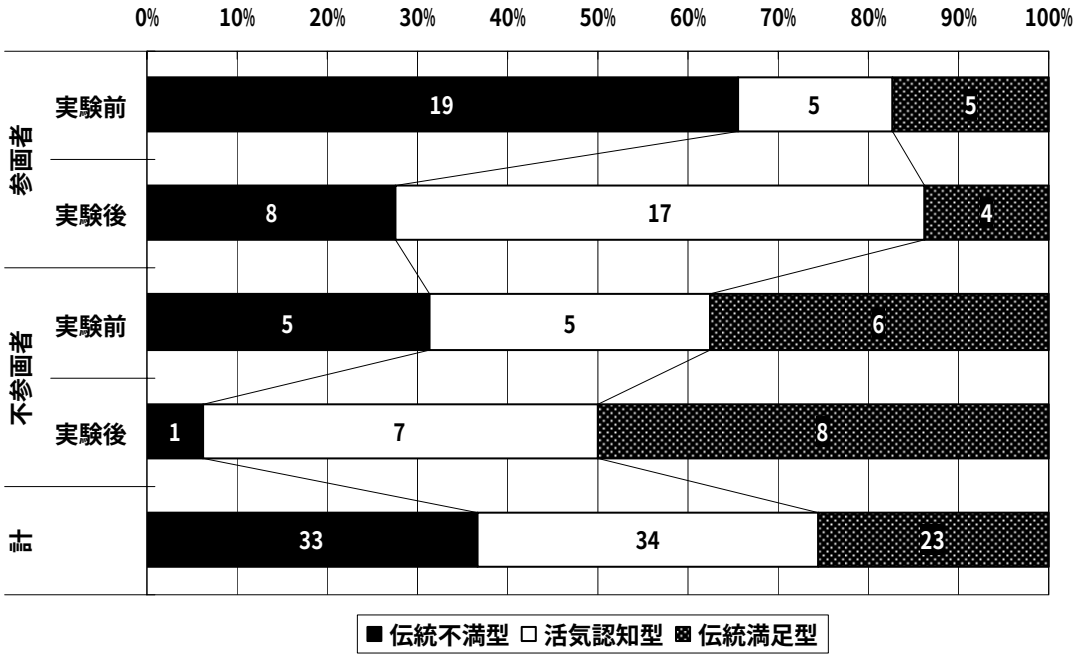


図 6-10　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×参画の有無)

表 6-8　参画者に対するカイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×実験前後)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	11.14	2	0.004

図 6-10 の実験前後の参画者の軸を見てみると、実験前の参画者は「伝統不満型」の割合が著しく高く、「活気認知型」と「伝統評価型」の割合が低くなっている。実験後の参画者は「活気認知型」の割合が高くなっている。

以上より、実験前の前の参画者は、街並みの古さの印象が強く、街並みに対して不満を感じていると考えられる。参画者は対象地域に住んでいるために対象地域の街並みを目にすることが多い。そのため、街並みの不満点が目に付きやすいためであると考えられる。また、実験後の参画者は、街並みに対して活気を感じていると考えられる。つまり、実験を行うことによって参画者は街並みに活気を感じるようになると考えられる。

参画者のクロス集計結果に対してカイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.004 となった。0.004＜0.05 であるために、統計的にも参画者の実験前後の景観イメージ構造に違いがあると言える。

表 6-9　不参画者に対するカイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×実験前後)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	3.29	2	0.193

次に図 6-10 の実験前後の不参画者の軸を見てみると、実験前の不参画者は「伝統不満型」、「活気認知型」、「伝統評価型」の全てにおいて特徴的な傾向は見られない。実験後の不参画者は「伝統不満型」の割合が低くなっている。

以上より、実験後の不参画者は街並みの古さの印象が薄く、街並みに対してあまり不満を感じていないと考えられる。実験前の不参画者に大きな特徴が見られなかったことを考えると、実験を行うことによって不参画者は街並みにあまり不満を感じなくなると考えられる。

不参画者のクロス集計結果に対してカイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.193 となった。統計的に見た場合 0.193＞0.05 であるために不参画者の実験前後の景観イメージ構造に有意差があるとは言えない。

以上の結果より、参画者は実験を行うことによって街並みの古さに対する不満が減り、活気を感じるようになると言える。また、不参画者は実験前後の景観イメージ構造に統計的な有意差があるとは言えなかった。つまり、不参画者の街並みに対する景観イメージ構造は、実験の前後で大きく変化しないと考えられる。

6-3-2　参画タイプと景観イメージ構造の関係

景観イメージ構造タイプと実験への参画タイプのクロス集計の結果を図 6-11 に示す。また、事前データに対するカイ二乗検定の結果を表 6-10、事後データに対するカイ二乗検定の結果を表 6-11 に示す。

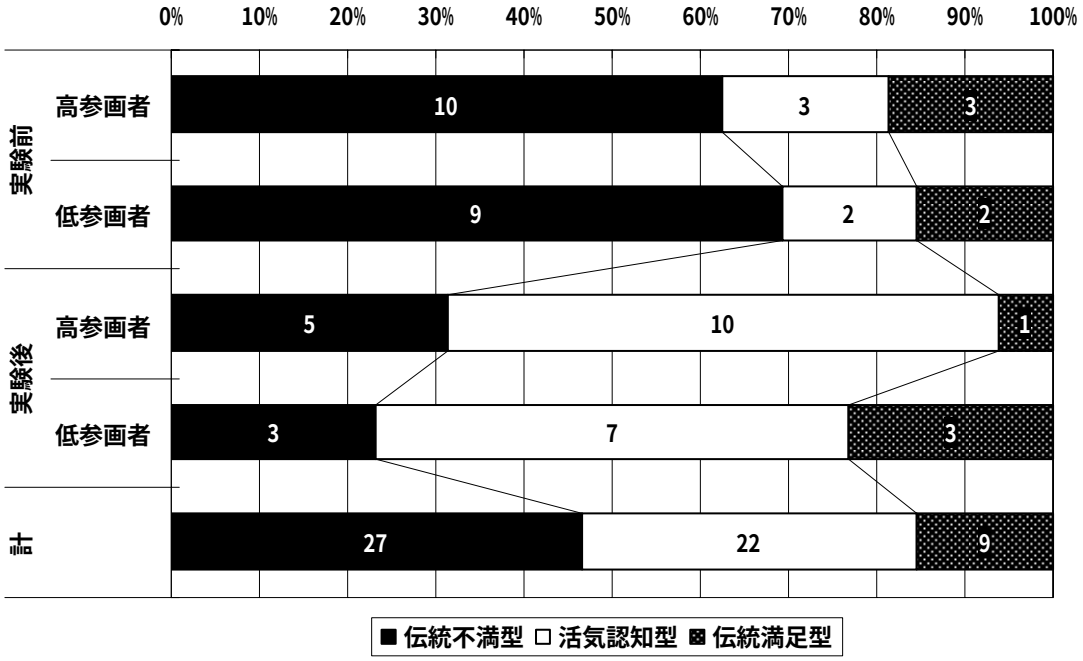


図 6-11　クロス集計結果(景観イメージ構造タイプ×参画タイプ)

表 6-10　事前データに対するカイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×参画タイプ)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	0.14	2	0.931

表 6-11　事後データに対するカイ二乗検定結果(景観イメージ構造タイプ×参画タイプ)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のｶｲ 2 乗	1.74	2	0.419

図 6-11 を見てみると、実験前と実験後ともに高参画者と低参画者の景観イメージ構造タイプの傾向にほとんど差が見られない。

事前データのクロス集計結果に対してカイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.931 となった。統計的に見た場合 0.931＞0.05 であるために、実験前の高参画者と低参画者の景観イメージ構造に統計的な有意差はないと言える。また、事後データのクロス集計結果に対してカイ二乗検定を行った結果、漸近有意確率は 0.419 となった。統計的に見た場合 0.419＞0.05 であるために、実験後の高参画者と低参画者の景観イメージ構造に統計的な有意差はないと言える。

以上より、実験への参画度の違いは街並みの景観イメージ構造に大きな影響を与えないことがわかった。

6-4　まとめ

本章では、「5-3　因子分析による街並みの景観イメージの分析」で得た因子得点を基にしたサンプルの類型化と「4-4　街並みへの関心に関するアンケート結果」での集計結果を基にしたサンプルの類型化を行った。その後、上記 2 つの類型化によって得られた類型と「第四章　調査結果」での集計結果を用いてクロス集計を行い、調査対象者の景観認識と景観イメージ構造の関係、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係について分析を行った。

以下に、本章で得られた景観イメージ構造と各要素の関係の分析結果をまとめる。

<u>景観イメージ構造によるサンプルの類型化</u>

- 景観イメージ構造は、街並みの古さや地味さに不満を感じている「伝統不満型」、街並みに華やかさや明るさを感じる「活気認知型」、街並みの古さや地味さを親しみや落ち着きとして捉える「伝統評価型」の 3 タイプに分類することが出来た。

表 6-12　景観イメージ構造タイプ

	古さのイメージ	活気のイメージ	プラスイメージ	マイナスイメージ
伝統不満型	○	×	×	○
活気認知型	×	○	○	×
伝統評価型	○	×	○	×

○：イメージ有り　×：イメージ無し

街並みへの関心の傾向によるサンプルの類型化

- 街並みへの関心の傾向は、街並みの歴史に最も関心があると考えられる「歴史重視型」、明確な関心対象が無いと考えられる「関心抽象型」、街並みの景観に最も関心があると考えられる「景観重視型」、道路に対する関心が最も高いと考えられる「道路関心型」の 4 タイプに分類することが出来た。

表 6-13　街並みへの関心タイプ

	中山道に関する記述数	シンボルに関する記述数	家屋・空き地に関する記述数	電柱・街路灯に関する記述数	その他の記述数
歴史重視型	○	◎	△	×	×
関心抽象型	×	×	×	×	×
景観重視型	△	△	◎	△	◎
道路関心型	◎	×	×	○	△

◎：多　○：中　△：少　×：無

景観認識と景観イメージ構造の関係

- 有意水準 0.05 で統計的にサンプルの属性と景観イメージ構造との関係を見た場合、サンプルの性別、年代、職業の全てにおいて景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。
- 有意水準 0.05 で統計的に街並みをイメージする色と景観イメージ構造との関係を見た場合、サンプルの抱く街並みをイメージする色と景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。
- 有意水準 0.05 で統計的に街並みへの関心と景観イメージ構造との関係を見た場合、サンプルの抱く街並みへの関心と景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。

表 6-14　景観認識と景観イメージ構造の関係

	属性	色のイメージ	街並みへの関心
景観イメージ構造	×	×	×

×：関係無し

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係

- 有意水準 0.05 で統計的に景観イメージ構造の差を見た場合、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後で、参画者の景観イメージ構造が変化していると言える。
- 有意水準 0.05 で統計的に景観イメージ構造の差を見た場合、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後で、不参画者の景観イメージ構造が変化しているとは言えない。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前の参画者は、「伝統不満型」の割合が著しく高く、「活気認知型」と「伝統評価型」の割合が低くなっている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行った後の参画者は、「活気認知型」の割合が高くなっている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画タイプと景観イメージ構造の関係を見てみると、実験前後のどちらにおいても高参画者と低参画者の景観イメージ構造にほとんど差が見られない。
- 有意水準 0.05 で統計的に見た場合、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画タイプと景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。

表 6-15　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージ構造の関係

	参画の有無	参画の度合い
景観イメージ構造	○	×

○：関係有り　×：関係無し

以下に、本章で得られた結果を基に考察を行う。

- 景観イメージ構造タイプとサンプルの属性、景観認識とのクロス集計を行った結果、サンプルの属性、サンプルの抱く街並みをイメージする色、街並みへの関心タイプの全てにおいて、景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。つまり、サンプルの属性、景観認識に、街並みの景観イメージの変化に対する大きな影響は無いと考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の参画者の景観イメージ構造に違いがあることがわかった。つまり、実験へ参画した場合、街並みの景観イメージ構造は変化すると考えられる。実験を行うことによって「伝統不満型」の景観イメージ構造タイプが減少し、「活気認知型」の景観イメージ構造タイプが増加したことを考えると、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって参画者は街並みの古さに対する不満が減り、活気を感じるようになると考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の不参画者の景観イメージ構造の違いを明らかにすることは出来なかった。つまり、実験へ参画しなかった場合、街並みの景観イメージ構造は大きく変化しないと考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画タイプとのクロス集計を行った結果、参画タイプと景観イメージ構造の関係性を見出すことが出来なかった。つまり、実験への参画の度合いに街並みの景観イメージの変化への大きな影響は無いと考えられる。

- 景観認識、実験への参画と景観イメージ構造の関係について分析を行った結果より、最も景観イメージ構造の変化との関係性が高い事柄は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無であり、参画の度合いではないと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画することが最も重要な事柄であり、赤く飾り付けられた街並みを目にするだけでは、景観イメージ構造の大きな変化は期待できないと考えられる。

第七章　結論

7-1　各章のまとめ

ここで、第一章から第六章までの内容と結果をまとめる。

第一章では、本研究の背景と目的・意義について述べた。

第二章では、本研究で実施した実験と調査の概要を述べた。実験の概要として、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の説明、実験対象地域や実験対象者についての説明を述べた。また、調査の概要として、調査対象者や街路景観イメージ調査と景観認識調査からなるアンケート調査についての説明を述べた。

第三章では、本研究で行った分析方法について述べた。単純集計による分析やプロフィール分析による分析、因子分析による分析、類型化による分析についての説明を述べた。

第四章では、本研究で実施した景観認識に関するアンケート調査と実験への参画度に関するアンケート調査の単純集計及びクロス集計の結果を示した。また、調査の実施状況やサンプリングについての説明を述べた。

以下に、第四章で得た結果を述べる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を、街並みをイメージする色として選びやすくなる傾向にあることが示された。また、街並みの古さをイメージする色や、対象地域との関わりの薄い色を選びにくくなる傾向にあることが示された。さらには、実験の感想として「静かで色味の無い町が、赤く色づけて頂いて浮きたっているよう」や「町が明るく感じました」という声が聞かれた。つまり、実験をおこなうことによって街並みの古さのイメージが薄くなり、実験前は意識していなかった街並みの活気を感じた、もしくは活気を願うようになると考えられる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向にあることが示された。「電柱・街路灯に関する記述」は「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性を理由として想起されているものがほとんどであった。また、電柱・街路灯への関心以外は実験の前後で大きな変化をしないことが示された。実験を行っても、歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心は変化しないと考えられる。つまり、実験を行うことによって変化するのは街並みの利便性への関心であり、街並みの利便性に対する不満が減少すると考えられる。また、実験は歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心へは影響しないと考えられる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後において、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に差が見られなかったことから、実験への参画の有無は街並みへの関心に大きな影響を与えないと考えられる。

第五章では、本研究で実施した街路景観イメージに関するアンケート調査の単純集計結果を示した。また、単純集計の結果と第四章で得られた結果を用いて、プロフィールの分析や因子分析による分析結果を示した。

以下に、第五章で得た結果を述べる。

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、実験を行うことにより、街並みのイメージが活気あるイメージになることが示された。また、実験の感想として「華やかで活気のある街並みに見えました」や「いつもの高宮とちがって魅力を感じました」といった声が聞かれた。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行い、飾り付けられた街並みを見たことで、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたために街並みの「活気」のイメージが向上したと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は街並みの「活気」のイメージを向上させる効果があると考えられる。

図 7-1　「色彩参画」前後のイメージの変動

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、参画者の方が、街並みに活気あるイメージを感じる傾向が強いことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みの「活気」のイメージは大きく向上すると考えられる。また、因子分析の結果では参画者の方が、整ったイメージ、喧噪のイメージも強くなることが示されている。これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、街並みの景観を整え、街並みのにぎやかさを感じたためであると考えられる。

表 7-1　「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動

	参画者の変動		不参画者の変動
街並みの 活気のイメージ	up	>	up

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がないことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無は、街並みの景観イメージの変化に影響を与えるが、参画の度合いは街並みの景観イメージの変化に大きな影響は与えないことがわかった。以上より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく、参画の有無であると考えられる。

表 7-2　「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動

	高参画者の変動		低参画者の変動
街並みの 活気のイメージ	up	=	up

第六章では、第四章と第五章で得た結果を用いて行った類型化の結果を示した。また、ここで得た類型と第四章の結果を用いて行った、クロス集計による分析結果を示した。
以下に、第六章で得た結果を述べる。

- 景観イメージ構造タイプとサンプルの属性、景観認識とのクロス集計を行った結果、サンプルの属性、サンプルの抱く街並みをイメージする色、街並みへの関心タイプの全てにおいて、景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。つまり、サンプルの属性、景観認識に、街並みの景観イメージの変化への影響力は無いと考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の参画者の景観イメージ構造に違いがあることがわかった。つまり、実験へ参画した場合、街並みの景観イメージ構造は変化すると考えられる。実験を行うことによって「伝統不満型」の景観イメージ構造タイプが減少し、「活気認知型」の景観イメージ構造タイプが増加したことを考えると、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって参画者は街並みの古さに対する不満が減り、活気を感じるようになると考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の不参画者の景観イメージ構造の違いを明らかにすることは出来なかった。つまり、実験へ参画しなかった場合、街並みの景観イメージ構造は大きく変化しないと考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画タイプとのクロス集計を行った結果、参画タイプと景観イメージ構造の関係性を見出すことが出来なかった。つまり、実験への参画の度合いに街並みの景観イメージの変化への影響力は無いと考えられる。

表 7-3　景観認識及び実験への参画と景観イメージ構造の関係

	属性			景観認識		実験への参画	
	性別	年代	職業	イメージする色	街並みへの関心	参画の有無	参画の度合い
景観イメージ構造	×	×	×	×	×	○	×

○：関係有り　×：関係無し

- 景観認識、実験への参画と景観イメージ構造の関係について分析を行った結果より、最も景観イメージ構造の変化との関係性が高い事柄は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無であり、参画の度合いではないと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画することが最も重要な事柄であり、赤く飾り付けられた街並みを目にするだけでは、景観イメージ構造の大きな変化は期待できないと考えられる。

7-2　「色彩参画」の効果及び役割

7-2-1　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観認識の関係

(1)赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と街並みをイメージする色の関係

街並みをイメージする色は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことにより灰や茶、青といった色を選びにくくなり、赤や橙を選びやすくなる。また、不参画者と比較すると参画者の方が赤や橙を選びやすくなる。

灰や茶といった色は街並みの地味さや古さといったマイナスイメージによって想起されていることが多い。青は実験の対象地域である高宮町とは関わりの薄い琵琶湖や河川によって想起されていることが多い。赤や橙は活気ある街並みや街並みの暖かさといったプラスイメージによって想起されていることが多い。

これは、実験を行うことによって地域住民は日常的に目にする街並みの景観に対して暖かさや活気を感じるようになるためであると言える。また、不参画者に比べて参画者の方が赤や橙を選びやすくなっていることを考えると、参画者の方が日常的に目にする街並みの景観に対して暖かさや活気を感じるようになると言える。ただ、実験後に赤が多く選ばれていることは、単に「色彩参画」を行う色として赤を選択したため、実験当日に街並みで多くの赤を目にしたことが原因であるとも考えられる。

(2)赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と街並みへの関心の関係

街並みへの関心は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの中の電柱・街路灯への関心が減少する傾向にある。電柱・街路灯に対して関心を持つ理由のほとんどが街並みの利便性に関する理由であることを考えると、実験を行うことにより利便性に対する欲求が減少したと言える。つまり、実験を行うことによって、街並みの利便性を第一に考えることで街並みの景観の価値を軽視するのではなく、街並みの景観の重要性を認識するようになったと言える。これは、今まで気づいていなかった街並みの新たな一面を発見し、現状の街並みの景観の価値を再認識することが出来たためであると考えられる。

統計的に見ると、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に大きな差が見られなかった。つまり、実験への参画の有無は街並みへの関心に影響を大きな影響を与えないと言える。本研究で行った、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は、市民によって街並みの景観を形成することを目的としており、街並みの景観の是非を問うものではない。そのため、本研究で行った、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験では、市民が街並みの不満点や保護したい点を見直すまでは到らなかったと考えられる。

7-2-2　景観認識と景観イメージの関係

街並みをイメージする色と景観イメージ構造との間に明確な関係性が無いことが示された。また、街並みへの関心と景観イメージ構造との間に明確な関係が無いことが示された。つまり、本研究において調査を行った、街並みをイメージする色と街並みへの関心による景観認識は街並みの景観イメージの変化に影響を与えないと言える。

7-2-3　赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージの関係

(1)実験への参画の有無と景観イメージの関係

まず、参画者の景観イメージ構造について考察を行う。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことにより、参画者の景観イメージは変化することが示された。

実験を行うことにより、参画者は活気ある街並みのイメージ、整ったイメージ、騒がしいイメージが強くなると言える。また、実験を行うことによって「不満型」の景観イメージ構造タイプが減少し、「活気認識型」の景観イメージ構造タイプが増加する。つまり、実験を行うことによって参画者は街並みに対する不満が減り、活気を感じるようになると言える。

これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたためであると考えられる。

次に、不参画者の景観イメージ構造について考察を行う。不参画者の景観イメージ構造においても参画者と同様に、実験を行うことにより、活気ある街並みのイメージ強くなるように見える。しかし、統計的には実験を行う前後の不参画者の景観イメージ構造に明確な違いが無いことが示された。つまり、実験へ参画しなかった場合、街並みの景観イメージは大きく変化しないと言える。

(2)実験への参画の度合いと景観イメージの関係

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後の高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がなく、参画タイプと景観イメージ構造の関係性を見出すことが出来なかった。実験への参画の度合いは街並みの景観イメージ構造の変化に影響を与えないと考えられる。

つまり、「色彩参画」による景観形成へ参画すれば、参画の度合いに関わらず景観イメージは変化すると言える。

7-2-4　「色彩参画」の効果

赤を用いた「色彩参画」により、市民が景観に参画することによって、街並みへの不満が減り、活気ある街並みのイメージが強くなることが示された。このイメージの変動は「色彩参画」に用いた色が赤であることが原因であるとも考えられる。しかし、街並みをイメージする色の集計結果と景観イメージ構造タイプを用いてクロス集計を行った結果、両者の間に明確な関係が無いことが示された。街並みの景観イメージと街並みをイメージする色に明確な関係は無く、赤という色そのもののイメージの影響は小さいと言える。つまり、街並みへの不満が減り、活気ある街並みのイメージが強くなった直接の原因は「色彩参画」によって市民が街並みの景観を作り上げたためであると考えられる。そのため、市民による「色彩参画」は、街並みを捉えなおすことに役立ち、活気ある街並みのイメージを強くする効果があると考えられる。

調査対象者の景観認識は景観イメージとは無関係であることがわかった。また、「色彩参画」の度合いも景観イメージとは無関係であることがわかった。景観イメージとの関係性が見られた要素は、「色彩参画」による景観への参画の有無のみであった。このことより、「色彩参画」を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく参画の有無であると言える。

以上より、「色彩参画」による景観形成は、市民が「色彩参画」によって景観に参画するという行為自体に意味がある。赤く飾り付けられた街並みを目にするだけでは「色彩参画」の効果は期待できない。静的な行為としての景観との関わりではなく、「色彩参画」によって、動的に景観に関わるという体験が最も重要な事柄である。

つまり、人は街並みの景観を視覚のみで捉えがちであるが、視覚以外の身体的感覚を用いて積極的に景観に関わることで、街並みの景観イメージが変化し、景観の捉え方が変わると考えられる。

同時に、「色彩参画」の効果は街並みへの関心までは至らないことから、街並みのイメージ形成には寄与するものの、まちづくり等への関心までは直接には影響しないという限界を持つ。

7-2-5　「色彩参画」の位置付け

通常、人は景観を視覚のみによって捉えがちである。しかし、本研究によって、景観を捉える際に視覚以外の感覚を用いて動的に景観に関わることの重要性を明らかにすることが出来た。景観を視覚で捉えると同時に、視覚以外の身体的感覚で捉えることの重要性については、中村が仮想行動の考え方に基づいて述べている。

中村は、景観を捉えるためには、視覚によって「対象との距離感を創り出してモノを外側から把握しそれを形」[1)]として客観視する「静観の美学」ではなく、身体的感覚によって対象の「手どりや温もりを通じて世界を内側から」[2)]捉える「参加の美学」が重要であると述べている。

仮想行動の考え方については、中村が山水画の鑑賞方法の一つである「臥遊」を例に挙げ、「『臥遊』とは、観る者が画中の人物にのり移って、山水の趙遙を楽しむことをいう。空間の知覚は、多少とも、このような仮想の行動に人を誘いこむ性質をもっている。」[3)]と述べている。また、中村は景観を見るときの「私たちの視線はたしかに触覚性を帯びている」[4)]と述べている。つまり、中村の唱える、景観を捉える際に用いる身体的感覚とは、触るように景観を眺めることであり、視覚を用いて仮想的に街並みの景観に触れることであると言える。

ここで、「色彩参画」という体験によって、街並みの景観に“ 触れる ”(視覚以外の感覚によって街並みの景観を捉える)ことを「街並みに触れる」、視覚によって街並みの景観を捉えることを「街並みを見る」と言い換えることが出来よう。

表 7-4　仮想行動の考え方における「街並みに触れる」の位置付け

	視覚による把握	視覚以外による把握
仮想行動(中村)	「静観の美学」	「参加の美学」
本研究における考察	「街並みを見る」	「街並みに触れる」

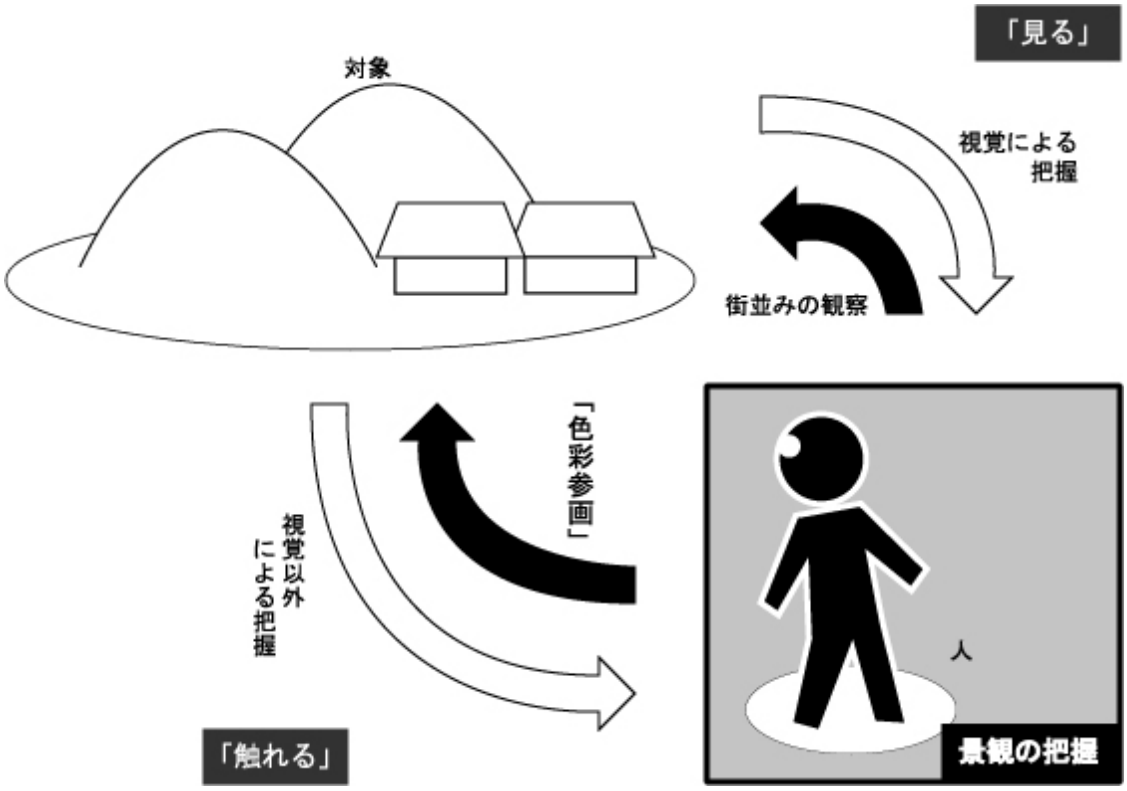


図 7-2　景観の把握における「色彩参画」の役割

「街並みに触れる」を明確にするために、景観形成における手法としての「色彩参画」の特徴を整理する。

「色彩参画」には大きく 2 つの特徴がある。①実際に景観の形成を行うことで視覚以外の身体的感覚を用いて積極的に景観に関わる手法である。②全体の統一性と個の多様性を同時に持つ手法である。

①については「7-2-4　『色彩参画』の効果」で説明を行った。②「全体の統一性と個の多様性を同時に持つ」についての説明を行う。

「色彩参画」は、決められた色(本研究では「赤」)を飾る。そのため、飾り付けられる色は一色のみであり、街並みに全体の統一性が生まれる。この全体の統一性によって、街並み全体としての景観を見ることが出来る。また、「色彩参画」は、決められた色のものであれば何を飾ってもよい。そのために、参画者ごとに様々なものを飾りつける。このように、参画者ごとに景観への参画の仕方が異なることで、街並みに個の多様性が生まれる。この個の多様性によって、街並み全体の景観を構成する、景観構成要素の存在が浮かび上がる。これは、「色彩参画」が景観への参画に色を用いるためである。このように、「色彩参画」を行うことにより、街並みの景観における全体の統一性と個々の多様性を同時に捉えることが出来ると考えられる。

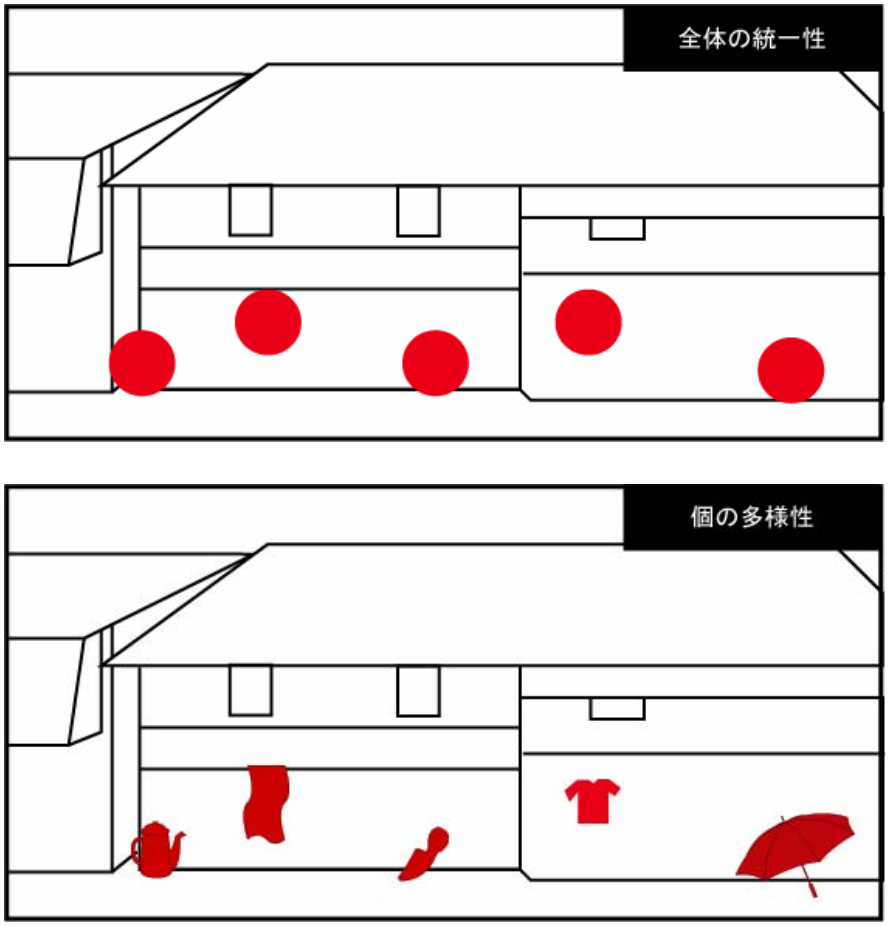


図 7-3　「色彩参画」による全体の統一性と個の多様性の把握

つまり、「街並みに触れる」とは「色彩参画」という体験により、色を用いて実際に景観に参画することである。

以上より、「色彩参画」についてまとめる。

- 「色彩参画」を行うことによって、街並みの景観における全体の統一性と個の多様性を同時に捉えることが出来る。

- 「色彩参画」を行うことによって、「街並みを見る」と同時に「街並みに触れる」ことが体験でき、複合的に景観を捉えることが出来る。

本研究によって、街並みの景観を複合的に捉えるための手法としての「色彩参画」の可能性を示すことが出来た。今後、市民が景観計画や景観協定等の策定といった、日常の景観をつくる際に、市民が参画するための“入り口”として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

7-3　本研究の課題と今後の展望

7-3-1　本研究の課題

本研究の課題を調査方法、実験方法、分析方法の 3 点から述べる。

(1)調査方法の課題

調査対象の選定における最も大きな課題は、調査有効サンプルの少なさである。本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の景観イメージへの影響を明らかにするために、アンケート調査を行った。そのため、実験前後のアンケート調査票の両方に回答したサンプルのみが調査有効サンプルとなる。特に不参画者では、事前のみ、もしくは事後のみにしか回答していないサンプルが多く見られたために、調査有効サンプルが少なくなってしまった。調査対象の選定や、アンケート調査の実施の仕方に工夫が必要であったと言える。結果の信頼性を向上させるためにも、より多くのサンプルを調査することが望ましい。しかし、分析の段階では t 検定やカイ二乗検定を行うことで差の検定を行っており、信頼性を得るために十分であると考えられる数値を得られたために、調査有効サンプルの少なさについては問題無いと考える。

景観イメージに関するアンケート項目の課題は、SD 法を用いた項目のわかりにくさが挙げられる。幾人かのサンプルに記入漏れが見受けられた。SD 法は全ての形容詞対への回答を前提として分析を進めていたために、1 つでも記入漏れがある場合はそのアンケート調査票は無効となる。全ての形容詞対への回答を徹底させる必要があったといえる。調査対象者は高年世代(60 歳以上)が高かったことを考えると、よりわかりやすいアンケート項目となるように工夫が必要であったと言える。

街並みへの関心に関するアンケート項目の課題は、無回答者の割合が高かったことである。これは、同様の調査を実験の前後で二度行ったために、自由記述形式の項目は回答が面倒であったためであると考えられる。事前調査を行い街並みへの関心の傾向を事前に調査することで、アンケート作成時に自由記述形式ではなく選択回答形式とするなどの工夫が必要であったと考えられる。

実験への参加度に関するアンケート項目の課題は、記述スペースの少なさである。筆者が予想していたよりも数多くの種類が、実験当日に街並みに飾り付けられたために、積極的に参加した住民は記述スペースが足りず、枠外にまで回答されているものが見受けられた。アンケート作成時に回答スペースの確保などの工夫が必要であったと考えられる。

(2)実験方法の課題

実験方法の課題は、「色彩参画」によって街並みに飾るつけるものを指定しなかったことである。様々なものが飾り付けられた結果、「『何でも良い』ということで街並みの統一感が欠けていた」という反応を示した参画者が存在した。しかし、街並みに飾り付けるものを考えることも、「色彩参画」によって景観へ参画する一つの工程であると考えられる。飾り付けるものを指定しなかったために、全ての参画者が飾りつけるものを考える工程を体験したと言えよう。そのため、「色彩参画」による景観形成実験後の参画者と不参画者の間に明確な景観イメージの差が生まれたと考えられる。

「色彩参画」に用いる色については、色の選定を筆者のみで行ったことである。今回の実験では、飾り付ける色を「赤」と定めた。これは、彦根市の歴史的な色が赤であるためである。しかし、一部の参画者から「次はブルーでやったら」や「赤は不気味」といった反応を示した市民が存在した。「色彩参画」に用いる色の選定に市民の意見も取り入れることで、より積極的に市民が「色彩参画」を行うことが出来たとも考えられる。

(3)分析方法の課題

本研究では、単純集計による分析と因子分析による分析、クラスター分析による類型化の大きく１つの方法によって分析を行った。特に因子分析による分析の課題を述べる。

因子分析による分析については、「(1)調査方法の課題」でも述べたように調査有効サンプルの少なさが挙げられる。統計的な手法を用いて分析を行うためにはサンプル数が少ない。しかし、因子の固有値・累積寄与率は結果の信頼性を得るために十分であると考えられる数値を得られたために、調査有効サンプルの少なさについては問題無いと考える。

サンプルの類型化については、定量的な評価のみを用いて類型化を行ったことが課題である。特に街並みへの関心タイプの分類においては、より定性的な評価を加えることも検討するべきであったと考えられる。

クロス集計による分析については、ほぼ全ての集計結果について統計的に有意な値が得られず、結果を生かすことが出来なかった。そのため、景観イメージ構造へ影響を与える要素として明らかに出来たのは「色彩参画」による景観形成への参画の有無のみであった。多くのサンプル数を確保すれば、より微細な統計的有意差を把握することが出来る。その意味では、本研究で有意差が無いとした要素についても、より多くのサンプル数を確保した上で分析を行えば、有意差が得られる可能性が残される。より多くのサンプルの確保や調査項目の工夫を行い、「色彩参画」による景観形成への参画の有無以外の要素と景観イメージ構造の関係を調査していく必要があったと考えられる。

7-3-2　今後の展望

本節では、「色彩参画」に関する研究における今後の展望と景観形成における手法としての「色彩参画」の可能性について述べる。

以下に、「色彩参画」に関する研究における今後の展望を述べる。

本研究では対象地域として選定した地域は旧中山道沿いの地域であり、古い街並みを残す一地域のみを対象としている。そのため、都市部などの近代的な地域での「色彩参画」の効果については言及していない。近代的な地域では、本研究で得た「色彩参画」が景観イメージへ与える影響とは違う影響が現れる可能性が考えられる。今後は近代的な地域における「色彩参画」の効果を明らかにすることが望まれる。

本研究では「色彩参画」の一時的な効果については明らかにしたものの、継続的な効果については言及していない。そのため、今後は「色彩参画」による景観形成を毎年行う等、継続することによって得られる効果を明らかにすることが望まれる。

本研究で行った「色彩参画」による景観形成実験は、「色彩参画」に用いる色を赤と選定した。そのため、調査結果には赤を用いたことによる効果も含まれている可能性が考えられる。今後は赤以外の色を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、より明確に「色彩参画」の効果を明らかにすることが望まれる。

以下に、景観形成における手法としての「色彩参画」の可能性を述べる。

本研究によって、「色彩参画」は街並みの新たな街並みの景観を捉えなおすことに役立ち、活気ある街並みのイメージを強くする効果があることが示された。今後、市民の景観形成への積極的な参画を促すために、市民が街並みの景観を考え、見直すための一つの手法として、「色彩参画」が用いられることが望まれる。

「色彩参画」による景観形成実験への参画者は、「色彩参画」を楽しんで行っている様子が見て取れた。事実、「色彩参画」の感想として、「(『色彩参画』を)毎年つづけるとよい」や「街の家だけで参加して楽しい事でございました。」といった意見が見られた。つまり、「色彩参画」は楽しみながら、景観に“触れる”ことが出来る手法と言える。今後、日常の景観づくりに、市民が楽しみながら参画するための手法として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

脚注及び参考文献

[1)]中村良夫：風景学・実践編，p.21，中央公論新社(2001)

[2)]中村良夫：前掲書，p.21，中央公論新社(2001)

[3)]中村良夫：風景学入門，p.95，中央公論社(1994)

[4)]中村良夫：前掲書，p.17，中央公論新社(2001)

謝辞

本稿は、滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻における研究成果を学位論文としてまとめたものである。

本研究の遂行ならびに本論文作成にあたり、テーマの設定、論の構成、プレゼンテーション等、全てにおいて終始適切かつ御懇切丁寧極まる御指導御鞭撻を賜りました滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻近藤隆二郎助教授には、謹んで深甚なる敬意を表します。

お忙しい中、本研究の核である「色彩参画」の実施ばかりか、アンケートにまで快く御協力いただいた、中村善一郎氏、大橋和夫氏をはじめとする高宮学区連合自治会及び高宮夏まつり実行委員会の方々、また小林氏、和田氏、馬場氏ほか彦根市高宮町の住民の方々に深く感謝いたします。

本研究を進めるうえで、貴重な助言をいただいた佐々木和之氏に深く感謝いたします。

この一年間、研究ばかりか生活においても温かく見守ると同時に、公私にわたり御協力いただいた、近藤紀章氏、村上浩継氏、樋口幸永氏、杉本さやか氏、栗田知明氏、迫間勇人氏に深く感謝いたします。

また、常に刺激を与えていただいた、同期ゼミ生である折野佳美氏、西村洋子氏と一年間研究生活を共に出来たことを深く感謝いたします。

私事になりますが、公私生活において触れ合うことも多く、支えていただいた石川研究室のゼミ生の皆さん、ならびに友人の皆さんに深く感謝いたします。

最後に、私をここまで育て、学生生活を支えてくれた両親と妹、祖父母に心から感謝いたします。

2006 年 2 月 24 日

小田　憲治

アンケート調査依頼書(参画者用)
平成 17 年　月　日

高宮の街並みに関するイメージ調査へのご協力のお願い

拝啓 時下ますますご健勝のほどお喜び申し上げます。

本研究室では、市民参加に基づいた地域環境イメージの形成過程に関する調査研究を進めております。本年度は、その一環といたしまして、高宮夏まつり実行委員会にご協力いただき、高宮町にお住まいの皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。

本調査は『2005 サマーフェスティバル in たかみや―中山道高宮宿の夏まつり―』の一環としておこなうことになっております、「百彩創装（ひゃくさいそうそう）」というイベント前後の、高宮の街並みに対するイメージを調査することを目的とするものです。具体的には、同封の事前アンケートと事後アンケートの 2 枚に回答していただくことによって、皆様の抱く高宮の街並みに対するイメージの変化を把握するものです。詳細につきましては、同封させていただきました調査に関する書類をご参照いただければ幸いです。

つきましては、ご多用の折大変申し訳ございませんが、是非とも本調査にご協力いただけますようお願い申し上げます。イベントの前後に、同封の簡単なアンケートにご記入いただく簡単なものでございます。ご協力いただく内容に関しましては、別紙の説明文をご参照いただきますようよろしくお願いいたします。なお、調査データにつきましては、研究以外の目的では一切使用いたしません。

ご質問等ございましたら、下記、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

同封いたしました書類

1. 調査の説明文　1 通
2. 事前アンケート調査書　1 枚
3. 事後アンケート調査書　1 枚
4. 百彩創装説明書　1 組

以上

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒5228533　彦根市八坂町 2500

高宮の街並みのイメージに関するアンケート

事後アンケート（所要時間：約 7 分～15 分）

お願い

皆様の抱く高宮の街並みのイメージの変化を調査するために、高宮夏まつり実行委員会にご協力いただき、高宮にお住まいの皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。高宮の街並みのイメージに関するアンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

（アンケートは**この用紙 1 枚　表・裏**です。）

このアンケートは、**事後アンケート**です。

サマーフェスティバル当日（8 月 14 日 18 時 00 分）以降

にご記入ください。

ご記入済みのアンケートは、事前アンケートと共に、

8 月 20 日（13 時 00 分～15 時 00 分）に

滋賀県立大学の学生が回収に伺います。

※ もし、ご不在の場合は、配布時にお渡しした封筒に事前･事後アンケートを同封し、8 月 20 日の 13 時 00 分までにご自宅の前においていただけますよう、よろしくお願いいたします。学生が回収に伺います。

このアンケートを調査以外の目的で使用することは一切ございません。

このアンケートについてわからないことなどがありましたら、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570

アンケート結果を整理するために必要ですので、**お名前のご記入をよろしくお願いいたします。**

アンケート結果を整理する以外の用途では一切使用いたしません。

お名前：

A．高宮の街並みについてお伺いします。

1. 高宮の街並みでイメージする色は何色ですか？
   イメージする色をご記入ください。

イメージする色	イメージした理由

2. 道に赤い色の何かを飾っていただけましたか？

①飾った　　②飾らなかった　　③その他（　　）

2.で①と答えられた方にお伺いします。

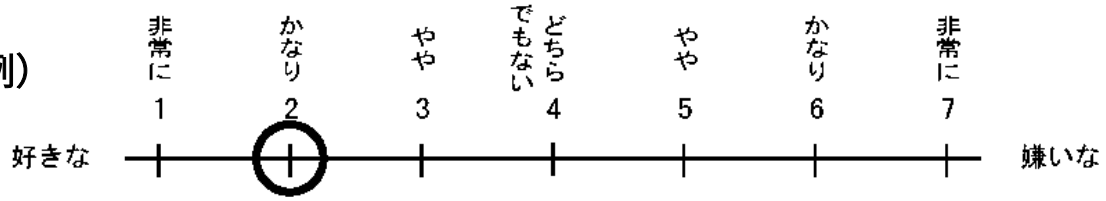
3. どこに何を飾られましたか？

飾ったもの	数	飾った場所
(例) T シャツ	3 枚	家の軒下

右のページに、

高宮の街並みについて対応する形容詞句が 20 対並んでいます。
最もあなたの持つイメージに近いものを一つ選んで**下図のように〇をつけてお答えください。**

（記入例）



4. 高宮の街並みについて、あなたの持つイメージをお答えください。

（注）必ず、全ての項目に○を付けてください。

形容詞対の内容がわからない場合は「どちらでもない」に○をつけてください。
この設問は、深く考えず直感でご記入ください。

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
疎遠な								身近な
質素な								華やかな
古い								新しい
殺風景な								趣のある
複雑な								単調な
活気のある								活気のない
落ち着く								落ち着かない
派手な								地味な
バラバラな								連なった
暗い								明るい
静かな								騒がしい
暖かい								冷たい
緊張した								安らいだ
閉鎖的な								開放的な
伝統的な								進歩的な
整った								乱雑な
特徴的な								一般的な
嫌いな								好きな
親しみやすい								親しみにくい
さびしい								にぎやかな

5. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はありますか？

①ある　　②ない　　③その他　（　　）

5.で①と答えられた方にお伺いします。

6. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はどこですか？

場所	変えたいor守りたい	変えたい or 守りたい理由

B. 百彩創装（ひゃくさいそうそう）についてお伺いします。

7.百彩創装（赤いものが飾られた中山道）を見ていただけましたか？

①見た　　②見てない　　③その他　（　　）

8.このイベントについてご意見、ご感想、アイデア等ございましたら、ご記入ください。
今後、このイベントを行う際に参考にさせていただきます。

ご協力ありがとうございました。

高宮の街並みのイメージに関するアンケート

お願い

事後アンケート（所要時間：約７分～15 分）

皆様の抱く高宮の街並みのイメージの変化を調査するために、高宮にお住まいの皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。高宮の街並みのイメージに関するアンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

（アンケートは**この用紙１枚　表・裏**です。）

アンケートは事前アンケートと事後アンケートの二つがあります。

このアンケートは、**事後アンケート**です。

このアンケートを調査以外の目的で使用することは一切ございません。

このアンケートについてわからないことなどがありましたら、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

滋賀県立大学環境科学部
環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部４回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570

アンケート結果を整理するために必要ですので、**お名前のご記入をよろしくお願いいたします。**

アンケート結果を整理する以外の用途では一切使用いたしません。

お名前：

A．高宮の街並みについてお伺いします。

1. 高宮の街並みでイメージする色は何色ですか？
   イメージする色をご記入ください。

イメージする色	イメージした理由

2. 道に赤い色の何かを飾っていただけましたか？

①飾った　　②飾らなかった　　③その他（　　）

2.で①と答えられた方にお伺いします。

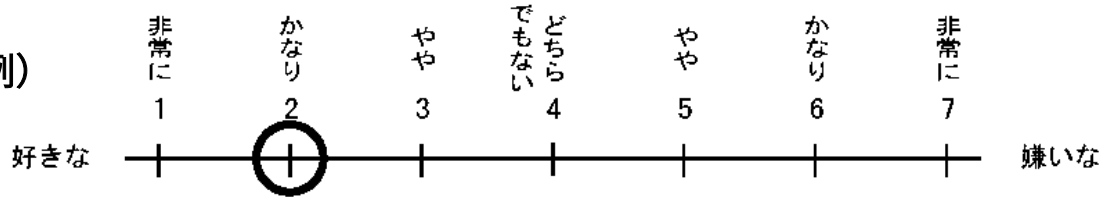
3. どこに何を飾られましたか？

飾ったもの	数	飾った場所
(例) T シャツ	3 枚	家の軒下

右のページに、

高宮の街並みについて対応する形容詞句が 20 対並んでいます。
あなたの持つイメージに最も近いものを一つ選んで**下図のように〇をつけてお答えください。**

（記入例）



4. 高宮の街並みについて、あなたの持つイメージをお答えください。

（注）必ず、全ての項目に○を付けてください。

形容詞対の内容がわからない場合は「どちらでもない」に○をつけてください。

この設問は、深く考えず直感でご記入ください。

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
疎遠な								身近な
質素な								華やかな
古い								新しい
殺風景な								趣のある
複雑な								単調な
活気のある								活気のない
落ち着く								落ち着かない
派手な								地味な
バラバラな								連なった
暗い								明るい
静かな								騒がしい
暖かい								冷たい
緊張した								安らいだ
閉鎖的な								開放的な
伝統的な								進歩的な
整った								乱雑な
特徴的な								一般的な
嫌いな								好きな
親しみやすい								親しみにくい
さびしい								にぎやかな

5. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はありますか？

①ある　　②ない　　③その他　（　　）

5.で①と答えられた方にお伺いします。

6. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はどこですか？

場所	変えたいor守りたい	変えたい or 守りたい理由

B. 百彩創装（ひゃくさいそうそう）ついてお伺いします。

7.百彩創装（赤いものが飾られた中山道）を見ていただけましたか？

①見た　　②見てない　　③その他　（　　）

8.このイベントについてご意見、ご感想、アイデア等ございましたら、ご記入ください。
今後、このイベントを行う際に参考にさせていただきます。

ご協力ありがとうございました。

事後アンケート調査依頼書(不参画者用)
平成 17 年 7 月 30 日

高宮の街並みに関するイメージ調査へのご協力のお願い

拝啓 時下ますますご健勝のほどお喜び申し上げます。

本研究室では、市民参加に基づいた地域環境イメージの形成過程に関する調査研究を進めております。その一環といたしまして、高宮町にお住まいの皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。

本調査は、『2005 サマーフェスティバル in たかみや―中山道高宮宿の夏まつり―』の一環としておこなわせていただきました、「百彩創装（ひゃくさいそうそう）」というイベント前後の、高宮の街並みに対するイメージを調査することを目的とするものです。具体的には、同封の事後アンケートに回答していただくことによって、皆様の抱く高宮の街並みに対するイメージの変化を把握するものです。詳細につきましては、同封させていただきました調査に関する書類をご参照いただければ幸いです。

つきましては、ご多用の折大変申し訳ございませんが、是非とも本調査にご協力いただけますようお願い申し上げます。同封の簡単なアンケートに皆様の抱く高宮のイメージをご記入いただく簡単なものでございます。ご協力いただく内容に関しましては、別紙の説明文をご参照いただきますようよろしくお願いいたします。なお、調査データにつきましては、研究以外の目的では一切使用いたしません。

ご質問等ございましたら、下記、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

同封いたしました書類

1. 調査の説明文　1 通
2. 事後アンケート調査書　1 枚

以上

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒5228533　彦根市八坂町 2500

高宮の街並みのイメージに関するアンケート

お願い

事前アンケート（所要時間：約 5 分～10 分）

皆様の抱く高宮の街並みのイメージの変化を調査するために、高宮夏まつり実行委員会にご協力いただき、高宮にお住まいの皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。高宮の街並みのイメージに関するアンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。（アンケートは**この用紙 1 枚　表・裏**です。）

アンケートは事前アンケートと事後アンケートの二つがあります。

このアンケートは、**事前アンケート**です。

8 月 13 日までにご記入ください。

ご記入済みのアンケートは、事後アンケートと共に、

8 月 20 日（午後 13 時 00 分～午後 15 時 00 分）に

滋賀県立大学の学生が回収に伺います。

※ もし、ご不在の場合は、配布時にお渡しした封筒に事前･事後アンケートを同封し、8 月 20 日の 13 時 00 分までにご自宅の前においていただけますよう、よろしくお願いいたします。学生が回収に伺います。

このアンケートを調査以外の目的で使用することは一切ございません。
このアンケートについてわからないことなどがありましたら、調査担当の小田までご連絡ください。
ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒522-8533　彦根市八坂町 2500

A．高宮の街並みについてお伺いします

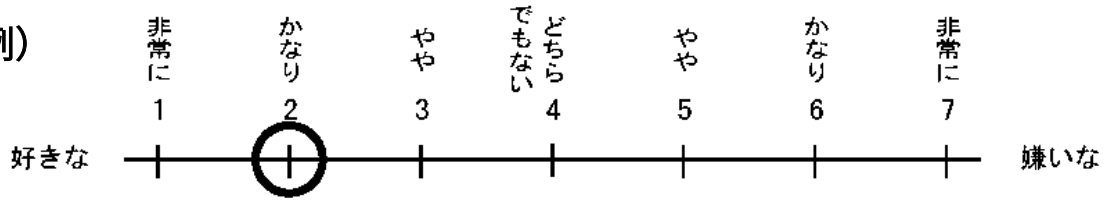
1. 高宮の街並みでイメージする色は何色ですか？
   イメージする色をご記入ください。

イメージする色	イメージした理由
(例) 赤	井伊の赤鬼をイメージしたため

右のページに、

高宮の街並みについて対応する形容詞句が 20 対並んでいます。
最もあなたの持つイメージに近いものを一つ選んで**下図のように〇をつけてお答えください。**

（記入例）



2. 高宮の街並みについて、あなたの持つイメージをお答えください。

（注）必ず、全ての項目に〇を付けてください。

形容詞対の内容がわからない場合は「どちらでもない」に〇をつけてください。
この設問は、深く考えず直感でご記入ください。

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
疎遠な								身近な
質素な								華やかな
古い								新しい
殺風景な								趣のある
複雑な								単調な
活気のある								活気のない
落ち着く								落ち着かない
派手な								地味な
バラバラな								連なった
暗い								明るい
静かな								騒がしい
暖かい								冷たい
緊張した								安らいだ
閉鎖的な								開放的な
伝統的な								進歩的な
整った								乱雑な
特徴的な								一般的な
嫌いな								好きな
親しみやすい								親しみにくい
さびしい								にぎやかな

3. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はありますか？

①ある　　②ない　　③その他（　　）

3.で①と答えられた方にお伺いします。

4. 高宮の街並みで変えたい場所、守りたい場所はどこですか？

場所	変えたい or 守りたい	変えたい or 守りたい理由
(例) 中山道にある電柱	変えたい	電線があるために空がきれいに見えない。

B．あなた自身についてお伺いします。

アンケート結果を整理するために必要ですので、**お名前のご記入をよろしくお願いいたします。**

アンケート結果の整理以外の用途では一切使用いたしません。

性別： (男 ・ 女)	**年齢**：1. ～20 歳　2. 21～30 歳　3. 31～40 歳　4. 41～50 歳 5. 51～60 歳　6. 61 歳～
ご職業：1. 農林漁業　2. 会社員　3. 商工自営業　4. 公務員　5. 主婦(主夫) 6. 無職　7. 学生　8. その他（　　）	
お名前：	

高宮の街並みのイメージに関するアンケート

お願い

事前アンケート（所要時間：約 5 分～10 分）

皆様の抱く高宮の街並みのイメージの変化を調査するために、〇〇の皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。高宮の街並みのイメージに関するアンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

（アンケートは**この用紙１枚　表・裏**です。）

アンケートは事前アンケートと事後アンケートの二つがあります。

このアンケートは、**事前アンケート**です。

このアンケートを調査以外の目的で使用することは一切ございません。

このアンケートについてわからないことなどがありましたら、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

滋賀県立大学環境科学部
環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒522-8533　彦根市八坂町 2500

A．高宮の街並みについてお伺いします。

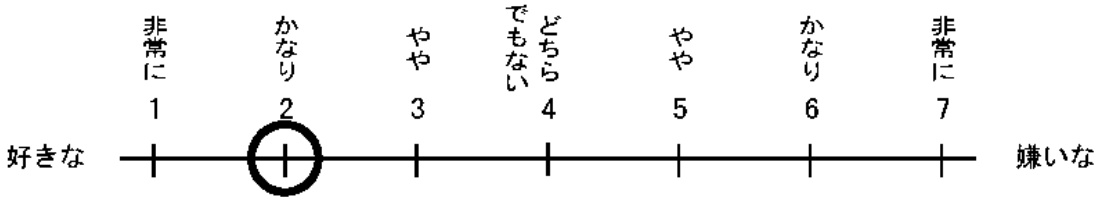
1. 高宮の街並みでイメージする色は何色ですか？
   イメージする色をご記入ください。

イメージする色	イメージした理由
(例) 赤	井伊の赤鬼をイメージしたため

右のページに、

高宮の街並みについて対応する形容詞句が 20 対並んでいます。
最もあなたの持つイメージに近いものを一つ選んで**下図のように〇をつけてお答えください。**

（記入例）



2. 高宮の街並みについて、あなたの持つイメージをお答えください。

（この設問は深く考えずに、直感でご記入ください）

	非常に -3	かなり -2	やや -1	どちらでもない 0	やや 1	かなり 2	非常に 3	
疎遠な								身近な
質素な								華やかな
古い								新しい
殺風景な								趣のある
複雑な								単調な
活気のある								活気のない
落ち着く								落ち着かない
派手な								地味な
バラバラな								連なった
暗い								明るい
静かな								騒がしい
暖かい								冷たい
緊張した								安らいだ
閉鎖的な								開放的な
伝統的な								進歩的な
整った								乱雑な
特徴的な								一般的な
嫌いな								好きな
親しみやすい								親しみにくい
さびしい								にぎやかな

3. 高宮の街並みで直したい場所･モノ、守りたい場所･モノはありますか？

①ある　　②ない　　③その他（　　）

3.で①と答えられた方にお伺いします。

4. 高宮の街並みで直したい場所･モノ、守りたい場所･モノはどこですか？

場所	直したい or 守りたい	変えたい or 守りたい理由
(例) 中山道にある電柱	直したい	電線があるために空がきれいに見えない。

B．あなた自身についてお伺いします。

こちらの項目はアンケート結果を整理するために必要ですので、ご記入をよろしくお願いいたします。

アンケート結果の整理以外の用途では一切使用いたしません。

性別： (男 ・ 女)	**年齢**：1. ～20 歳　2. 21～30 歳　3. 31～40 歳　4. 41～50 歳 5. 51～60 歳　6. 61 歳～
ご職業：1. 農林漁業　2. 会社員　3. 商工自営業　4. 公務員　5. 主婦(主夫) 6. 無職　7. 学生　8. その他（　　）	
お名前：	

事前アンケート調査依頼書(不参画者用)
平成 17 年 7 月 30 日

高宮の街並みに関するイメージ調査へのご協力のお願い

拝啓 時下ますますご健勝のほどお喜び申し上げます。

本研究室では、市民参加に基づいた地域環境イメージの形成過程に関する調査研究を進めております。その一環といたしまして、〇〇の皆様方を対象としたアンケート調査を行わせていただくことになりました。

本調査は、『2005 サマーフェスティバル in たかみや―中山道高宮宿の夏まつり―』の一環としておこなうことになっております、「百彩創装（ひゃくさいそうそう）」というイベント前後の、高宮の街並みに対するイメージを調査することを目的とするものです。具体的には、同封の事前アンケートと夏まつり終了後にお願いをいたします事後アンケートに回答していただくことによって、皆様の抱く高宮の街並みに対するイメージの変化を把握するものです。詳細につきましては、同封させていただきました調査に関する書類をご参照いただければ幸いです。

つきましては、ご多用の折大変申し訳ございませんが、是非とも本調査にご協力いただけますようお願い申し上げます。イベントの前後に、同封の簡単なアンケートに皆様の抱く高宮のイメージをご記入いただく簡単なものでございます。ご協力いただく内容に関しましては、別紙の説明文をご参照いただきますようよろしくお願いいたします。なお、調査データにつきましては、研究以外の目的では一切使用いたしません。

ご質問等ございましたら、下記、調査担当の小田までご連絡ください。

ご多忙中のところを恐縮に存じますが、なにとぞ調査にご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

同封いたしました書類

1. 調査の説明文　1 通
2. 事前アンケート調査書　1 枚
3. 百彩創装説明書　1 組

以上

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒5228533　彦根市八坂町 2500

百彩創装（ひゃくさいそうそう）

スケジュール（平成17年8月14日　9時00分～18時00分）　：　**小雨決行**

8月14日　8時30分～　電柱へ布の貼り付け　学生が担当
（c3〔滋賀県立大学学生団体〕と滋賀県立大学近藤研究室）

9時00分～　飾り付け開始
→「赤いもの」を中山道（無賃橋～高宮文化センター間）に飾ってください。
当日、無賃橋～高宮文化センター間には80枚の赤い布が飾られています。その布と布の間に「赤いもの」を飾ってください。

9時30分　飾り付け完了
→飾り付けは9時30分までに終わらせてください。
（お時間の都合がつかない方は、9時30分～12時00分の間に「赤いもの」を飾っていただいても結構です。）

↑ご協力をお願いします

9時30分～　百彩創装（ひゃくさいそうそう）
→皆さんの手で作り上げた、祭りの日の高宮の街並みを体験してみてください。あなたの知らない高宮宿が見えてくるはずです。新しい高宮宿を発見しましょう！！

18時00分～　片付け開始（赤いもの）
→飾っていただいた「赤いもの」を片付けてください。
（お時間の都合がつかない方は、16時00分～18時00分の間に片付けておいてください。）

↑ご協力をお願いします

18時30分～　片付け開始（布）
→電柱へ貼り付けた布の片付け　学生が担当
（c3〔滋賀県立大学学生団体〕と滋賀県立大学近藤研究室）

19時00分　片付け完了

□ **の部分が皆様にご協力していただきたい時間帯です。**

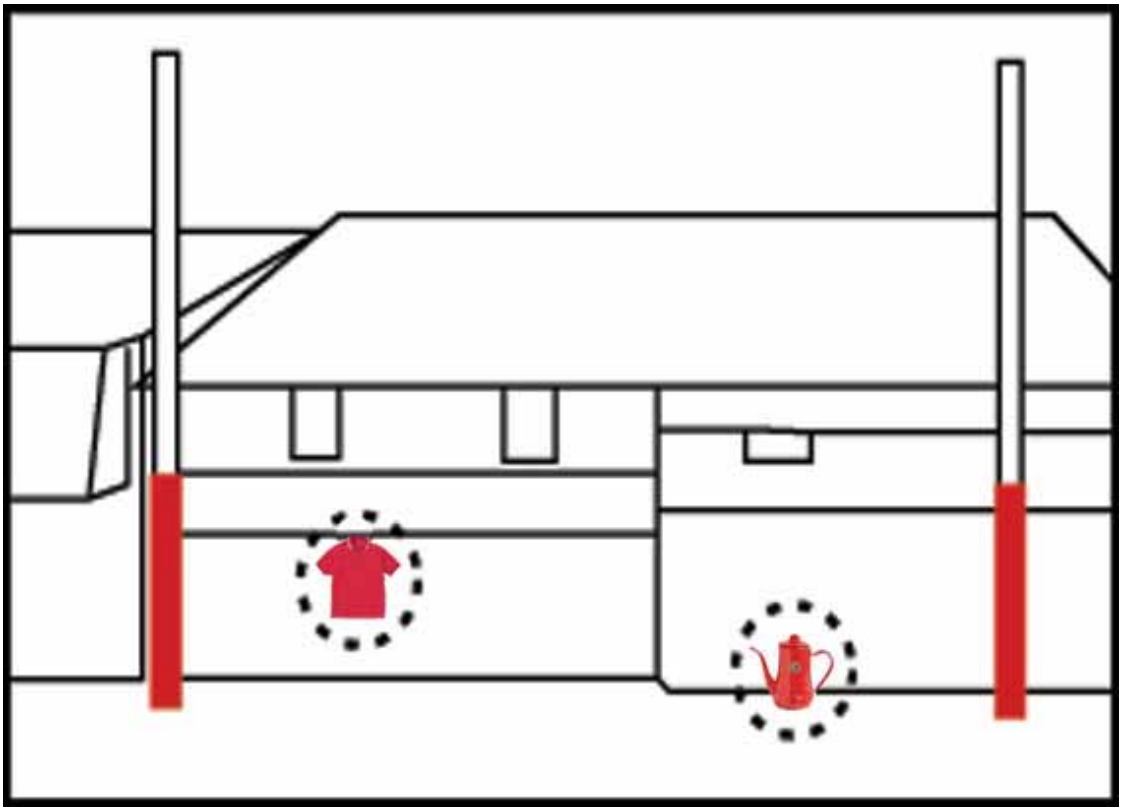
飾る場所

〇中山道（無賃橋～高宮文化センター）までの 500m 弱の間

太線の部分（無賃橋～高宮文化センター間）の**ご自宅付近**に「赤いもの」を飾ってください

飾り方

〇下図のように、**ご自宅付近**の赤い布が巻きつけてある電柱と電柱の間に並べてください。



飾るもの

○「赤いもの」であればなんでも！！ご家庭にある「赤いもの」であれば何でも飾ってください。

例）Tシャツ、座布団、ポット、カサ、おもちゃ、帽子、人形、エプロン、ハンカチなど

飾る数

○いくつ飾っていただいても結構です。

飾っていただくものが多いほどまちは華やかに彩られます。

たくさんの「赤いもの」を道に飾ってください。

「赤いもの」をたくさん飾り、祭りの日を演出しましょう！！

注意点

○片付けの際にわかりやすいように、飾っていただくものには**お名前を付けておいて下さい**。

○雨天の場合は、雨に濡れてもかまわないものを道に並べてください。

○並べていただいたものにつきましては，十分に安全等をご確認の上，配置いただきますようお願い申し上げます。
なお、事故やトラブル等につきましては一切責任を負いませんので予めご了承下さいますようお願い申し上げます。

おまけ

これらの写真は 7 月 23 日に実験的に飾り付けを行ったときの様子です。

あなたの家庭にあるもので、

あなた自身の手によって

まちに晴れ着を着せてみませんか

◆ 関係協力団体

〇近江中山道を楽しむ会
〇c3（滋賀県立大学学生団体）
〇高宮夏まつり実行委員会
〇滋賀県立大学近藤研究室

お問い合わせ先（通常）
滋賀県立大学 環境科学部 環境計画学科 環境社会計画専攻 近藤研究室
TEL：0749-28-8570 FAX：0749-28-8570 E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp
（当日 緊急時・雨天時）連絡先 滋賀県立大学 4 回生 小田憲治
TEL：090-4769-4611

第 18 回『サマーフェスティバル in たかみや』―中山道高宮宿の夏まつり―

百彩創装

あなた自身の手によって、まちに晴れ着を着せてみませんか

◆ はじめに

祭りの日に人は晴れ着を着てまちに繰り出します。晴れ着を着た人が集まると、まちがとても華やかになりますよね。晴れ着を着るのは人だけなのでしょうか。

まちにも晴れ着を着せてみませんか。

本企画は、多くの方の手によって、晴れ着をまちに着せることによって、まちを華やかに演出し、祭りの日の風景を作り上げることで、中山道高宮宿の夏まつりをさらに活気付け、来訪者の方にまちと祭りを強く印象付ける事を目指すイベントです。

高宮にお住まいになられている皆様の手によって、
祭りの日の高宮の風景を作り上げるのです。

◆ 目指すもの

祭りの日の高宮の風景を作り上げていくことです。

それにより、来訪者の方に華やかな高宮の街並みを体験してもらいます。この体験から、来訪者の方にまちに対する興味を深めていただき、まちの多様な魅力を発見していただくことを目的としています。

また、この体験によって高宮にお住まいになられている皆様が、普段とは違う高宮の街並みに出会います。この体験で「高宮の街並みの美しさ」を再確認、新しい高宮宿を発見することができます。

◆ 関係協力団体

〇近江中山道を楽しむ会
〇高宮夏まつり実行委員会
〇c3（滋賀県立大学学生団体）
〇滋賀県立大学近藤研究室

◆ お問い合わせ先

滋賀県立大学 環境科学部 環境計画学科 環境社会計画専攻 近藤研究室所属
小田憲治 TEL：0749-28-8570 FAX：0749-28-8570 E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp

hyakusai

実験説明書

まちに晴れ着を着せてみませんか

百彩創装

コンセプト

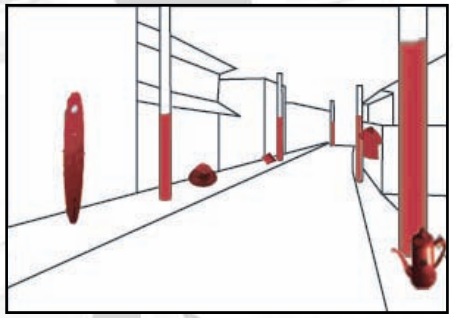
○ご家庭にある「赤いもの」で文化センターと
　中山道をつなぐ！！

お願い

サマーフェスティバルが行われる**8月14日**に
ご家庭にある「赤いもの」を中山道に飾って
ください。

○飾るもの
→「赤いもの」ならば**何でも**。
　座布団、Tシャツ、ポット、おもちゃなどなど

○飾り方
→中山道(**無賃橋～高宮文化センター**)には約80の
赤い布が並べられます。その間に並べて下さい。



実施日

○2005サマーフェスティバルinたかみや
小雨決行
(2005年8月14日　9:30～18:00)
（注）
◆万が一、飾っていただいたものが破損･紛失しましても、
　保証できませんのでご了承ください。

開始時間

サマーフェスタ当日の**9:00～9:30**の間に
中山道(**無賃橋～高宮文化センター**)
に「赤いもの」並べてください。

終了時間

18:00まで飾ってください。
18:00になりますと片付けていただいて結構です。

関係協力団体
高宮夏まつり実行委員会
c3（滋賀県立大学学生団体）
滋賀県立大学近藤研究室

（注）
並べていただいたものにつきましては，十分に安全等をご確認の上，配置いただきますようお願い申し上げます。
なお、事故やトラブル等につきましては一切責任を負いませんので予めご了承下さいますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先
滋賀県立大学 環境社会計画専攻
近藤研究室所属 小田憲治
TEL 0749-28-8570　FAX 0749-28-8570
E-mail t13koda@ec.usp.ac.jp

アンケート調査の説明

皆様にご協力していただきたいことを、以下にご説明させていただきます。

調査の流れ

8/13（土）までに	①**「事前アンケート」へのご記入** (あなたの抱く高宮の街並みについてのイメージをご記入ください)
8/14（日） 午前 9:00～午後 18:00	2005 サマーフェスティバル in たかみや 「百彩創装（ひゃくさいそうそう）」
8/14（月）～8/19（金）	②**「事後アンケート」へのご記入** (あなたの抱く高宮の街並みについてのイメージをご記入ください)
8/20（土） **午後 13:00～15:00**	③皆様のお宅まで、滋賀県立大学の学生が事前・事後アンケートの回収に伺います。

① **8/13（土）まで**に同封いたしました「事前アンケート」にご回答いただきますよう、よろしくお願いいたします。

② **8/14（月）～8/19（金）**の間に同封いたしました「事後アンケート」にご回答いただきますよう、よろしくお願いいたします。

③ **8/20（土）午後 13:00～15:00**の間に滋賀県立大学の学生が、皆様のお宅まで事前・事後アンケートを回収に伺いますので、よろしくお願いいたします。

※もし、ご不在の場合は、配布時にお渡しした封筒に事前・事後アンケートを同封し、ご自宅の前に置いていただきますよう、よろしくお願いいたします。学生が回収に伺います。

後日、皆様にご記入いただいたアンケートの結果をお返しいたします。

わからないことや、ご質問等ございましたら、下記、調査担当の小田までご連絡いただきますようよろしくお願いいたします。

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570

アンケート調査の説明

皆様にご協力していただきたいことを、以下にご説明させていただきます。

調査の流れ

本日　○/○（土） **×××××××**	**①「事前アンケート」へのご記入** （あなたの抱く高宮の街並みについてのイメージをご記入ください）
8/14（日） 午前 9:00～午後 18:00	2005 サマーフェスティバル in たかみや 「百彩創装（ひゃくさいそうそう）」
8/21（日） **反省会**	**②「事後アンケート」へのご記入** （あなたの抱く高宮の街並みについてのイメージをご記入ください）

① 同封いたしました「事前アンケート」にご回答いただきますよう、よろしくお願いいたします。

② 8/21 の夏まつりの反省会の際に、もう一度伺わしていただきますので、「事後アンケート」へのご協力をよろしくお願いいたします。

後日、皆様にご記入いただいたアンケートの結果をお返しいたします。

わからないことや、ご質問等ございましたら、下記、調査担当の小田までご連絡いただきますようよろしくお願いいたします。

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻
助教授　近藤隆二郎
Tel：0749-28-8315 / FAX：0749-28-8570
調査担当：小田憲治（学部 4 回生）
E-mail：t13koda@ec.usp.ac.jp　Tel/FAX：0749-28-8570
〒5228533　彦根市八坂町 2500

APPENDIX

1. 実験趣旨説明文
2. 実験説明書
3. 実験スケジュール
4. アンケート調査依頼書（参画者用）
5. 事前アンケート調査依頼書（不参画者用）
6. 事後アンケート調査依頼書（不参画者用）
7. アンケート調査説明書（参画者用）
8. アンケート調査説明書（不参画者用）
9. 事前アンケート（参画者用）
10. 事前アンケート（不参画者用）
11. 事後アンケート（参画者用）
12. 事後アンケート（不参画者用）
13. サンプルデータ一覧